

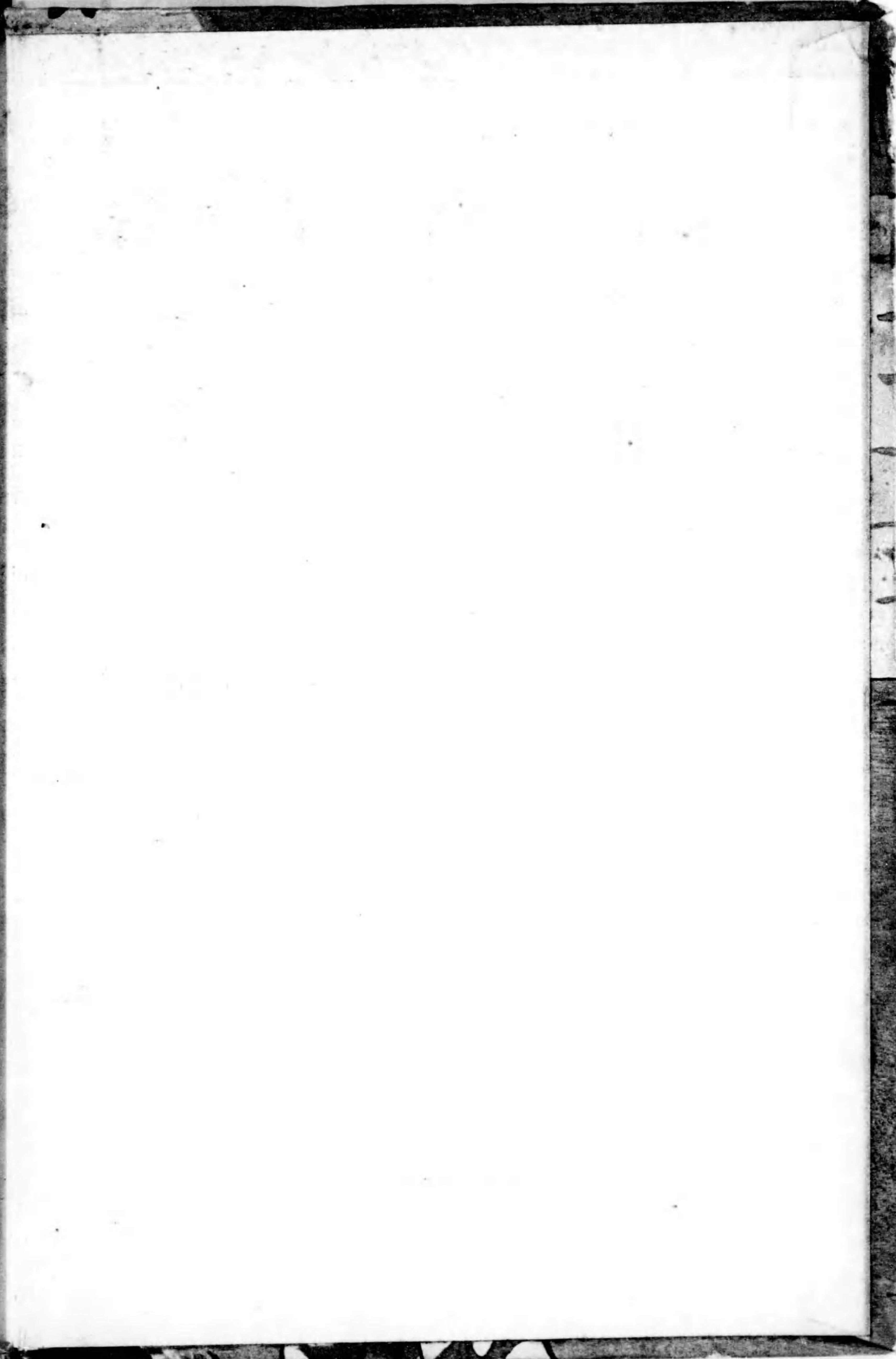
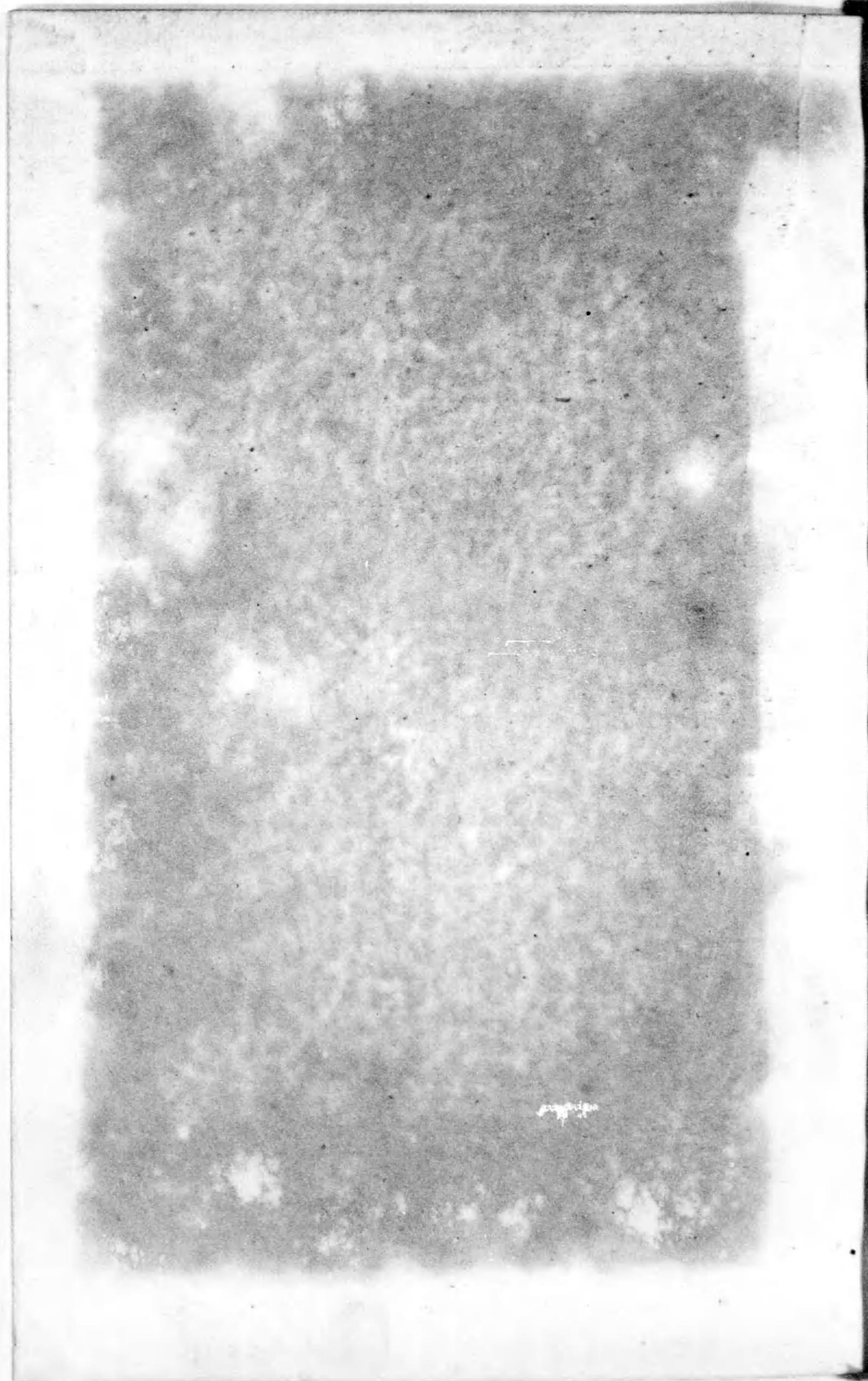


0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10<sup>18m</sup> 11 12 13 14 15

始









特106

569









|        |     |
|--------|-----|
| 關の路    | 三   |
| 其の面影   | 三六  |
| 暢氣者    | 三四  |
| 明け行く空  | 四〇  |
| 昏睡の後   | 四七  |
| 誓ひの言葉  | 五五  |
| 盡きぬ縁   | 六四  |
| 行違ひ    | 六九  |
| 花鳥     | 七五  |
| 心配     | 八一  |
| 中止     | 八九  |
| 雨の明くる日 | 九九  |
| 人格的魅力  | 一〇〇 |
| 白日の鬼   | 一一一 |

|        |     |
|--------|-----|
| 疑ひ     | 二七  |
| 心の病氣   | 三三  |
| 應接室    | 三三  |
| 男の戀    | 三八  |
| 嫉妬     | 四六  |
| 冬の雨    | 五三  |
| 父の無い子  | 六〇  |
| 金の     | 六八  |
| 母の寢床   | 七五  |
| 呪はれた人々 | 八三  |
| 甥      | 八九  |
| 愁嘆場    | 一〇〇 |
| 眞心から   | 一〇九 |
| 一生一度   | 一一八 |



人の罪 (後編)

小栗風葉作

人の罪

|       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 日     | 身     | 解     | 告     | 其     | 謎     | 書     | 恐     | 復     | 行     | 春     |
| 蔭     | の     | 決     |       | の     |       |       | 水     |       | く     | の     |
| 者     | 上     | の     | 白     | 夜     |       | 置     | 病     | 活     | 々     | 曙     |
| ..... | ..... | ..... | ..... | ..... | ..... | ..... | ..... | ..... | ..... | ..... |
| 三三    | 三四    | 三五    | 三六    | 三七    | 三八    | 三九    | 四〇    | 四一    | 四二    | 四三    |

竹久夢二挿畫



迎ひ

東京の留守宅から出向いて来た染井の姿が、突然秦博士父子の前に現れた時、今日あたりそんな迎ひの来ようとは思つても見なかつた父子は、無論意外でもあり不審でもあつたが、それよりも何か不吉なものにでも襲はれたやうな忌はしい感が先に立つた。それは縁子が以前から染井を見る度に感ずる一種の強迫観念であつたが、其時は博士も同じやうにそれを感じたのである。

博士の一行は伊東の其の温泉宿で、十疊の座敷に八疊の次の間附きの贅澤な特等間に落着いてゐた。八疊の方には寢床を延べて、手當が早かつに爲めにデフテリヤも極軽くて濟んだ裕少年が、大事を取つて未だ寢させられてゐた。縁子が散歩の次手に買つて来てくれた繪本や、文房具や、玩具の活動寫真などが枕元に散らばつた。そして多賀子と縁子とが、其の枕元で挽物細工の輪投げをして、裕の退屈がるのを紛らせてゐる。十疊の方の座敷には、今し方一風呂流して来たばかりの博士が、袴丈の詰まつた宿の浴衣の寛いだ姿で、ぱたり／＼團扇使ひをしながら、子共と一緒に無邪氣さうに遊んでゐる二人の若い女の其の睦じい様を、笑ましげに眺めてゐるのであつた。

何か面白い事でもあると、先づ多賀子の斜端な笑ひ聲に續いて、縁子の優しい慎ましい笑ひ聲が零

れて、同時に陰氣な裕もころ／＼と賑かな笑ひ聲を立てる。すると、上の間の博士の肉厚な顔にも穏かな微笑が瞬ける。人に對して餘り分け隔てをしない博士は、殊に子煩悩でもあるので、何時の間にか裕を自分の孫でもあるやうに可愛く思つてゐた。そして多賀子が不身持で評判の女である事も忘れたかのやうに、彼女に對しても自分の娘と變らないやうな親みを見せてゐた。それは江間俊作の妹であり、其の妹の子であると云ふ事が、然うした親みを母子に寄せさせた一つの原因であるに違無いが、然し何人をも容れ、何人をも愛する事の出来る博士の其の廣い胸が、彼等に對しても當然さう爲せたのである。

其處へ突然染井が遣つて来たのであつた。取次の女中が敷居際に膝を突いて、お邸から何方かお見えになりましと知らせる後から、染井の細い靱かな體が最上座敷の前へ来て立つてゐた。毎も色の蒼白い冷たい顔が外の暑さで少し充血して、薄く汗ばんだ額に、其の長めに伸ばした柔かな髪の毛の零れたのを片手で些つと撫で上げると、彼は不思議さうに室内の有様を眺めた。別けても其の際々しい装をした女優鬚の多賀子と、寢床の上に腹這ひになつてゐる裕の、病み上りらしい脆弱な姿とを注意深く眺めた。そして訝しさうな其の目に、見る／＼冷かな嘲りの色が浮ぶと、左の目でぼちりと瞬きした。

今迄賑かな笑ひ聲で燥いでゐた座敷は、俄に水でも打つたやうにびたと沈黙して了つた。多賀子は



其の變性男子のやうな不思議な青年の顔形を、何か珍しいものでも見るやうに無遠慮にじろく眺めた。腹這ひに臥そべつてゐた裕も、初めの中は細い頸を擡げて無心さうに仰いでゐたが、染井の片方だけ働く目がちつと自分の上に注がれてゐるのを見ると、急に憎えたやうな顔をして上目使ひをした。そして皆の黙り込んだ顔を不安さうに見廻しながら、到頭べそを掻き出した。

染井は女中と入れ代りに縁側の敷居際に畏まつた。彼は來ては濟まない所へでも來たやうに、妙にもじくと氣兼ねしい様子を見せながら、其の云ふ事は面憎いほど落着いてゐた。

「奥様のお云附けで、お迎ひに参りました。」と云つたが、其の切り口上が何だか人を威嚇するやうにさへ聞えた。

「迎ひに來た？ 私達を。」と博士は不機嫌さうに眉を擧めて、「何か急な用事でも出來たのか。」

「は、御用事も出來ましたし、それに奥様が大層御心配の御様子で、一刻も早く、是非私にお供をして歸るやうにと、厳しいお云附けで御座いました。」と瞭り云つて、染井は上の中の博士の顔から、次の間の縁子の顔へ敏捷く視線を振つた。

縁子の顔にも、博士の顔にも、一樣にさつと不安の色が動いた。が、博士は直ぐそれを拭ひ消さうとするやうに、大きな掌でべろんと一つ顔を撫でると聞いた。

「一體それは何んな用事なのか。故々迎ひに來るくらゐだから、君にも分つて居るだらう？」

「其の急な用事と申しますのは、朔郎様が突然お歸りになりましたので……」

「何、朔郎が歸つて來た？」

「まあ、兄様が歸つて來らしたのですつてー」

「は、奥様はそれに……」

「然うか。いや、然うか、朔郎が歸つて來たのか。」と博士は打つて變つた上機嫌で和こく頷いたが些つと考へて、「では、左に右く此處を直ぐ引揚げる事に爲よう。彼れも久振りで歸つたのに、私や縁が不在では然ぞ失望したらう。」

「全くですわね。けれど阿父様、今日是从ら直ぐ立つといふ譯に参るでせうか。」

「然うさな。船は最う朝出て了つたし、大仁へ出る自動車も在るか無いか……」と太い頸をぶる／＼掉つて、「何しろ不便な處だからな。」

「ですが、一體最う何時でせう？」と縁子もそはくしながら誰にとも附かず云つた。「私、早く歸つてお目に懸りたいわ。」

「今丁度四時です。」何か未だ云ひたさうにもぞく／＼してゐた染井も、急いでニツケルの時計を帯から引出して見て、「乗合自動車は最う無いかも知れませんが、特別に爲立てさせたら如何でせう？」

「さあ、それがだ……左に右く女中を呼んで聞いて見よう。」と博士は手近の電鈴を押した。



と、直ぐ女中が来た。博士は大仁まで自動車を一臺爲立てるやうに命じてやると、直き帳場から番頭が其の返事を齎して来た。伊東と大仁間の自動車は漸く二臺で連絡を取つてゐるので、其時は最う二臺とも伊東には居なかつた。強ひて今日立つとすれば、がた馬車を買切つて行くのだが、それだと大仁まで六時間はたつぷり懸る。今四時些つと過ぎだから、支度や何や彼で五時に立つとして、大仁へ着くのは夜の十一時である。三島からの東海道本線には、夜々中でも汽車の便はあるとしても、大仁から三島へ出るまでの豆駿鐵道が、其の時間には最う連絡する列車が無い。で、今日是从無理をして立つても、結局大仁で一泊しなくてはならない事になるから、却つて明朝早く立つた方が便利だと云ふ事になつた。

自分達だけ残されて、博士や緑子に歸つて了はれるのでは無いかと、曩から傍で内々心配をしてゐた多賀子も、それで一先づ安心した。

「あの、誰か御遠方からでも？」と彼女は少し體を居去り寄せながら小聲で緑子に訊ねた。

「え、私の兄ですが、海軍に出てゐるものですから、今度久振りに艦から歸つて來ましたのよ。」

「まあ、海軍の軍人様。」と目を輝かして、「貴方は可う御座んすわね、明日御歸りになれば、然ういふ立派な阿兄様にもお逢ひになる事が出來て。」

「それも一月や二月逢はないのでは無いのですから、最う半年の餘も逢はないのですから。兄妹つて

本當に好いものね。殊に私達は二人きりの所爲か、何だか一倍懐しいのよ。」

「然ぞねえ。」と溜息を吐いた。

緑子が包み切れぬ嬉しさを聲にも顔にも現はに見せれば見せるほど、多賀子の顔は次第に曇つて行つた。緑子ははつと氣が附いて口を噤んだが、最う遅かつた。

「私なぞ十年振りで斯うして歸つて來たんですが、親は亡くなつてゐますし、兄妹は何處へ行つたか行方知れずですし、本當に心細いのですわ。」と多賀子は沁々云つた。

「同情しますわ。」と緑子も身に抓されたらしかつたが、今日はそれでも彼女の方が慰め役になつて、「けれど、お亡くなりなすつた方は爲方ありませんでも、お一人には何時かお逢ひになれますわ。ね、お互ひに失望しないで、行方の知れるまでは何んな事があつても捜しませう。私は自分の一心でも屹度捜し出す意りですの。」

「有難う。けれども可う御座んしたわ。」と多賀子は努めて和こりして、「父は亡くなつても、兄妹には逢へなくつても、其代り貴方のやうな方にお目に懸れて、私も來た効がありますわ。何うぞ此處ばかりで無く、東京へお歸りになつてからも、何時までも、兄同様お近しくお願ひ申しますわ。」

「そりやもう！是非ね。」

二人が裕の枕元で、密々とそんな話を取交してゐる其の睦じさうな様子を、梁井は敷居際に長まつ



たまた、例の冷たい澄んだ目を光らして見てゐた。そして二人の話聲が弾んだり沈んだりして、聞取れなかつたりする切れぐの言にも、彼は深い注意を拂つて聞耳を立てた。

「明朝と決つたら、君も袴でも取つて、一風呂汗を流して來たら何うだ。」何か獨りで考へ事に氣を取られてゐた博士は、囊からちつと其處に動かないでゐる染井の姿に氣が附いて云つた。

「は、有難う存じます。」と染井は丁寧に頭を下げると、其のまゝ敷居の中まで膝を蹴らせた。そして暫く又もじくしてゐた後で、「先生、私些つと先生のお耳にお入れ申して置きたい事が御座いますの

ですが……」

「何？」と博士は氣の無い目を見向けて、「必要の事なら遠慮無く話し給へ。」と無愛相に云つた。

「奥様が大層御心配なすつて居らつしやるので御座います。實は何も彼も奥様は御存じなので……」

「何を？ 最つと瞭り云ひ給へ。」

「お嬢様や、それにお客様もお居ですから……」と染井は次の間の二人の方をちらと見遣つた。

「管はん。話すべき必要のある事なら、遠慮無く話して宜しい。」

「は、では申上げますが、先生がお嬢様を御同道で、故々此方へお越しになつたのは何ういふ御目的か、奥様は最うお察しになつたのです。」

「何ういふ目的？ 私は……私は保養の目的だ。」と博士は激して吃つた。

「それです、奥様はそれからしてお氣に障へて居らつしやるので、保養と云ふ御口實で、奥様に祕密で江間君を連れに來らしたのを御立腹なのです。」と染井は早口に云つて、和やりとする。

「何を云ふ？」博士の顔色は變つた。

「奥様は江間君から先生へ參りました手紙を御覽になつたのです。そして事實の真相を悉かり御承知になつたのです。奥様の御心配も御立腹も御尤もだと思ひます。あゝいふ境遇の人間に、餘り御心配なさるのは危険かと思ひます。」

「君は……君は……立入つて口を利かなくとも宜しい。」と叫んだ彼は、烈しい侮辱の感と、其の怒りに、肥つた體をぶる／＼顛はせながら、「康子が私に對して何ういふ感情を有たうと、それは君などの立入るべき性質の問題では無い。私が江間に心酔しようとする爲まいと、それは私自身の意志の自由で、他人の干渉には與からん。君は又江間の事となると、何故然う執拗に拘つて來るのだ？」

「先生には私の心持が能く分つて頂けないのです。」と染井は心外さうに云つて、ちつと下唇を噛んだ。

「私は私ぐらゐお邸の御恩を受けた者は無いと自分で思ひますから、私には何よりもお邸が大切なのです。其の大切なお邸に少しでも波瀾があつたり、不利を及ぼしたりするやうな事を、私としては黙視するに忍びないのです。知らなければ左に右く、知つてゐて黙つてゐるのは、義として出來ない事のやうに考へますから。私だつてそれは、今の私のやうな立場に立つのは、自身の爲めから云ふと



非常に不利益な事も承知してゐます。承知しながら、私は進んでお邸の爲めに其の不利益な立場に身を置いてゐますので。固より先生のお叱りも覺悟です。お嬢様のお憎しみも分つてゐます。けれど、義を見て爲ざるは勇無き也とか、私は道義上の卑怯者になりたく無いのです。」

「君は、君自身の行爲を、義の爲めにして居ると信じて居るのか。」と博士は冷かに云つて、厚い唇をへの字に結んだ。

「然う信じて頂けないと云ふ事は、私實に残念です。」

染井の然う云つた時の言にも顔にも、恐しく緊張した表情が見えて、雙の目には涙すら煌めいてゐた。彼自身眞實に然う感じてゐるのか、それとも偽りの感情を然うまで巧みに眞實化してゐるのか、當の對手の博士にも分らなかつた。多賀子の如きは、次の間に居て話も能くは分らぬながらも、染井の其の態度を見ただけで、一途に何か博士の爲めを思つて喋つてゐるものと信じたほどであつた。

「君が若し衷心から邸の爲めを思つてくれて居るものとするれば、其點は私も感謝して置かう。然し私には私の思想もあれば感情もある。外の事は寛容も爲ようが、私の意志に立入る事だけは遠慮して貰ひたい。宜しいか。其點は君も能く心得て置いて貰はないと、今後一つ家庭に生活して行く上にも、私は始終君に對して不快を感じなければならぬ。」と博士は穩かに云つた。

「は。」と染井も素直に頭を下げるより外は無かつた。

けれど、柔かい髪の毛の零れた女のやうな狭い額越しにちらと博士を見た彼の其の目は、蛇のやうに毒々しかつた。そして再び頭を擧げると、左の目でぼち／＼瞬きして、何か又云はうとして唇を動かし懸けたが、偶と思ひ返して目を逸らした。其の目は次の間の縁子から、多賀子から、裕へと閃くやうに移つた。多賀子は博士や染井の口から江間と云ふ言が二三度聞えたので、それが兄の俊作に何ういふ關係のある話か、有繋に氣懸りになつて、つい其方へ目も心も引附けられてゐたが、染井の其の冷たい鋭い目が自分へ閃いた時、何とも云へない不氣味な氣持がして、はつと顔を伏せて了つた。そして何と云ふ事は無しに、裕の額へ急いで手を遣つて見た。

夜の海

夏の淡い夕月が、サフヒヤ色の薄り暮れ懸つた空に夢のやうに浮んでゐた。海邊であるのと、湯の量の豊富な温泉地なので、水分の多い大氣も、沖から絶えず渡つて來る風の戦ぎで涼しかつた。濱邊へ出ると、縮の浴衣では輕過ぎるくらゐ裾や袂が翻つて、今日洗つたばかりのさら／＼した束髪の後れ毛が、後から／＼と吹き零れたが、それが急にぱたりと歇んで了つた。と、湯の匂が何處からとも無くふはりと鼻へ來る。そして鹽分を含んだ海氣がしつとりと皮膚を汗ばませる。海岸地特有の夕



田が来たのである。夕飯の後で一人そつと宿の庭木戸から出て来た縁子は、濱に引揚げられた漁船の小縁に凭れて、曩から何を見るときも無くぼんやり沖へ目を遣つてゐた。靜に暮れて行く沖には、最う漁火の影が赤い鬼灯のやうに浮んだ。海上二三里の向うに薄墨で暈したやうな初島の裾にも、漁家の灯がちろ／＼見え出した。避暑客の入り込むのは是からなので、今は未だ涼みに入る人も少なかつた。廣い濱邊にぼつちりと唯一組、浴衣懸けの男女の仄白い姿が浪打際に踞まつてゐる傍を、丈の高い男の黒い姿が、若い好い聲で琵琶歌を吟じながら通つて行く。と、其の後ろ姿も直き見えなくなつて、薄暗い暮色の彼方に歌の聲だけ段々遠ざかつて行つたが、それも聞えなくなつた頃には、波打際の男女の姿も何處へか居なくなつてゐた。後には最う縁子の外には、人影らしいものも其處らに見えなかつた。

寂しい夕暮の濱邊に一人ぢつと居残つた縁子の胸には、ひた／＼と夕汐の満ち上るやうに物悲しさが一杯になつて来るのであつた。折角かうして訪ねて来ながら、行方も分らない俊作の事が遺瀨無く思はれた。自分故に俊作を庇ふ其事の爲に、家長として苦しい立場に立たなければならぬ父の心中も思ひ遣られた。曩染井が仄めかした母夫人の怒りも氣に懸つた。明日東京へ歸つて行つて、自分には殊に優しくしてくれる兄の朔郎に、久振りで逢ふのは嬉しいが、今度の旅行の目的を母に知られたと思ふと、歸つて行くのも何だか氣怯れがする。父と自分とで義理ある母夫人を袖にしたやうで、

顔を合せるのも愁い。それに自分達の今度の事が母に不快を與へれば、秦家と俊作との間はそれだけ又疎隔されるやうで、それも憂かつた。そして母の不快を買つてまで自分が俊作を思ふといふ事が、人の娘として有るまじき事のやうにも思はれて、今迄に無く心を責められもした。彼女の小さな胸は然うした様々な思ひに亂れて、そして其の胸に餘つた悲しい思ひが、幾度と無く切ない溜息に洩らされるのであつた。

「お嬢様、貴方はこんな處にお獨りで居らしたのですか。」

何か自分の後ろに暗い影でも射したやうな氣勢がしたと思ふと、靜に聲を懸けられた。縁子ははつと物思ひから覺めて振返つた。見ると、宿の浴衣を着流した染井が、襟頸へ息の被るほど近々と身を寄せて立つてゐた。

「まあ、染井さん、貴方でしたの。」縁子は弾かれたやうに船の小縁から放れて、眞直に體を立てた。

「お嬢様、吃驚なすつたのですか。御免下さい、出抜けに失禮しました。」と染井は和やく／＼笑つて、體を少し踞めた。

「いゝえ。」と縁子は無愛想に横を向く。

「貴方は何をそんなに考へ込んで居らしたのですか。」と染井は對手の其の無愛想にも頓着無く、不斷とはぐつと馴々しい調子で「ね、貴方は何か斯う、甚く苦しんで居らつしやるやうぢやありません



か。

「いえ、少しも。」

「お嬢様」と暫く間を置いて、ごくりと唾を呑むと、「貴方は何うしてせう？ 私に限って何時でも然うして冷淡になさるのですが。切めて外の者と同じやうに、人並にだけでも扱つて下さつても可いぢやありませんか。」

「私、別に貴方にだけ冷淡にした覚えはありませんわ。」

「然うでせうか。お嬢様、本當に然うでせうか。」と彼は毎もの粘り強い緩くりした調子で云つた。「貴方は私と云ふ者が目に觸れさへすれば、決して避けよう避けようと爲さるので、然うされる私の身になつては、随分情無いと思ひますよ。あゝして一つお邸に暮らして居ましても、私とお嬢様と親しく口を利くやうな事は、一月にも二月にも殆ど無いと云つて可いくらゐるもの。私の方から色々機会を作つてお嬢様に近づいても、お嬢様の方で屹度其場を外づしてお了ひなさる。私は何故そんなに貴方に擯斥されなければ成らないのかと、全く残念でなりません。」

「何も貴方を擯斥してゐる譯ぢやありませんわ。」と縁子も愁さうに俛れて、「だつて、私は然ういふ性分ですもの。」

「お嬢様、恍惚ぢや可けません。」と染井は鋭く云つた。

「え？」

「私が貴方に近づけば、貴方は毎も屹度お逃げになる。それなのに、江間君には……江間君は……」と彼は激して吃ると、其のまゝ些つと口が利けなかつたが、漸と冷静に返つて、「江間君は貴方に背き先生に背いて行方を晦ました。それでも貴方は、斯うして故々後を追懸けて來らしたくらゐぢやありませんか。して見ると、強ち誰にも冷淡な御性分とは思へません。私にだけ特に冷淡に爲さるので。お嬢様、貴方も其のくらゐ私に面當がましく爲すつて居らつしやりながら、それでも私を擯斥してゐないと何の口で仰しやるのでせう。」

「貴方は又、何うして然う私に付き纏はなければならぬのでせう。」縁子も對手の餘りに立入つた無遠慮と、自分勝手な邪推とにかつとして云つた。「私が犬を調かつて居れば犬の傍へ、ピアノを弾いて居ればピアノベンチへ、本を讀んで居れば窓の外にと、貴方は意地になつて私に付き纏つて居らつしやるぢやありませんか。私は部屋に居ても、庭を歩いてゐても、始終貴方の氣勢にびく／＼して氣の落着いた事はありません。今だつて私が獨りでそつと此處へ來て居れば、何時の間にか最う後ろへ來て居らつしやる。私は何だか貴方と云ふ方が氣味が悪いのです。いえ、氣味を悪く思はせるよう思はせるやうにと、貴方が爲さるのですわ。かう申して失禮なら、貴方も何うぞ私などに付き纏ふやうに思はせないやうにして下さい。」

罪の人



「然う、私は貴方に付き纏つてゐるかも知れません。いや、儘に付き纏つてゐるのです。然しそれを氣味悪くばかりお取り下さつては遺憾です。ですが、何故私がそんなに付き纏ふのか、貴方にだつてそれはお分りになつて居ない事も無いでせう。」

染井は鞆かな體を些つと前踢みにさせて、緑子の顔を西明りに近々と覗き込んだ。其の目は暗闇に光る猫の目のやうにきら／＼して、蒼白い美しい額に黒い髪がばらりと零れてゐた。それは此世の者では無い、何か化妖な物にでも不意に顔を差覗かれたやうな氣がして、緑子はぞつとした。そして躊躇めくやうに後ろへ身を退くと、體を固くして息を呑んだ。

「え？ お嬢様、貴方は私が何故そんなに貴方に付き纏ふのか、疾うにそれは御存じでせう？」と染井は彌張り同じやうな形で彼女の顔を覗き込んだまゝ繰返した。

「私、そんな事存じません！」と弾き返すやうに叫んだ。

彼女はそれまで染井の不氣味な凝視にちつと堪へて、強ひて反抗的に其の目と睨み合つてゐたが、然う叫ぶと同時に耐らなくなつて自分の目を逸らして了つた。そして何か不淨な物でも避けるやうにハンケチで横顔を掩つた。

「御存じ無いのですつて？」と染井は詰め寄るやうにして、其の掩はれない半面の方へ顔を持つて行く。

「行つて下さい。彼方へ行つて下さい！」と緑子は烈しくハンケチを掉つて叫んだ。

彼女の體はじり／＼と押附けられでも爲るやうに自然と後ろへ下つて行く。染井は又何處までもそれを追ひ詰めるやうに、先方が一寸退れば一寸だけ、一尺退れば一尺だけ、じり／＼と寄つて行くのであつた。

「お嬢様、貴方は私を怖がつて居らつしやる。」と染井は覗き込んでゐた顔を衝と擡げて、「何故然うでせう？ 豈か私が蛇の性で、貴方が失禮ながら蛙の性と云ふ譯でもないものでせう。そんなに何も逃げよう逃げようと爲さらずに、今日だけは毎ものやうに外づさうと爲さらないで、是非何うぞ私の云ふ事を終ひまで聞いて下さい。」

「こんな處で、私は何も貴方から伺ふやうな事は無い筈ですわ。話があるなら父の前でなり、人の居る處で仰しやつて下さい。」緑子は身近に迫つて來てゐるらしく豫感される或る忌はしい不安に、胸をわく／＼させながら一生懸命に云つた。

「貴方は淑女だ。究り男女差向ひの話は迷惑だと仰しやるのですか。それなら何時か江間君が國へ歸るあの晩は、貴方は何うでしたでせう？」

「あの晩、何うだと仰しやるの？」と彼女は屹となつた。



「何うでもありません。唯江間君とあゝして暗い處で人目を隠れて立話をなすつて、それが格別貴方の淑徳を傷けたでも無いやうなら、私が此處で暫くお話を爲たつて、大して貴方の御迷惑にはなるまいと思ふのです。」

「まあ、随分」と腹立しさうにハンケチを握り締めたが、「貴方が行らつしやらなければ、私が行くばかりです。」

緑子は衝と身を翻して其場を遁れようとした。と、染井の手は素早く彼女の長い袂を掴んだ。襦袢の朱鷺色がはらりと八口を零れた。

「何爲さるんですー」

「お待ちなさい。貴方はお逃げなさるんですか。」

「放して下さいー」

「いゝえ、放しません。」

「染井さん、貴方は」と緑子は袂を掴まれたまゝ、憎悪に燃えるやうな目をして振返つた。「人を何と思つて居らつしやる？ 失禮ぢやありませんかー」

「貴方が私の云はうと思ふ事も云はせないで逃げようと思はるから、已むを得ずこんな失禮な真似もするので。御免下さい。私だつてこれで、全さら禮儀を心得ない人間でも無いのですから。」と染井

は案外素直に云つて、掴んでゐた袂も放した。「ですから、貴方も遮々二逃げようとはかり爲さらないで、私の話も聞いてやらうと云ふ、それだけの好意だけでも持つて下さい。」

「それは何うしても今、此處で話さなければならぬ事ですか。」

「えゝ、是非今聞いて頂かなければならないのです。こんな機會にお話しなければ、何時お話し出来るか分りませんから。是迄だつて私は幾度お話ししようと思つて口を切り懸けたか知れません。けれど、其の都度貴方は巧みに逸らしてお了ひなすつた。お覚えがお在りでせう。何時か貴方が裏の四阿にお獨りで居らした時、その時も私は……貴方はあの時奇麗な脇突を編んで居らつしやいましたね。」

「そんな事は……それよりも早くお話の要件を伺ひませう。」

緑子は逃げて逃がしさに無いので、最う肚を据ゑた。そして云ふだけの事を染井に云はせた上で、二度と付き纏はぬやうに、きつぱりと自分も云つてやらうと健氣に覺悟した。

### 悪魔の戀

ぱつたり凪いでゐた風がそよよと陸から吹き出して、邊りは夕暮の薄明りから何時の間にか月明りの涼しい夜になつてゐた。そして蒼白い光が二人の顔を照りと見せ合つた。



「要件と仰しやるのですか。」と染井は細かい奇麗な齒並を白く見せて和やりと笑ふと、「要件と云ふと如何にも事務的に聞えますが、私の貴方に聞いて頂きたいと思ふのは、最つとスピリチュアルな……究り人間の愛と憎しみの問題なのです。」

「そんな性質のお話を、私は何ふ必要があるのでせうか。」

「待つて下さい。貴方は直ぐ然う逃げようと爲さる。」と其の細い靱かな體で立塞がるやうにし乍ら、暫くちつと縁子の顔を見詰めてゐた後で、「お嬢様、貴方は私の江間君に對する態度を、何う思つて居らつしやるでせう？ 定めて同情の無い冷酷な奴だと思つて居らつしやるでせうね。」

「そんな事は私知りません。けれど、貴方が江間さんを憎んで居らつしやる事だけは、私にも分りません。」

「其處です、お嬢様。私は何の爲めに江間君を憎むのでせう？ 私は仰しやる通り江間君を憎んでゐます。恐く貴方の想像以上に憎んでゐます。斯うなれば正直に申しますが、お邸の爲めや、先生の御注意の爲めに、私は江間君の祕密を許いたのではありません。あれは偽りです。私は全く許かさんが爲めに許いたのです。唯江間君が憎いから許いたのです。ですが、私は何だつて又江間君をそんなに憎むのでせう？ 何の怨みがあつてそんなに江間君を憎まなければならぬのでせう？ お嬢様。」

「私を知るものですか。」

「御存じ無い？」と彼は殊勝らしく溜息を吐いたが、「本當に御存じ無いのか、それとも故と御存じ無い振を爲さるのか知りませんが……お嬢様、私が江間君を憎むのは、貴方が江間君を愛して居らつしやるからですよ、貴方が江間君を愛する限り、私は江間君を憎まずには居られないのです。」と終ひは毒々しく云つた。

「分りません、」と縁子は息詰まるやうな聲で切れんに云つた。「江間さんを、私が愛すれば、何うして江間さんを、貴方がそんなに憎まなければ成らないのか、私には……私にはそれが……」

「お嬢様！」

染井は不意に熱情の昂まつた異様な顫へる聲で喘ぐやうに呼んだ。と、それきり後の言が續かなかつた。毎ものは深い井戸の底を見るやうに氣味悪く澄んだ其の目が、熱病患者のやうにぎら／＼輝いた。其辭蒼白い顔は一層血の氣が失せて、そして薄い白紙のやうにびり／＼と筋肉が引離れ採まれてゐる。彼は一生懸命に自分を支へ保つてゐるらしく、其の強く踏み締めた脚から、細い胛から、瘦せた兩肩へ、びくり／＼と間歇的の身顫ひを刻んだ。

縁子は其の異様な情熱的の聲を聞いた時、心も體も一度に凍んだやうになつて、曩の健氣な覺悟も何うかなつて了つた。そして異様な興奮に戦き惱む其の顔を見、其の體を見てゐると、自分も恐しい夢の中で得體の知れない怪物に惱まされてゐるやうな惱ましさを感した。彼女は魔された者が聲を立



てようとしても立てられないやうに、何故か口が利けなかつた。彼女は僅に右の手を掉つた。それは染井に自分の傍を去つてくれとの意味であつたが、然し染井には通じなかつた。

「お嬢様、私は……私は……」と染井は息が迫つて聲が掠れた。「お嬢様を愛してゐるのです！ お邸へ引取られて、貴方を初めてお見上げした其の時から、私は今日まで一分間だつて貴方の事を忘れた事はありません。」

「いゝえ、いゝえ」と縁子は熱い毒液でも耳へ注ぎ込まれたやうに眞蒼になつて烈しく首を掉つた。そして叫んだ。「私……私そんな事、伺ひたくありません！」

「貴方がお下げに結つて小學校へ通つて居らつしやる頃から、貴方が女學校も済まし、女子大學も御卒業なすつた今日まで、私は一分時も貴方の事が忘れられずと思ひ通して來たのです。是から先も一生貴方の事を思ひ通して、死ぬまで貴方の事を忘れる事は出来ないので。貴方無しに私は生きてゐる事が出来ないのです。」と染井は對手の言には耳も貸さずに一息に續けた。「お嬢様、私はそれほど迄に貴方を愛してゐるのです！ それを、それほど迄に思つてゐる私を、少しも顧みては下さらないで、貴方でも先生でも、私よりすつと後も後、つい近頃からお出入りをするやうになつた江間君を殆ど盲目的に愛して居らつしやる。一つは江間君が取る事が巧いからでもありますが、然し私から云へば、敢て江間君を憎む前に、貴方々をお怨み申さねばならないのかも知れません。けれど、

私には貴方々を……いや貴方を……貴方だけは、怨む事も憎む事も出来ないのです。何んな目に遭はされても、設ひ足蹴にされて踏み躪られても、私は到底貴方を憎めないのです。然もそれほど迄に貴方を愛してゐる私の愛は顧みられずに、貴方は一途に江間君を愛して居らつしやる。私と江間君との間は、貴方の事を外にしては何等の怨みもある譯ではありません。唯然し、貴方に愛されてゐるの自分では無く、江間君だと考へただけで、私の胸は煮え返るやうな怒りと憎しみとで江間君を呪はずには居られないのです。貴方に愛されてゐる江間君と云ふ人間を考へると、私は生れない前から憎み合はなければ成らない因果同志……より以上の深い憎しみを以て江間君を憎まずには居られないのです。貴女が江間君を愛される限り、私は飽くまで江間君を憎みます。江間君が貴方に愛されてゐる限り、私は悪魔になつても江間君を呪はずには措きません。」

「恐しいー」と縁子は息を引いて身顫ひする。

「いや、私のお話ししようと思つたのはこんな事ぢや無い。少なくとも是は要件ぢや無い。唯何んなに私が貴方を愛してゐるか、それを知つて頂きたいのと、そして貴方が私の其の愛を顧みて下さらないで、他の人を愛される場合、貴方を怨む事は出来ないから、貴方に愛される其の人を憎むより爲方の無い私の切ない心持を、お話ししたまでです。私が何よりも貴方に聞いて頂きたいのは、私が貴方を愛してゐると云ふ其の事なのです。お嬢様、私が是まで何年かの間、貴方に云はう云はうとして終



に云ひ得ず、貴方に聞いて頂かう／＼と思ひながら、今の今まで聞いて頂く事が出来ないで、獨り心の中で思ひ通して来たのは夫れだけの事なのです。私は貴方無しには活きられない。私は命を懸けて貴方を愛してゐます。愛の前には猛獸さへ懐くと云ふではありませんか。貴方は猛獸では無い、私の知る限りの女性の中でも尤も優しい感情をお有ちになつてゐる方だ。そして異性の愛も解しない方では無い。何うぞ貴方の其の優しいお心に、私の此の切ない心持も汲んでやつて下さい。」

「恐しい……貴方は恐しい人です！」と彼女は吃り／＼繰返して、思はず後ろへ踏みながらひたと顔を掩つた。

「お嬢様、私が是ほどに申上げてても、貴方に此の心持を汲んで頂く事は出来ないでせうか。」と染井は熱い溜息を吐いたが、直ぐ烈しい焦燥に驅られて苛立しげに首を掉ると、「そんな筈は無い。石さへ點頭くと云ふ事がある。私が是ほどまでに思ひ詰めた一念が、貴方を動かさないと云ふ事は無い！」

「いゝえ、いゝえ」と縁子は両手を顔から放すと、一生懸命に云つた。「貴方は無理です！ 貴方は無理です！」

「お嬢様、私は貴方の前に跪つきます。此のまゝ貴方に顧みられないで生きて行くと云ふ事は私には堪へられない事です。私だつて人並に血もあれば涙もあります。何時までも何時までも悪魔のやうな心で、人を憎んだり呪つたりして行くのは苦しいのです。何時までも斯うして自分で自分を地獄の苦しみに置くのは堪へられません。けれど、貴方の愛を得られないとすれば、私は彌張り悪魔の心を持つて、貴方の愛を得てゐる者を憎み呪ふより外には、生きて行く道は無いのです。私を地獄へ墮すのも、救つて下さるのも、貴方のお心一つです。今此處で私に聞かして下さる其の御返事一つです。お嬢様、私は救はれないのでせうか。」

「……………」

染井はじり／＼と又寄つて来る。そして月の光に一層蒼白く見える其の顔が、縁子の目の前へ被さるやうに迫つた。縁子は極度の恐怖に體が利かなかつた。曩から此の悪夢に魔されてゐるやうな苦しみから遁れたい遁れたいと思つてゐた彼女は、最う見えも恥しさも無く駆け出さうと心では躁つても、足が思ふやうに出なかつた。それに後ろは直き海であるし、前には染井が立塞がるやうに幅をしてゐる。そして私ひを求めにも聲が出なかつた。濱は唯一面の月影に白々と光つて、遠くはぼうと煙つたやうに霞んで、人の姿はおろか、生物らしい影も見えなかつた。

「お嬢様、私は貴方の前に跪つきます。何うぞ私の事も思つて下さい。」と染井は不意に悲しい聲で云つた。

體も利かず、口も利けないで、魅られたやうになつて立竦んでゐる縁子の眞蒼な顔を、長いことぢいと見詰めてゐた染井が、其の切ない哀願の言を洩らすと、今まで眞直に立つてゐた彼の細い體が靦



かに前へ踏み出した。そして體と一緒に膝をじり／＼と折つて、終ひには全く其處へ跪つて了つた。そして砂の上へ額を着けた。

唯此の場を遁れたい一心の縁子は、此時だと咄嗟に思つた。然う思つた途端に足が獨りでに前へ出た。彼女は砂の上へ平伏した染井の體を避けて、明るい灯火の見える町の方を目前に夢中で駆け出した。繰上げの擦りた浴衣の裾前が足頸に絡まつて、鼻緒の弛んだ庭下駄が柔かな砂地へ喰ひ込んで、氣ばかり躁つても思ふやうに走れなかつた。

「お嬢様、貴方はお逃げになるのですか？」と染井の冷たい鋭い硝子を砕くやうな聲が後ろで響いた。と、縁子は背筋へ冷水を浴びせられたやうに心臓がきゆつと縮こまつた。それきり足が凍んで、其まゝ其處に釘付けされて了つた。

「お嬢様、貴方は此の場さへ遁れたら、それで私から遁れ了されるものと思つて居らつしやるのですか。」と染井は極度の憤りから來た極度の冷かさを以て靜に云ふと、足音もさせずに彼女に近づいた。「それは淺薄なお考へですよ。貴方が此の世に生きて居らつしやる限り、私が此の世に生きてゐる限り、何處まで貴方が逃げて行らつしても、所詮私から逃げ了せるものではないと觀念なさらなければ可けません。若し或る種の人々が信するやうに、魂の不滅と云ふ事があるなら、貴方は死んでから後でも、私の此の愛着から魂の自由は許されないのです。」

一句々々噛んで含めるやうな彼の其のねち／＼した言は、單に威嚇ばかりでは無く、命令するやうな、宣告するやうな、そして彼自身にも誓ふやうな調子であつた。縁子は永劫に自分の運命を呪ふやうな其の執念深い言を聞かされて、現在自分の體も、丁度羽蟲を捕へる蜘蛛のやうな目に見えない執着の糸で、ぎり／＼に絡まれてゐるやうな氣がした。彼女は惜えた目を擧げて、自分の運命に負る其の暗い影をちらと見た。染井は然し明るい月の光を浴びて、彼女の目の前に常と變らぬ落着いた風で立つてゐた。唯彼が彼女の憐みを乞つて、其の足許に跪づいた印が、彼の白い額へ皮膚病の痕のやうに疎に砂が着いて残つてゐる。砂の上に額突いてゐた彼は、跪づいた自分を顧みようとせず、急いで遁れて行く縁子の足音を聞いて、侮辱に顛へる體を撥ね起したまゝ、額に着いた砂を拂ひ落すのも忘れてゐたのである。

「お嬢様、貴方は終に私の愛を斥けて、飽くまでも江間君を愛するお意りなのです。行く／＼は江間君と結婚なさるお意りなのでせう？」と染井は努めて冷靜に云つたが、それでも結婚と云ふ言を口にした時には、聲が微に顛へた。「貴方は其のお意りでも、それは永久に駄目ですよ。私が許しません。貴方にそれほど愛されるさへあるに、其の江間君を貴方の良人として此の同じ地上で見るなん。て！ そんな事は私の目の黒い限り断じて許しません。若しそんな事が在り得るとすれば、私はそれを見ないやうに、自分の此の二つの目の玉を抉り出して踏み躪つて了ひます。そんな話を聞かないや



罪の人

うに、此の二つの耳を突き破つて了ひます。あゝ、そんな事實を想像しただけでも、私の體は顫へる！」  
云ふ中に、彼の體は瘡にでも取憑かれたやうにがた／＼顫へ出して、額の砂がぼろ／＼零れ落ちた。  
縁子は氣味の悪いのも、恐しいのも、そして早く此場を通れたいと思ふのも變りは無かつたが、それ  
でも餘りに暴慢な染井の言を黙つては居られなかつた。彼女は烈しい憤りから勇氣附けられた。そし  
て悔しさうに叫んだ。

「私、許すの許さないのと、貴方にそんな言を使はれる覺えはありません。私が誰と結婚しようと、  
誰を愛しようと、貴方のお指圖は受けません！」

染井は黙つて頭を掉つた。

「お嬢様」と目を据えて顔を突出すと、熱で乾いたやうな滑らかな聲で、「貴方に愛されない私は、生  
きてる望みの大半を失はれた者です。今それが明瞭過ぎるほど能く分りました。私は貴方の手で地獄  
の底へ突き落されたのです。然うです。一生浮ぶ事の出来ない地獄の責苦を負つて、私は生きてる樂  
みも無い是からの長い苦しい自分を、唯貴方に愛されてゐる江間君を呪ふ事の爲めに活かして行くの  
です。」と脅かすやうに云つて、左の目でぼちりと一つ瞬きました。

「貴方は……貴方は……本當に貴方は悪魔です！」

「然うです。貴方の愛を得られない私は、悪魔であるより外に活き方がありません。」

「貴方はそれで、良心の苛責を恐れませんか。」

「私の恐れたのは、私の心持を貴方に打明けた時、貴方に拒絶されは爲ないかと云ふそれ一つだつた  
のです。貴方といふ方を愛してから此方、偶の半時も心の安まる暇無く私の恐れて來たのは、唯それ  
一つだつたのです。それも今通り過ぎた！ 私は最う何を恐れるものがあります。悪魔に良心はあ  
りません。唯貴方に愛される江間君を憎み呪ふ事に依つて、悪魔は悪魔の悪心を僅に満足させるので  
す。」

「貴方はそれを不當だとは思ひませんか。私が江間さんを愛するからと云つて、江間さんに罪も科も  
無いぢやありませんか。」

「江間君が千の罪、萬の科を犯さうと、私に取つてそれは何でもありません。けれど、江間君が貴方  
に愛されるといふ其の一つの事が、私に取つては俱に天を戴くべからざる憎しみなのです。」

「江間さんに罪はありません。憎むなら、貴方の愛を容れない私を憎むのが至當です。」

「あゝ、貴方を憎む事が私に出来るやうでしたら……」と染井は溜息を吐いてがくりと俛れると、其  
儘ちつと身動きもしなかつた。

縁子もそれを見ると、急に氣が弛んだやうにがっかりとして、體にも烈しい疲勞を感じて來た。彼  
女は最う逃げるのでは無く、立つてゐるのが大儀になつて、對手の其の俛れてゐる傍からそろ／＼離

罪の人



罪の人

れた。  
 「待つて下さい。」と染井は其の氣勢に直ぐ顔を擧げた。「最う一度瞭りと聞かして下さい。冗いやうですが、貴方は何うしても江間君を愛するのですか。貴方は何うしても江間君と結婚なさるお意りですか。」

「え、え、仰しやる通りです。私の心に變りはありません。」と緑子は最う悪怖れずにきつぱり云つた。

「それが出来る事か、出来ない事か……」染井はぎり／＼と齒齧をしながら、蛇のやうに體を腕らせると、脊筋の邊りでぼき／＼骨が鳴つた。「いゝや、斷じて然うは爲せない！ 生きながら私は悪魔となつても、それを妨げずには措かない！」

「染井さん、私達は悪魔にばかり支配されては居ません。神も在ります。正義も在ります。」

「神が在り、正義が在る。かうして悪魔の力を恐れないと仰しやるのですか。」と云ふ中に、其の顔が醜く引歪んだと見ると、白い齒を出して猿のやうに笑つた。「ですが、時には悪魔の力が神の力を凌ぐ事があります。悪が正義に勝つ事があります。丁度闇が光を掩ふやうに。」

「いゝえ、それは違ひます。光の隠れた時にこそ闇は擴がりますが、光が現はれたら、闇は消えるに決つてゐます。私は闇を恐れません。私達には何時か屹度光明の曉が來ます。」

緑子は烈しい倦怠と疲勞とを身内に感じながら、神經は極端に昂ぶつて、云ふ事も全て憑物でもしたやうに興奮してゐる。彼女は今にも倒れさうな體を、非常な努力で辛うじて支へてゐるので、自分の其の云つてゐる事も自分の耳には聞えなかつた。

「闇が破れて、江間君が其の呪はしい光明を迎へるやうな事が、若しあるとすれば、其の時は……其の時こそ……」

「え、其の時は？」

「彈装したピストルの筒口を江間君の心臓へ向けて、此の指一つ動かせば、それで萬事は終るのです。」と染井は右の手を空へ擧げて、圓く曲げた人指指を弾いて見せた。

「まあ、貴方はそんな恐しい事まで……」と云ひ懸けて息を呑んだが、其のまゝ緑子は聲が出なくなつた。

「人間も悪魔になれば、何んな事でも出來ますよ。」と染井は最う一度指を弾いて見せて和やりとした。其の和やりと笑つた顔が、緑子は本當の悪魔のやうな恐しい顔に見えた。そして其の顔だけ残つて、周りが見る／＼暗くなつて行くやうに思へた。そして其の顔は次第に大きく、次第に自分の顔へ押被さつて來るやうな氣がした。彼女は片手で目を掩つて、片手で空を泳ぐやうに二三度すると、急に砂の上へ踏まつて了つた。

罪の人



染井もはつとしたやうに思はず前へ踏み出して、聲を懸けようとしたが、ごとりと一つ固唾を呑むと、其のまゝ息を凝らしてそろ／＼と身を屈めた。そして友禪麻の中幅帯の解け懸つた緑子の脊中を静に抱へるやうにして、ちつと顔を覗き込んだ。緑子は目を閉ぢ、齒を喰ひ締めて、全きり正氣を失つたやうになつてゐた。染井は貪るやうに其の顔を眺めた。眺めてゐる中に、薄い微笑が彼の口元に浮んだ。そして目には兇暴な光を帯びて來た。

「今こそ、己の意志のまゝにする事が出来るのだ！」

今の今まであんなにも思ひ嫌つてゐた其の者の腕に、抱かれてゐる事すら意識せずに、死んだやうにくつたりとなつた緑子の亂次ない姿を眺めてゐる中に、染井は復讐的の或る残忍な考へがちらりと頭を掠めたのである。

「いや、彼は直ぐ頭を掉つて、悲しげに呟いた。「そんな事は、此人には許されない。」

染井が少し體を擦らした拍子に、蒼白い月の光を眞面に浴びた緑子の顔は、丁度大理石の彫像でも見るやうな其の冷たい美しさが、神々しいまでに氣高く彼の胸を打つたのである。と、彼の腕の中で其の繊細い體がびくりと動いたと思ふと、緑子はふつと細目を開けた。彼が手を放すと、未だうつとりとしてゐた彼女も體だけは自分で無意識に支へた。染井はほつと溜息を吐いて靜に立上つた。そして薄り汗ばんだ額の亂れた髪毛を片手で撫で上げると、砂がざら／＼と指に附いて零れた。曩緑子の

欠



# 欠

さうに眺めたが、唯ちつと眺てゐるだけで吠えはしなかつた。氣重さうにぐつたりとなつたまゝ、起きようとも爲なかつた。

「ほ、大きな犬だ。」と先に立つた久米も思はず後込んだ。

「まあ、私怖いわ。」

「本當にね、氣味の悪い大きな犬。」

「何ですよ、貴方達は。犬が怖いなんて、何か怖がらなくちや成らないやうな原因でもあるのですか。」と露子の多賀子は笑つた。

「犬を怖がるのに別に原因なんか無いわ。唯感情だわ。」

「だつて、盜坊でもした覚えが無ければ、犬とお巡りさんは怖くない筈よ。」

「あら、甚いわ。」

「随分ね。」

罪の人  
月子が喉が渴いたと云ひ出してから、外の者もそれに誘はれて同じやうに渴きを覺えて、皆此家を當にして來たのであつたが、其の大きな犬を見ると、誰一人進んで水を貰ひに入つて行く者も無かつた。唯多賀子は生來の暢氣から別に怖いとも思はなかつた。彼女は平氣で木戸を入つて行つた。と、犬はむくりと身を起して、低く喉で唸つた。張り物に氣を取られてゐる女は、未だ氣附かなかつた。



「まあ、露子さんは剛いわね。」  
 「あんな犬に飛び附かれたら何うでせう。」  
 「久米さんは又、男の癖に活地が無いのね。」  
 「犬と海鼠は、何うも生れ附性が合はないんで。」  
 「誰が、海鼠と性が合ふ人があるのですか。」  
 「木戸の外ではこんな事をぼそ／＼喋り合つてゐる中に、多賀子は植捨ての菊のひよろ／＼食つてゐる四目垣を廻つて行つたが、それまで低く唸りながら垣根の外を見詰めてゐた犬は、彼女が庭へ入ると、一聲ライオンのやうに吠えた。  
 張り物をしてゐた女も、犬の聲で初めて気が附いて振り返つた。と、庭へ入つて来た多賀子や、木戸の外に固まつて此方を覗いてゐる若い女達の際々しい姿を、一目に見て取つた。同時に娘らしくばつと赧くなつて、遣り場に困つた目を犬に向けると、續いて吠えようとしてゐるのを慌て／＼叱つた。  
 「オーノルーこれ。」

奇

遇

犬に吠えられた時、有繋の多賀子もはつとして立留つた。犬とは思へないやうな其の聲に一度で慍えて了つて、急に怖くなつて足が出かねたが、廣言を吐いた皆への手前負惜みもあるし、それには犬を叱つてくれた其の娘が傍に附いてゐるのを頼みに、おづ／＼進み寄つた。  
 「御免遊ばせ。」と彼女はすつと離れた銀杏の木で腰を屈めた。「あの誠に恐入りますが、お冷を一杯頂かして頂きたいのですが。」  
 「は、お易い事で御座います。只今汲んで来て差上げますわ。これ、オーノル、可いのよ、可いのよ。吠えるんぢやありません。お客様だから可いのよ。」  
 娘は犬の頭を軽く叩いて、其の得心が行つたやうにとたりと長くなつたのを見てから、硝子戸の開け放つてある其處の縁側を上つて、座敷から勝手の方へ廻つて行つた。犬は最う多賀子の方へは目も與れずに、濡れた長い舌を顎の横へ垂らして、軽く間を刻むやうに喘いでゐる。  
 多賀子は家の中へ入つて行つた娘の後姿を見送つて、不審さうに小首を偏げた。犬が怖いので離れてゐたのと、それに對手は手拭を眼深に被つて、そして眞面に見る事を羞らふやうに、俯き勝に口を利いてゐたので、多賀子も瞭りとは見なかつたが、何處か顔に見覚えのある女のやうな気がした。  
 然う云へば、其の聲音にも聞き覚えがある。彼女ははつと気が附いた。それは妹の静野では無いか。十年前に別れたきり、此夏一度訪ねて行つた時には、行方知れずになつて逢へなかつた、其の妹の



幼顔に似てゐる。聲も然うだ。

「だけど……」と彼女は考へ直した。「静ちゃんか豈かこんな處で張り物をしてゐるなんて、そんな筈は無いわ。馬鹿々々しい。」

多賀子も一度は自分の妹のやうな氣もしたが、然しこんな處で、こんな風に運り合ふと云ふ事は、芝居か小説ならば知らず、事實有り得ない事のやうに思へて、自分で自分の馬鹿々々しい疑念を打消した。が、其處に臥そべつた犬へちらと目を遣つた時、今の娘がオーノルと呼んでゐた事に氣が附いた。そして其のオーノルと云ふ犬の名も、今初めて聞いたのでは無いやうに感じられた。何だか前にも聞いた事があるやうに思へた。

「あゝ然う！」彼女は漸と思ひ出した。「此夏伊豆へ歸つた時に、お嬢様から伺つたのだ。兄の飼つてゐた犬が、儲かオーノルとか云ふ名だと仰しやつた。」

多賀子は伊豆の宇佐美村で偶然秦博士と、其の令嬢の縁子とに邂逅した時、令嬢と二人で自分の家の迹を見廻りながら、空屋の軒に残してあつた犬小屋に目を留めた縁子が、自分の知らない犬の話をした事を、今思ひ出したのである。兄の俊作が外國人の別荘とかうら犬の子を貰つて来て、それをオーノルと呼んで飼つてゐるとの話であつたが、其のオーノル(名譽)と云ふ名が、如何にも兄の附けさうな名だと其時思つたので、それで彼女も記憶に残つてゐたのである。

「此犬が其のオーノルなら、彌張り妹に違無いわ。」と然う思ふと、多賀子は胸がわくわくし出した。彼女は小聲で、オーノル、オーノルと愉々呼んで見た。何時か頸を地平へ押付けて、耳を垂れ目を閉ぢてゐた犬は、耳敏くそれを聞き附けて目を開けたが、見知らぬ者が自分を呼ぶのを訝りでもするやうに、臥そべつたまま鼻を突出して此方を嗅ぎくする。

「彌張り然うなのね。まあ、到頭妹に運り合つた！」

多賀子が固唾を呑んで待つてゐる處へ、曩の娘は藥罐とコップを盆に載せて持つて來た。藥罐は汲立ての水で氣持よく濡れてゐる。多賀子はつか／＼と縁側の傍まで行つた。

「何うぞ澤山召上つて。」と娘は沓脱を降りて來て云つた。

「これは何うも、御面倒を懸けますわね。」

けれども多賀子は、直ぐには盆を受取らうとは爲なかつた。釋だけ外して手拭は曩のまゝ姐様被りにした娘の顔を、今度は近々と覗き込むやうにして見た。白粉氣の無い、色白の肌理の好い素顔が、日向で張り物をしてゐたので少し逆上氣味に、暈から頬の邊りをぼつと櫻色にしてゐる。切れの長い利口さうな目が、しつとりと潤みを持つて大人しやかに輝いたが、彌張り眞面には多賀子を見る事が出来ないで、目を利く時にちらりと其目を見向けたきり、中高の品の好い顔を直ぐ俯けて了つた。そして對手が何時までも盆を受取らうとはせず、まじ／＼と無遠慮に自分を見詰めてゐるので、娘は



益々極り悪さうに顔を火照らせながら、眞赤になつて一層深く俛れた。

見詰めてゐる中に多賀子には、それが紛れも無い妹の静野である事が段々確められて来た。十年と云へば一昔。殊に女の發育盛りの其の十年を相見なかつたのであるから、顔も變れば形も變つてゐる。あの頃は未だ髪をお下げにした、十二三の仇氣無い少女であつたのが、今はこんな美しい大きな娘になつてゐる。けれど、其の目元や、其の口元や、それから左の目の下の愛嬌黒子や、多賀子は今も瞭りと目に残つてゐる妹の幼顔を、娘の顔の中にありくと見出す事が出来るのであつた。最初見た時にはそれほど迄にも思はなかつた其の娘が、見れば見るほど、彌張り十年前のお下げの時分に別れたきり、今日まで逢はずに來た妹の静野が其のまゝ大きくなつたのであつた。

多賀子は此時初めて氣が附いたやうに、片手に持つてゐたオペラバッグの紐を腕へ擦らしながら、娘の手から黙つて盆を受取つた。そして目は彌張り妹の顔を見詰めたまゝ、縁框へそつとそれを置くと、

「静ちゃん」と呼んだ。

「えー」

静野は思懸け無い人から出拔けにそんな親しげな呼び方をされたので、吃驚して顔を擧げた。そして其の切れ長い目がぼつちりと見張られて、多賀子の顔へ喰入るやうに注がれた。彼女は一人きりの

姉が家出をしてから此方、そんな風な親しみを以て自分の名を呼ばれた事はついぞ無かつた。女親も無ければ、女の友達も無い彼女は、父や兄から静野と呼ばれるか、人からお嬢さんと呼ばれるか、其の二つより外に呼ばれた事は無かつた。

「静ちゃん」と多賀子は懐しさうに繰返すと、和こりと首を傾げて、妹の目の中を覗き込むやうにしながら「分らなくて、分らないのも無理は無いわね。私、こんなに變つて了つたんですもの。でも最う分つたでせう。静ちゃん、姉さんよ。私多賀子よ。」木の口のはへで。

然う云ふ顔をひたと見入つたまゝ、呆氣に取られて聞いてゐた静野の顔には、驚きとも、悲しみとも、喜びとも附かない、夫等の感情をこつちやにした、不思議な表情が現はれた。彼女は傍の硝子戸の堅框へ縫るやうに片手を掴ませたが、其の薄い石質の板がかちやく／＼かちやくと揺すれて鳴つた。

「姉さん」と静野も小さい時に呼んだと同じ調子で呼んだ。

と、目の中が急に熱くなつて、嬉しいのか、悲しいのか自分でも分らない涙が、はらく／＼と頬を傳つた。彼女はそれまで被つてゐた手拭を急いで取つて、それで目を抑へた。

「私、こんな處で逢はうとは、本當に思懸け無かつた。」多賀子は妹の泣くのを見ると、自分も涙含ましい氣持になつて聲が顫へた。「大きくなつて、まあ、美しくなつて……兄様もお變りは無いでせうね。私も此春十年振り伊豆へ歸つて見ると、貴方達は最う何處へか行つて了つた後で、何んなに失



望したでせう。私が行く四五日前までは、貴方達も未だ宇佐美村に居たつて事も、其の少し前に阿父様がお亡くなりなすつたつて事も、皆なあの徳爺やから聞いたのよ。それから此方、私随分貴方達の行方を捜したもんだけれど、分らないのが當然だわ、こんな思懸け無い處に暮らしてゐるんだもの。」

「姉様、私何だか夢のやうな気がしてよ。」と静野は濡れた目を手拭から放して、「私、姉様の事を何んなに思つてゐたか知れませんか。本當に逢ひたう御座いましたわ。それはもう、話しても話し切れないほど話が溜つてゐますのよ。」

「私も話したい事や、聞きたい事がどつさり有るのよ。それにしてもお友達を待して置いてちや……」と多賀子は連れの事を思ひ出して、縁先に置いた盆を取上げると、「私あの人達に先へ行つて貰ふ事にしますから、待つてゝ頂戴。」と云ひながら、あたふたと木戸の方へ行く。

木戸の外に待つてゐた連中は、多賀子が娘と何か親しさうに話込んで了つて、容易に出て来ないので、ぶつ／＼咳しながらも、犬が怖いので誰も催促に入つて行く者は無かつた。木戸の柱に寄り懸つたり、垣根の根方に蹲んだりして、詰まらなさうに待つてゐた。

「さあ、お冷を持つて来ました。」と多賀子は盆を行きなり地平へ下して、「皆さん召上りたいだけ召上つて、一足先へ行らして下さい。私大變な事が出来ちやつたんだから、鎌倉どころぢや無い。」と息

を弾ませてゐる。

「まあ、露子さん、何うなすつたの？」

「大變な事つて何に？」

「貴方それぢや此處に残るの？」

「何だかお光のやうな娘と頻りに話込んで居らつしやると思つたが、さては！ 久松でも居ましたね。」口々に訝り訊ねる一方では、送交りに薬罐の水をコップへ注いでは飲む。

「まあ何にも聞かずに、何うぞ先へ行らして下さい。お冷は最う可う御座んすね。」

多賀子は皆が飲んで了ふのを待ちかねたやうに、再び盆を持つてさつさと入つて行く。

「何うしたんです？ 露子さん。」と久米が呆れた顔をして附いて来る。

「来ちや可けなくつてよ？」と多賀子は烈しい險脈で振返つた。「行つて下さらないと、犬を嘔し懸けてよ。オーノル、オーノル。」

呼ばれて犬はむくりと體を起した。久米は蒼くなつて引返した。外の連中も、何か譯がありさうな多賀子の様子に好奇心を動かされたながらも、犬が低い唸聲を立て、今にも吠え付きさうなのに脅かされて、這々に其處を離れた。そして小半町も行つてから、路傍に固まつて、一評定した後で、またぶら／＼と鎌倉の方へ四人連れで歩き出した。



姉と妹と兄

「阿父様は私の事を、そりや慥つて居らしたのだつてね。」多賀子は座敷へ通されてから其事を云ひ出した。

「ええ。」と静野は氣毒さうに頷く。

「死ぬまで私を憎んで居らしたつてね。」

「そりや阿父様のお心持になつて見れば、御無理は無いと思ひますわ。姉様も最少し早く、阿父様の切めてお達者な中に歸つて來らしつて、謝つて下すつたら可う御座んしたのね。」

「最うそれも今となつちや返らぬ愚痴だわね。」と多賀子は溜息を吐いた。「それで、兄様も彌張り私を憎んで居らつしやるの？」

「姉様、兄様もね、阿父様と能く似て、そりや物堅い氣難しい人なのよ。」

「可いわ。私、兄様に謝るから。死んだ阿父様には最う謝りやうが無いから、切めて生きてる兄様に謝りませうよ。」

「兄様はそりや物堅い人よ。」と静野は繰返した。姉が些とや徐と謝つたくらゐで、俊作が到底も赦し

さうは無いと思ひながらも、然う明様にも云ひかねたので、「阿父様の氣性をそつくり受繼いで、頑固なほど物堅くて一國なのよ。ですから、大學の方も今二三ヶ月で卒業になるばかりの所を、或る事情から歇めて了つて、若い身そらを、思切つてこんな田舎へ埋めてお了ひなすつたくらゐですもの。」

「何んな事情か知らないけど、そんな事つて無いわ。私意見するわ。」と多賀子は氣込んで云つたが、自分でも柄に無いと思つたかして、些つと鼻白んで、「私が可けなければ、お嬢様にお願ひして忠告して頂くわ。幾ら兄様が頑固だつて、あの方の忠告なら、肯かない譯には行かないのだから……。」

「お嬢様と仰しやると？」静野はちらりと姉の顔を見る。

「兄様の好い人よ。」と多賀子は持前の斜端を出して、和やりと笑つた。聞く静野の方が赧くなつて目を逸らした。

「然う、お嬢様と云へば、あの時も世話になつたつきりで、未だお禮にも伺はないでゐるが……是こそ何よりのお嬢様にお土産だわ。歸つたら是非伺ひませう。」と多賀子は獨りで頷いた。

「人様の忠告でも、肯いて下さるやうだと可いけれど……。」静野は其事を考へ、獨言のやうに云つた。「兄様も能く、覺悟の上で、茲まで決心なすつたのですから、今更何誰が何と仰しやつて下すつたつて、到底も駄目ですわ。それには又色々深い事情もあるのですから。」

「深い事情つて、何んな事情？」

姉と妹と兄



罪の人

「私達の身の上の事なんぞすわ。姉様は未だ御存じ無い事ですわ。」

「話して御覧よ。」

「姉様にお話して可いか悪いか……」と當惑さうに口籠つて、「それは兄様から聞いて下さい。」

「静ちゃん、貴方は私を隔てるのね。」

「いゝえ、いゝえ、そんな譯ぢやありません。けれど……私困るわ。」と彼女は飾氣の無い束髪の頭を

段々前へ垂れて行つて、「お話して可ければ、兄様からお話しなさるでせう。私の一存でお喋りして、

後で兄様に叱られると可けませんもの。」

「まあ、氣の小さい人ね。大きな形をして、兄様に叱られるのがそんなに怖くて？」と多賀子は心から

可笑しさうに笑つた。

其の開放した笑聲に、靜野は驚いたやうに顔を擧げた。そしてまじく姉を眺めた。あんな事を  
して家出をして、其のまゝ音信不通でゐた兄妹の處へ十年振りで來合せながら、自分の爲た事を恥ぢ  
てゐる氣色も無ければ、後悔してゐる様子も見えない。父が自分を怒りく死んだと云ふ事も知つて  
ゐながら、別にそれを恐ろしい事だとも、悲しい事だとも思つては居ないらしい風である。それから兄  
に顔を合せるのでも、少しは面目無いか、極りが悪いとか云ふやうな、そんな素振も見えない。靜  
野は自分の心と引比べて、姉の心持が全きり見當が附かなかつた。

「姉様は彌張り、私などとは生れ附違つてゐるんだわ。」と然う思つて、彼女は羨んで可いのか、歎いて  
可いのか分らないやうな氣持がした。

稍西へ廻つた秋の日は、二人が話してゐる膝の傍まで斜に射込んで、外は少し風が出たらしく、銀  
杏の黄ろい葉が前よりも繁く散つた。そして其處の沓脱にも、縁先にもひらくと舞ひ落ちた。張り  
懸けて其のまゝにしてある張板の布片は、張つたのも張らないのも、暖かな秋日和に湯氣を立て、乾  
いて行く。

今迄張板の蔭へ入つて、臥そへつて舌を吐いてゐたオーノルが、不意に起き上つて身顛ひすると、  
勢ひ好く表の方へ飛び出して行つた。

「あ、兄様が歸つて來らしつた。」と靜野は犬の様子で直ぐ然う云つた。

間も無く、細かい緋の袷に同じ袷羽織を着た俊作が、足元に賣る犬を片手の鳥打帽で合觸つてやり  
ながら、庭へ入つて來た。が、座敷へ上り込んでゐる見慣れない婦人の姿に、思はず立留つた。

「兄様、お歸りなさいまし。」と靜野は立つて縁側に出迎へたが、些つと遅らつてから、思切つて、「兄  
様、姉様なのよ。」

「何うも長らく御無沙汰しまして。」と多賀子も膝を振り向けて、疊に兩手を突いた。「今日此處の前を  
通ると、思應け無く靜ちゃんに逢ひまして……兄様も相變らず御壯健で何よりですわね。」



罪の人

彼女の其の際々しい姿をじろく眺めてゐた俊作の顔は、見る／＼曇つて来た。そして眉と眉との間に気難しい堅皺を刻んで、口尻を微に痙攣させると、吐き出すやうに云つた。

「多賀子かー」

「兄様、昔の事は何うぞ兄様も勘忍して下さいな。私、貴方を阿父様と思つて、此通り手を突いて謝りますわ。」と多賀子は塵へ擦れ／＼に女優鬘の頭を下げた。

「歸つてくれー」と俊作は嗚咽した。「お前のやうな者は妹でも兄でも無い。十年前にあゝいふ都合を働いて、それつきり親も棄て、兄妹も棄て、家出をしてゐたものが、今更何の顔下げて我々の前へ出て来たのだ。歸つてくれ。」

「まあ。」と多賀子は呆れたやうに兄の其の烈しい險脈を見遣つて「ですから、私が悪かつたと云つて謝つて居るぢやありませんか。それでも兄様は赦して下さいなさいの。」

「馬鹿！ 謝りさへすれば、何んな罪でも赦されると思つてゐるのか。一旦爲出来た事は、二度と元へは返らないぞ。返らうとしても、返さうとしても、返るものではないのだ。お前が若し少しでも自分の事を恥づる念があつたら、此のまゝ素直に歸つてくれ。僕と静野と二人の此の貧しい生活も、二人に取つては神聖な生活だ。自分達の因果な運命に忍従した聖なる贖罪の生活だ。設ひ姉妹でも、お前如き穢れた女に敷居を跨がれるのは迷惑だ。さつさと歸つてくれ。」

「兄様、兄様もそんなまあ一國な事を仰しやらないで……。」と静野がはら／＼しながら傍から宥めた。「姉様も十年振りで来らした事ですし、あゝして謝つて居らつしやるのですから、兄様も何うぞ勘忍して上げて下さいな。」

「静野、お前からして間違つてゐるぞ。阿父様の最期のお言葉を考へて見ろ。多賀子のやうな不埒な奴は姉とも思ふな、妹とも思ふな、家へも寄せ附けるなと、あれほど仰しやつたぢや無いか。人が死際に云ひ遺した事は神聖なものだ。阿父様のお言に背くだけでも大きな不孝だぞ。お前は親には不孝な子となつても、不埒な姉が庇ひたいのかー」

「でもね、兄様。」と彼女は遺瀨無さうに云つた。「姉様だつて一時の心の迷ひで、あゝして家出はなすつても、今ぢや自分のなすつた事を後悔して居らつしやるのですもの。此春私達が居なくなつた後で、故々宇佐美村へも謝りに来らしたのですつて。阿父様にしても今迄若し生きてゐて下すつて、姉様が本當に後悔して謝つて居らつしやるのを御覽になつたら、屹度喜んで赦して下さいと思ひますわ。ですから、兄様も何うぞ、何時までもそんな頑固な事を仰しやらないで、姉様を何うぞ赦して下さい下さいな。私達にした所で、唯た三人きりの兄妹ぢやありませんか。それが一人缺けて、二人だけで斯うして寂しく暮してゐるのですもの。姉様さへ眞面目な心になつて下されば、兄妹三人が揃つて、何んなにか嬉しい事ぢやありませんか。ね、私、私も姉様と共にお詫を致します。何うぞ赦し

罪の人



て、是から兄妹三人仲好く暮らして行きます。私達のやうな寂しい身の上では、親身の兄妹が一人有ると無いとで、何のくらの心強さが違ふか知れませんか。阿父様や、それから阿母様だつて、屹度それは草葉の陰から喜んで見てゐて下さいませわ。」

静野の其の言には姉思ひの眞情が溢れて、切々と人の心に迫らすには措かなかつた。彼女は縁側にびたりと両手を突いて、軒敵に突立つた兄の前に深く頭を下げた。其の目からは熱い涙がぽと／＼滴つた。

「静野、何も云ふな。お前の心と多賀子の心とは、全きり違つてゐるのだ。それが僕には能く分つてゐる。成程、今の我々の寂しい生活には、親身の兄妹が一人殖えると云ふ事は、百千人の身方を得たよりも力強い、嬉しい事なのだ。けれども僕は、赦すべからざる親不孝の妹を赦して、死んだ阿父様の前に自分まで不孝の子となる事は出来ないのだ。」

静野の怜しい心根には、俊作も動かされないので無かつた。自分も一緒に涙含ましいやうな氣持にさへなつた。然し妹の其の感しい言を他人の事でもあるやうに、のぼ／＼として聞いてゐる多賀子を見ると、彼は烈しい怒りと侮蔑とを制せられなかつた。

「多賀子、さつさと出て行つてくれ。僕はお前の其の姿を見たくないのだ。其の顔からして氣に食はないのだ。」

「まあ、兄様も随分思切つた事を仰しやるのね。」と多賀子も心持顔を紅めて、「是でも兄様には血を分けた妹ぢやありませんか。それが斯うして十年振りで逢つたのぢやありませんか。貴方も兄らしい優しい言の一つも懸けて下さるのが人情だわ。それは私も悪い事は悪かつたのですから、それなればこそ義から斯うして謝つてゐるのに、それを少しも取上げちや下さらないで、此のまゝ追ひ出してお了ひなさるなんて餘りだわ。餘りそれぢや邪慳ですわ。」と怨ずるやうな目附をして、じろりと兄の顔を見遣つたが、それが妙に又色つぼく見えた。

「情無い奴だ！」と俊作は握拳を顫はせて云つた。「若し此兄の手で殴つて目が覚めるものなら、僕は此場で、お前を半殺しにしても目を覺ましてやらすには措かないのだ。然しお前と云ふ女は、自分で自分を辱しめてゐながら、其の恥を恥とは思はないのだ。お前は謝つてゐると云ふ。然しお前の謝つてゐるのは、つい粗相で茶碗でも破つたぐらゐな罪を、謝つてゐると變りはないぢや無いか。恥を恥と思はず、罪を罪と感じないやうな無恥無智の女に向つて、設ひ僕が千の鞭、萬の言を費しても無駄な事だ。素直に此處を出て行つてくれ。そして二度と再び兄や妹の前に、其の恥で固めたお前の姿を見せてくれるな。」

「それぢや兄様は、私は何んなにお詫びをしても、赦しては下さらないと仰しやるのね。此先最う何時までも、妹とは思つて下さらないお意りね。」



姉と妹と兄

「其通りだ。」

「可いわ、それぢや。私歸りますから……」と云ふと、多賀子は傍に置いたオペラバッグを取つて、ついと立つた。

「姉様！」と静野は慌て、膝を浮かせて縁側に塞がりながら、「此のまゝ貴方、歸つてお了ひなさるの？」

「え。だつて兄様は、幾ら私が謝つても、赦しちや下さらないつて仰しやるのたもの。」と多賀子はすん／＼沓脱へ降りて草履を穿く。

「姉様、貴方が御自分の事を、本當に悪かつたと氣がお附きになつたら、幾ら兄様が赦さないと仰しやつても、設ひ打たれても蹴られても、兄様の足元に縋つて謝つて下さい。それが本當ですわ。えゝ、然う爲さるのが當前ですわ。」と静野は姉の提げてゐる鱧皮のオペラバッグを捉へて一生懸命に云つた。

「静野、何故留めるんだ。阿父様のお言を忘れたのか。さつさと歸してやれ。」

「でもね、兄様、此のまゝ私……此のまゝ別れて了ふ事は私……」と希がふやうな、訴へるやうな、切ない眼色をしてぢつと兄の顔を見詰めたが、はらくと涙を零して、「唯た一人の姉様なんですもの！」

「何も云ふな、静野。多賀子、歸つてくれ。」

俊作は何所までも氣強く云つたが、静野の其の感しい目を見るに堪へなくて、衝と顔を背向けると、自分も泳へてゐた涙がほろりと、一雫頬へ傳つた。それを見られまいと爲るやうに、彼はくるりと背中を向けると、日向に臥てゐるオーノルの傍へつか／＼と行つた。そして向う向きに其處へ蹠まつて目を數瞬いた。彼も口では強い事を云つても、此のまゝ追ひ遣る多賀子も可哀さうに思はぬでは無かつた。一人きりの女の同胞と生木を裂くやうに別れさせる静野が、殊に不憫でならなかつたのである。當的多賀子は案外平氣であつた。麻裏草履を突掛けて沓脱を降りると、些つと俊作の後ろ姿を見て、それから静野の耳へ口を寄せて、小聲で早口に囁いた。

「静ちゃん、心配しなくても可いわよ。誰が此のまゝ別れて了ふものですか。私だつて子共や何かの事もあるし、何うしても兄様に赦して貰はなくつちや都合の悪い事があるから、又出直して来るわよ。いえね、あんな剛い事を云つても、お嬢様にお來でを願つて、一緒に謝つて頂けば大丈夫よ。ね、ほら、幾些つと話したのでせう、其のお嬢様さ。それでも可けなければ、先生も一緒に引張つて来るわ。博士で、大學の先生で、兄様だつて其の方には頭が擧がらないのよ。」

「けれども姉様、そんな方が本當に來らしつて下さるでせうか。」と静野も小聲で不安さうに云つた。「大丈夫よ。」と多賀子は自信ありげに頷くと、和こりして、「そりや特別の關係があるんだからね。そ

姉と妹と兄



れにお嬢様と私とは、ちゃんと堅い約束があるんだもの。貴方は何にも知らないのね。一緒に暮らし  
てゐて気が附かないなんて、餘程ぼんやりだわ。だけど、娘の中はそんな事には、ぼんやりぐらゐが  
丁度好いのだわね。」

獨りで喋つて、獨りで呑込んで、多賀子はさつさと未練け無く歸つて行く。四目垣を廻つて、木戸  
を出て、前の往來を元來の方へ引返して行く。オペラバツグをぶら／＼振りながら、弾んだ足取りで  
さつさと歩いて行く彼女の派出な姿が、明るい午後の日射しの中に鮮かに見えた。

縁側に立つて、葉を振つた空木の生垣越しに、姉の其の後ろ姿を涙の目で見送つてゐた靜野は、旋  
て見えなくなると、両手で顔を掩つて其處に泣き崩れた。

「靜野、何を泣くんだ！」と俊作は犬の傍を放れて、縁側の方へ來た。「お前はあんな者と別れるのが、  
そんなに愁いのか。」

「だつて兄様、唯た一人の姉に十年振りで逢つて……十年振りで逢つても、姉妹らしい話一つ爲る事  
も出來ずに、又こんな風で別れて了ふとは、餘り私……餘り情無い事だと思ひますわ。」と靜野は咽び  
咽び云つた。

「だが靜野、」と俊作は傷はしさうに見遣つて、「其の唯た一人の姉が、何んな姉だと云ふ事を考へて見  
るが可い。十年前に彼奴が家出をした時の阿父様のお力落しと、お腹立とを考へて見るが可い。それ

から十年の間と云ふもの、阿父様は彼奴の爲めに何のくらゐ心を痛められたか知れない。死ぬまで苦  
にして居らしつたのだ。そればかりか、女優のやうな破廉恥な職業に身を墮してゐながら、それを彼  
奴は自分で恥とも思はない。彼奴の其の無恥の爲めに、我々兄妹が代つて恥を受けなくてはならない  
のだ。我々は彼奴故に世間を狭く、人から指弾を受けなくてはならないのだよ。」

然う云つた時、俊作の全身は戦いた。目に見えない何物かを睨むやうに、屹と空に見据ゑた其の黒  
い瞳は、抑へられた憤恨の焔でふす／＼燦つてゐるかのやうであつた。

「いえ、いえ。」と靜野は烈しく頭を掉つて、「何んな恥しい身の上であらうと、彌張り姉様は姉様です。  
阿父様には設ひ親不孝な人でも、私には唯た一人の姉様に違ひはありません。それも親子揃つて、世  
間並に暮らしてゐるのなら、姉一人ぐらゐはと諦めも出來ますが、私達には親も無く、世間も無く、  
私と兄様と唯た二人きりぢやありませんか。運り合はない中なら左に右く、かうして運り合つて、こ  
んな風で別れて了はなければならぬなんて、私、餘り悲しい事だと思ひます……」

「無理は無い。だが、何うぞ辛抱してくれ。兄さんだつて愁い。お前の心も察しないでは無い。けれ  
ど、諦めてくれ。伊豆を出る時にも、くれ／＼も云つたやうに、お前と僕と二人の外には、世間も無  
い、兄妹も無いものだと思念してくれ。かうして暮らしてゐる今の僕は、何にも思はない。思はない  
では無いが、思はないやうに努めてゐる。だが、お前に然うして悲しい事を云はれると、僕は陽を



措られるほど愁いのだ。静野、何うぞ伊豆をあゝして出た時のあの決心を忘れないでくれ。兄さんのお願ひだー」

俊作の其の切ない心持は、妹の悲みよりも幾層倍愁いものか分らなかつた。静野もそれを思った。そして自分が悲めば悲むほど、兄を苦しめる事を思つた。彼女は健氣にも自分で自分の心を取直した。「兄様、貴方のお心持は能く分つてゐます。」と涙を拭きく云つた。「私が氣が弱いのでした。済みません。」

「世間は無くても、親は無くても、外に同胞は無くても、僕達は二人だけで澤山な筈ぢや無いか。」  
「えゝ、澤山ですわ。」

「あの高い空を御覽、我々は設ひ世の中へ立交らなくても、此の大きな自然があるぢや無いか。寂しくても、犬も居れば鶏も居る。愁じ煩い人間よりも、禽や獸を相手に暮らしてゐる方が暢氣ぢや無いか。」

「えゝ、本當に然うですわ。兄様、勘忍して下さい。」と彼女は涙を拭つた後の腫ぼつたい目を和こりさせて、心持頭を下げる。

「何有に、勘忍するも爲ないも無いさ。僕こそ反つてお前を可哀さうだと思ふんだ。然し諦めて了へば、結局此の方も好いちや無いか。どう、僕は最う鶏に餌を遣らなくぢやならない時分だ。お前も

張り物が悉かり乾いて飛んでるぢや無いか。あゝ風が少し出たやうだ。銀杏の葉が散ること、散ること。」

俊作は裏の方の鶏小屋へ廻ると、オーノルも一緒に附いて行つた。静野はそれから長いこと獨りで物思ひに沈んでゐた後で、漸う庭へ降りて張り物の始末をした時には、張板は最う日蔭になつた。

災

難

鶏小屋にはブリモースロックだの、アンダルシヤンだの、白色レグホンだのと云つた幾種類が、小屋を仕切つて別々に飼養されてゐる。俊作の姿を見えると、小屋中の鶏がくゝくゝと嬉しさうな含み聲を立てながら、金網の前へ舞めき寄つて来る。前へ出られなくて、重い翼でばたく舞ひ廻つのもあつた。

「こんな物でも餌をくれる者は見覚えてゐる。可愛いもんだ。」

彼は今迄の不快な氣持も些つと忘れたかのやうに微笑んで、暫く小屋の中の騒ぎを眺めてゐたが、旋て傍の物置から餌函を持つて来て、金網の彼方此方から萬遍なく粒餌を撒いてやつた。鶏は我勝に啄む。



それから青菜を遣つたり、水を取更へてやつたりして置いて、俊作は地尻の細い溝川を飛び越えて、畔傳ひに裏山の方へ行つた。浅い柴山には、厚い下草の中に蛭々と細い路が附いてゐるのを、彼は黙々と歩いて行く。何か深い考へに沈んでゐるらしく、首を垂れ、腕を組んだ主人の其の浮かない氣色に、附いて来たオーノルも、毎ものやうに燥ぐのを憚つてゐるらしく見えた。耳を垂れ、尾を垂れて、彼の後ろをとぼくと歩いてゐる。

旋て俊作は雑木の疎な柴山を抜けて、小松の茂つた赭土山との間の谷地へ出た。そして雨を受けた日當りの好い、西風を遮つた窪みに、半ば枯れ懸つた芝草が藁でも敷いたやうに乾いて、さも坐り心地が好さうに見えたので、彼は其處へ半意識で腰を下した。日向を慕つて集つてゐた蟲が驚いて、枯草の中に些やかな音をさせて散つた。何處かで山鳥の聲が寂しく聞えた。オーノルも一緒に其處へ尻を下してまじくと主人の顔を見守つてゐたが、主人は聲一つ懸けてくれるでも無く、全で其處に犬が居るか居ないかと思つて見ないらしく、両手で頭を抱へて俯いたきり身動きもしない。で、自分もぐたりと體を横へて、欠伸をした。

「妹が可哀さうだ」程経つてから俊作は思はず口に出して云ふと、顔を擧げて溜息をした。

オーノルは瞑つてゐた目を直ぐ開けて主人を見た。然し主人はそれきり又俯いて了つたので、自分も其の厚ぼつたい耳をびくびくと動かしたきりで、又目を閉ぢた。

伊豆を出てから足掛け五箇月、最う半年近くの間、俊作は實に苦しい絶間の無い懊惱の日を續けて来た。恩師の秦博士にだけ告別の手紙を出して置いて、誰にも知らせず、誰にも分らないやうに、父の遺骨を抱へて宇佐美村を出たのは、能くくの思立ちであつた。彼は希望も功名も、前途の一切を抛ち、有らゆる光明から自分を葬つて、一生を暗い日陰で黙つて果てる覺悟であつた。父の手に残つてゐた現金と、少しばかりの債券とを頼りに、妹と二人で、社會の外の孤獨の生活を靜に送らうと決心した。そして父の遺骨を鎌倉の菩提處に埋めてから、其處から餘り遠くない此の小坂村の、宇山の内に今の住居を定めたのである。近頃は家の後ろに少しばかりの畑地を借りて、自分達の食べる野菜物を作つたり、鶏を飼つたりして、其の卵子を一日置き二日置きに仲買の棒手振へ卸すのが、可なり暮らしの足しにもなつた。丁度父の淳造が名古屋から三人の子共を抱へて、流れく伊豆の宇佐美村へ落着いて、其處で貧しい些やかな生活を初めたと同じやうに、彼も一人の妹を抱へて、此の人里離れた一軒家で、然うした約やかな生活を初めたのであつた。

若い俊作はそれで血も冷め、涙も涸れた譯では無かつた。人一倍情にも燃え、功名にも燃え易い青年の心の火は消す事は出来なかつた。彼は然うして暮らしてゐる間にも、一日として東京の事を思ひ出さずには居られなかつた。今二三箇月で卒業の出来た學校の事も考へずには居られなかつた。博士や縁子の事も忘れられなかつた。其爲めに彼の胸は悩み、心は苦しんだ。然し何よりも一番彼に切な



い思ひを爲せたのは、妹の静野の慙しい姿を、始終見てゐなければならぬ事であつた。若い娘の身  
そらを、白粉一つ附けるでは無く、明けても暮れても家の世話と、兄の面倒とで忠々しく立働いてゐ  
る。女親には生れると死別れるし、一人の姉は行方知れずになつてゐるし、女らしい口を利き合ふ友  
達とても無い。其の寂しい朝夕の中に、其の怜しい姿を、来る日もく眼あたりに見れば、兄の身と  
して涙無しには居られなかつた。彼女はかうした忍黙の生活を小い時から續けて来て、是から先もそ  
れを繰返し繰返し年を取つて行くのだ。少女の時代から娘盛りの年頃になるまでは、父の爲めに然う  
して過した。其の父が亡くなると、今度は又兄の爲めに、此の先白髪になるまで彌張り然うして過し  
て行かねばならないのである。此のまゝ年を取つて、あの濃い長い黒髪が薄くなり、白くなつて行く  
静野の寂しい行末を思ふと、俊作は自分の寂寞も忘れて、哀れな彼女の爲めに、居ても立つてもゐら  
れないやうな心持になるのであつた。

「此の悲しむべき運命は何所から來たのか。」

それは彼女が生れるとから、いや、彼女が未だ生れない先、母の胎内に宿つてゐる時から、既に定  
まつた宿命なのである。母は彼女を身籠つたまゝ、社會の外なる牢獄に繋がれた。そして彼女が此世  
へ産聲を擧げたのは、其の世間と絶たれた獄中である。彼女が呼吸した此世の最初の空氣は、其の人間  
間界の地獄の業風である。それは彼女が生きてゐる限り、自分に恥ぢ、人に憚らねばならぬ一生

の悪縁である。汚辱に初まつた彼女の生は、終に呪はれたる運命である事を免れない。

「爾生れざりしならば福ひなり！ 然うだ、静野のやうな因果な宿命を背負つて、此世に寧ろ生れて  
來ない方が好かつたのだ。」

然うした因果を背負はせて、人の子を此世に送つた其の大意志。一切を支配し、一切を攝理するも  
のゝ意志を呪はずには居られないやうな、神經的の興奮を俊作は經驗する事すらあつた。

黙つてゐてさへ、それ程に彼が傷心させられてゐる其の妹の口から、曩のやうな慙しい言を聞か  
されると實際腸を撚られるよりも愁かつた。今も彼は静野の曩の言で新しく胸に湧き起つた彼女の  
其の悲しい運命に就いて思ひ惱んでゐるのである。

「あゝ、何うする事も出來ない妹のそれは宿命なのだ！ 若し果して最後の審きの日に、人間が神  
の前に立たされる事があつたら、自分は神に向つて眞先に抗議を申込ますには居られない。自分の事  
は措いても、妹のやうなあの善良な美しい者に、何の試みで然ういふ惨めを見せるか。」

俊作は太い溜息を吐くと、ざら／＼した氣違ひのやうな目を擧げて、當も無く空間を見た。何時か  
西に傾いた日射しは、彼の坐つてゐる窪地を蔭らせて、赭土山の地肌や、柴山の黄ばんだ下草の上に、  
明々と弱い光を薄ら寒さうに照らしてゐる。日影の鈍つた、高く／＼底冷たく澄んだ空を、鴉が二羽  
三羽、黙つて里の方へ飛んで行く。



「生れて来たのは自分の意志ぢや無い。」俊作はむつくり立上りながら、「若し本當に神が此の世を支配してゐるものなら……」

不意に彼は自分の體の何處かに、はつと衝動を感じて反射的に飛び上つた。が、よろ／＼として直ぐ前へ倒れて了つた。倒れる瞬間、どんと一發銃聲を聞いた。頭の上の小松林で、ばた／＼と鳥の羽音がした。と、向うの柴山の蔭からふわりと白い煙が舞ひ上つた。そして雜木の中をさつと風のやうに飛んで来るものがあつた。

オーノルは跳り上つて、低い唸り聲を立てると、行きなり銃聲のした方へ駈け出さうとした。けれど、俊作の倒れたのを見ると、忙しく嗅鼻をして其の周りを駈け廻つたが、急に四脚を揃へてぶるぶると身顛ひした。セッター種の獵犬が一匹其處へ現はれたのである。犬と犬とは胡散さうな風をして鼻と鼻とを押着けて見てから、うそ／＼と體を嗅ぎ合つた。俊作は地平へ倒れたまゝ、苦しげな呻き聲を立てゝゐる。

間も無く犬の跡を追つて、柴山の雜木の蔭から谷地へ降りて来る人影が見えた。身幅の詰まつた窮屈さうな、古い茶つばい色の背廣に丸帯を締めて、獲物囊と雙眼鏡のケースとを兩肩から十文字に掛けたが、十番の二連發銃を小腋にして近づいた。其の獵装をした丈高いがつしりした體格、烏打帽子の下の日燒のした赭黒い顔、それは秦博士の息、縁子の兄の朔郎であつた。そして先に飛んで来た犬

は、秦家の飼犬のラックであつた。

「やゝ、大變だ！」彼は思はず叫んだ。

其處の蔭になつた窪みへ廻つて、初めて地平に倒れて呻いてゐる俊作の姿を見出した時、朔郎は顔色を變へて棒立になつた。

「今の丸が逸れたのだ。此人を撃つたのだ。」と咄嗟に思つた。

彼は茫然として、暫くは應急の事も忘れてゐた。

### 汽車の中

行方知れずになつた兄の俊作や、妹の靜野に折角運り合ひながら、ろく／＼打解けた話をする暇も無く、頑な／＼兄の爲めに追ひ出された多賀子は、其のまゝ急いで大船のステーションへ取つて返した。丁度二時何十分かの上り列車に際どく間に合つて、驛員に急ぎ立てられながら漸と二等車に乗り込んだ。そしてシートへ腰を下すか下さないに、發車の汽笛が鳴つた。列車と列車ががちや／＼打突かり合つて弾力性の軽い動搖が車體に傳はると、幾つもの重い車輪が靜にレールの上を廻り初めた。「まあ可かつた。」



多賀子は誰でもが然ういふ場合に感ずるやうに、氣忙しい中にも一落着き落着いたと云ふ心持で、ほつと息を吐いた。そして自慢のダイヤのちか／＼光る指環の手で、女優鬘の後れ毛を撫で上げたり、襟を掻き合せたりしてから、クツションに居住ひを直して、漸と寛いだ氣持になつて車内を見廻した。それは國府津發の列車なので長いボギイ車には乗客も疎らであつた。彼女の眞向ひには、若い不色なヤンキイガールのお跳ねらしいのが二人、何かべちや／＼喋つたり笑つたりしながら、紙袋から焼栗を掴み出しては口へ運んでゐた。其の西洋人二人を除いた餘の乗客の總ては、裝から粧りから普通の婦人と違つた多賀子の姿を、じろ／＼と珍しさに眺めたが、それも直き見慣れて、書物を読んでゐた者は書物に、新聞を見てゐた者は新聞に、居眠りをしてゐた者は居眠りにと歸つた。そして一つ列車に揺られながら、名々が思ひ／＼の時を過した。

多賀子も列車の軽い動搖に身を任せながら、今日の出來事を落着いて考へて見た。あんな處で、あゝして兄や妹に偶然運り合はうとは思はなかつた。又兄や妹があんな處であんな暮しをしてゐるのも意外であつた。何かそれには深い事情もあるやうな事を、妹の靜野が些つと洩らしたけれど、委しくそれを聞き質す暇も無い中に兄の俊作が歸つて來て、遮二無二自分は追ひ立てられて了つた。「兄様も阿父様に似て本當に頑固ね。」と多賀子は心に思つた。「それにしても靜ちゃんが可哀さうだわ。あの年頃で何一つ面白い思ひをするぢや無し、氣難しい阿父様や兄様の面倒を見／＼年を取つてあ

あして田舎から田舎へと埋もれて行くんだもの、本當に埋まらない役だわ。今度芝居が開いたら、一度見せてやりませう。隣緒切つて初めてなんだから、何んなに喜ぶか知れやしない。」

彼女は暢氣にそんな事を思つてゐた。そして俊作が何故あんな風の中から隠れて了つたのか、不思議には思つても深くは考へても見ない。自分の爲て來た事や、現在に爲てゐる事が、親兄妹に何んな思ひをさせてゐるか、そんな事も一向考へては見ない。何年振りかで兄妹が折角運り合つたのに、自分でも忘れてゐるやうな古い昔の過ちを謝つても赦さないので、父の氣質を受け繼いだ兄が、唯偏屈一方で、氣が捌けないからだと然う思つてゐる。最う少し氣が捌けてゐたら、設ひ亡くなつた父は何う云つてゐたにもせよ、過ぎ去つた昔の事なぞ淺りと水に流して、血を分けた親身の妹に思懸け無く運り合つた其の喜びを、正直に喜んで見せなければならぬ所である。

「それにしても、兄様のやうなあんな偏人が、あんな立派なお嬢様に思ひ附かれるなんて希代ね。お嬢様は其爲めに故々伊豆まで會ひに行らしたりして……戀は思案の外つて云ふが、全くだわ。」と彼女は獨りで微笑んだ。「お嬢様があのお宇佐美村の徳爺やの店の前で俵を降りて、兄様は行方不明だと分つた時、あの時のあの失望なすつた様子つたら無かつたわ。私も當にして來た親の家がそれだし、歸るにもお金はないし、あの時は随分がっかりしたけれど、其の私よりも最一層お嬢様の失望は甚かつたのなもの、見てゐても慰しいやうだつたわ。それでも私の方が先に兄様の居處を捜し當てたから、



あの時のお約束通り、かうして直ぐ其の足でお知らせに上つたら、お嬢様も何んなにかお喜びなさるだらう。」

然う思ふと、縁子の喜ぶ顔が目に見えるやうで、多賀子の心は弾まずには居られなかつた。早く會つて、早く知らせたい。彼女は急行で無い此の汽車の、驛々毎に停車するのが括かしくてならなかつた。

「無論私の事だつて、お願ひすれば心配して下さるわ。お嬢様になり、先生になり口を利用して頂けば、何ぼ片偏屈な兄様だつて、豈かあんな昔の事なんか盾に取つて、然うくは頑固な事も云ひ張れないぢや無いの。お世話を受けたあの方達のお顔に面しても、それでも赦せないとは云はれないわ。然うなれば裕の片もまあく附いたやうな譯で、私も本當に重荷を卸すわ、あの子の爲めに何のくらの肩身の狭い思ひをして、爲なくても好い苦勞をしたか知れやしない。現に今日だつてあの久米の平凡畫工が、皆なの前で子持の事なんか云ひ出して、私を厭がらせるんだもの。久米でさへあれだから、蔭ぢや皆なが何んな事を云つてるか知れやしない。あゝ然う。皆など云へば、今頃は鎌倉で、然ぞ私の事が話題になつてゐるだらうね。」

一つの事に打突かれれば、他の一つの事は忘れて了ふ。考へから考へへ連絡無く飛び移つて行つて、全て思想を統一する事の出来ない小兒のやうな彼女は、今日午後の三時まで、日本劇場の一座の者

と鎌倉で落ち合ふ事も浮かり忘れてゐたのを、今偶と思ひ出したのであつた。あゝして連れの者とも途中で別れて了つて、此のまゝ鎌倉の方へも顔を出さずじまつたら、あの口の悪い連中が黙つてゐさうな筈は無い。餘所目には暢氣さうに見えても、内部へ入ると小煩い七面倒な芝居道の事である。殊に日本劇場は女優が多いので口が煩かつた。然しそれも慣れつこになつてゐるので、多賀子も甚く氣にはしなかつた。然し今日の幹事の幕内主任や、専務の感情を害ふ事だけは氣にならないでも無かつた。殊に幕内主任は今日の餘興に銀之丞を踊る筈で、彼女は乳母の役を附合ふ事に打合せてあつたのである。

「だつて、爲方が無いわ、こんな羽目になつたのも。貴方は何うも須保良で困る、今日々のアーチストが責任の觀念を何うとか斯うとかつて、又毎もの決り文句を聞けば済むんだわ。」

一つ事を、何時までも屈托してゐる事の嫌ひな多賀子は、直ぐ然う諦めて了つた。幕内主任の感情を害ふと、好い役が附かない。藝にも貫祿にも大した等差の無い彼等女優達に取つては、切めて役で以て儲けねば同じやうな多勢の群から、特に自分の存在を公衆に認めさせる事が出来ない。好い役の附く爲め、儲かる役を振られる爲めに、彼等が幕内主任に氣を使ふ事は一通りでは無い。唯一人多賀子だけは幕内主任が何と思はうが、何んな役が附かうが、何うでも可い主義で不憚から通して来た。今も彼女は自分だけが幹事達の骨折を無にするさへあるに、幕内主任がわつと云はせる意りの趣向を



罪の人

自分故にお流れにさせて、後の其の祟りも思はないでは無かつたが、毎もの好い氣な樂天的性質から、結局そんな事は何うでも可い事に片付けて了つた。

そんな事よりも、緑子や、緑子の父の秦博士に會ふといふ事が、今の彼女に取つては何よりも大事な事であり、急な事であつた。彼女は其事の爲めに興奮し、そして其事が彼女を有頂天ならしめた。それも俊作に追ひ立てられて引返す時には自分の詫びの愜ふやうに緑子父子に口を利用して貰ふのが、彼女の當面の問題であつたが、汽車に乗つた時分には、それよりも先づ兄の居處の分つたのを、父子に知らせる其の事が端的な希望になつた。それを自分の口から聞いた時の、緑子や博士の驚喜や、それを知らせた自分に向つて、二人の感謝を考へると、彼女は何か博士父子の爲めに大きな勳でも爲たやうに、得意と満足で好い氣持になつた。彼女の頭には最う朋輩の陰口も無かつた。幹事達の思はくも無かつた。唯一刻も早く、緑子や博士に俊作の在り家の分つた事を知らせたかつた。

汽車が半分道も來た頃、彼女は偶と或る事を思ひ出して急に悄げた。それは此夏の初め、圖らず伊豆で博士父子に落ち合つた時、一通りならぬ世話になつたきり、其のまゝ未だ禮にも行かなかつた事である。其時彼女が當にして行つた親の家は引越して了つたし、歸るには旅費も無し、其上連れてゐた子共には病み附かれるし、博士に救はれなかつたら何うなつたか分らぬ。宇佐美村から伊東へ引擧げる俵賃から、其處で滞在した宿料は固より、子共の藥禮、歸る時の旅費までも悉かり博士に負さつ

て了つた。博士は悪い顔もせず何から何まで快よく賄つてくれた。初めの中は多賀子も有繋に極りが悪くて、何かと云譯をしたり、東京へ歸り次第にお返しするからと、一々斷つたりしたが、博士は毎も唯和こくして領いてゐた。多賀子も終ひには全で自分の舅か、伯父にでも厄介になつてゐるやうな心持で、一々斷つたり禮を云つたりしなくなつたけれど、東京へ歸つたら、何んな都合をしても直ぐ此の金は返さなければならぬと、心には思つてゐた。若し金で返すのが、先方の深切盡くに對して失禮に當るやうなら、それに相當した品物か切手でも持つて、是非禮に出なくてはならないと思つてゐた。所が、それきり今日まで顔出しも爲なければ、禮手紙一本出して無かつた。それは彼女も遍天の最中で、東京へ歸つても直ぐには工面が附かなかつたからでもある。けれど、それから半年近い今日まで、それだけの金が出來ない譯でも無かつたのだが、彌張り生れ附の暢氣と須保良とから、つい投遣りになつて了つたのである。

多賀子も自分の其の不義理を思ふと、今日々突然秦家へ訪ねて行く顔は無かつた。今まで弾み切つてゐた心も一度に減入つて、寧ろその事、次のステーションから鎌倉へ引返さうかとまで考へた。然し彼女は直ぐ又其の目の前に打突つた障壁を、苦も無く滑り抜けて了つた。

「そりや顔出し爲て置いたに越した事は無いけれど、爲ないからつてあゝして伊東で三日も四日も一つ部屋に、親子か姉妹のやうにして暮らして、私が何んな心持の人間かぐらゐは分つてゐるわ。あの

罪の人



時のがあの儘になつて居る上に、又今日無心にも行くと云ふのなら敷居も高いけれど、お二人があんなに知りたがつて居らした兄の行方を、故々お知らせに上るんだもの、先生もお嬢様も何んなにか恩に着るわ。今頃あの時の事なんか氣に懸けたら、却つて先方様で迷惑にお思ひなされるわ。それに先生のお氣前で、立換へたお金の事なぞ何時まで各々覚えて居らつしやるものか。私も本當に苦勞性だよ。」

一旦暗くなつた彼女の心もそれで、悉かり又明るくなつた。そして汽車が東京驛へ着くと急いでプラットホームへ降りて、真先に降車通路のトンネルを出た。

「こんな時は景氣好く、自動車で飛ばせたいんだけれど……」と然う思つて、多賀子は些つと懐都合を考へて見たが、それには少し心細かつた。

小石川の指ヶ谷町までは、ステーション前から電車の便もあつたが、彼女は結局其處の構内から俥に乗つた。

取次の男

案博士の邸は小石川の白山で直ぐ分つた。指ヶ谷町へ向いた正門前で俥を降りた多賀子は、思つたよ

りも大きな邸の構へに肚肝を抜かれた。廣い一廓を取違らした練堀、大きな塀重門から遙に玄關へ續いた廣い砂利路、左右に茂り交した植込の奥深い梢越しに、日本館の瓦屋根や、西洋館の石板葺が幾棟か重なり合つて、明るい秋の日にてらく光つてゐるのを望むと、彼女は些つと氣怯れして自分の身装など見廻した。

眞面目な用事を抱へて、かういふ邸方へ出るのには、自分の其の際々しい装が幾らか氣が射さぬでも無かつたが、それよりも彼女は履物の龜末なのに氣が退けた。今まで浮かりしてゐて氣も附かなかつたが、今日皆と大船のステーションへ降りた時、野掛をするのに軽いやうにと、ステーション前の茶店で穿き更へた紅緒の麻裏草履を、其のまゝ穿いて來たのであつた。然し履物で氣は退けても、身装で氣は射しても、今更引返す譯にも行かないので、思ひ切つて門を入つて行つた。丁度屋敷内ばかりで飼はれた番犬が、内では氣が強いが、外へ出ると全きり活地無く變るやうに、彼女も不斷の彼女とは思へないほど神経的な顔をしながら、玄關の車寄に固くなつて立つた。そしておづく案内のべルを押した。廣い屋敷のしんとした中に、其のべルの感じた音が何處か遠くの方で聞えた。

「餘り曠々しいわね。内玄關の方へ廻つたが可かつたか知ら？ でも、お詫びや無心に上つたのぢや無し、云はゞお二人を喜ばせに故々來たんだから、此方がお禮を云はれるお客様だわ。些とも退け身になる事なんかありやしない。」



多賀子は案内を乞つて了ふと、それで肚が据つた。今まで何をあんなにびく／＼したのか、自分ながら馬鹿々々しく思へた。そして暫く耳を澄まして待つてゐたが、何時までも人の出て来さうな氣勢も無いので、今度は手頸に掛けてゐたオペラバッグを、故々左手へ持ち更へて、右の拇指で最一度強くベルの鈕を押した。

「私も此のくらの構へに氣壓されるなんて、活地が無いわね。」と彼女は獨りで嘖／＼なつて、「だが、お里がお里だから爲方が無いわ。外では精々派出に遣つてゐても、家へ歸れば四間か五間の借屋住ひなんだもの。赤はらちや無く正直な所、勝手が違つて魂消申すわ。」と呟いて苦笑ひをした。

と、何時の間に出て来たのか、玄關の正面の衝立の前に、一人の青年が黙つて突立つて此方らを眺めてゐた。多賀子は初めて氣が附いてはつとした。自分の今の獨言を聞かれたかと思ふと極りが悪かつた。然し何時の間に此人は出て来たのか。自分がベルを押す前から其處に立つてゐたのか。それとも初めのベルで出て来たのを、自分は氣が附かずに又ベルを押したのか。それとも後のベルで出て来たのか。何だかすつと前から其處に立つてゐるやうにも思へるし、又然うで無いやうにも思へるし、多賀子は變な氣がした。

「御免遊ばせ。」

それは此夏伊豆の伊東へ博士父子を迎ひに来て、自分とも顔馴染の染井だと思つて取ると、多賀子は

其の目鼻立のばつとした大間な顔に愛嬌を湛へながら、軽く會釋をして式臺際へ寄つて行つた。然し染井は衝立を後ろにすつと突立つたまま、會釋を返すでも無ければ、顔の筋一つ動かすでも無かつた。それでも心持首を傾かせたやうにも思へたけれど、或ひはそんな氣がしたのかも知れない。唯其の冷たく澄んだ左の目が、ぼち、ぼちと瞬きしたのだけは、彼女にも瞭り認められた。

「まあ、暫くで御座いますわね、其後は本當に御無沙汰を爲つちまひまして、申譯がありません。」と多賀子は持前の馴々しい調子で喋り出した。「疾くに一度お伺ひしなけりやならなかつたんですけれど、あれから此方、追懸けく舞臺の方が忙しかつたものですから、存じながらつい失禮をしてしましまして……」

「何か御用ですか。」と染井は和こりともせず云つた。

多賀子が愛嬌たつぷりな表情をしたり、頰いほど體に態をしたりして、人懐つこく云譯をするのを、黙つてちつと見下してゐた彼は、何か未だ云はうとするのを遮るやうに、穿いてゐたスリツバをびたりと音をさせた。

「私？」多賀子は對手の其の墨の上へ穿いてゐるスリツバを氣にして、ちらりと見遣つたが、直ぐ又和こりとして「え、お嬢様に些いとお目に懸りたくて伺つたのですが……お嬢様はお變りも御座いませんか。」



「お嬢様は只今お留守です。」

「まあ、お留守で居らつしやいますの。何方へ？」

「お午前から別荘へ行らつしやいました。」

「お別荘へ？ それはまあ……あの、失禮ですが、お別荘は何方まで？」

「鎌倉です。」

「まあ、然うですか。私も今日實は鎌倉の方へ参つたのですけれど、急に是非お嬢様にお目に懸らな  
けりやならない事が出来ましたものだから、途中から引返して参りましたの。ちや、丁度行違ひに  
なりましたのねえ。」と彼女は當惑さうに眉を擧めたが、「それちや先生は御在宅で居らつしやいませう  
か。」と直ぐ聞いた。

「先生はお居ですが……」

「まあ可かつた。」と仰山に胸を撫で、「それでは恐入りますが、先生に私が是非お目に懸つて頂きた  
い用事が出来まして、お伺ひしましたとお取次下さいました。」

「先生はお目には懸られないでせう。取次するまでもありません。」と染井は靜に首を掉つた。

「まあ、何故お目に懸つて頂けないでせう？」と多賀子も些つと氣色ばんだ。

「お忙しいですから。それに、」と染井は對手の際々しい姿を無遠慮にじろく見下しながら、其の白い

冷たい顔を和やりとさせて、「貴方のやうなお方には特別にお會ひにならない事になってゐます。」

「何故私には特別にお會ひにならないのでせう？ そんな筈はありません。」と多賀子は思はず辰巳上り

にならうと爲るのを、自分で努めて抑へて云つた。「私も伊東であんなに御厄介になりました事ですし、

それにあの時のお約束で、是非お目に懸らなければならぬ用事が出来ましたのですから、故々かう

して出先から引返して、お伺ひしたんぢやありませんか。それを取次いで下さらしないで、頭からお

會ひにならないと決めて居らつしやるのは、餘り貴方の一了簡で圖らひ過ぎますわ。お會ひにならな

い筈はありません。私が斯うくだと取次いで下されば、屹度お目に懸つて頂ける筈ですわ。」

「駄目ですよ。」と染井は對手が急込むほど落着いて、アクセントの無い聲で冷淡に云つた。

「私、何うでもお目に懸らなくちやならない用事があるつて、こんなに云つてるのに、貴方には分ら

ないの？ 其の用事も私の用事と云ふよりも、先生やお嬢様にこそ大事な用事なんですよ。さつさ

と取次ぎなさいよ。」

「先生やお嬢様に大事な用事と云ふと？」

「それですよ、貴方、兄の居處が分つたのですよ。」

「えー」

染井はさつと顔色を變へた。そしてスリツバのまゝ思はず玄關の敷居際まで出て来て、ちいと喰入



玄關拂ひ

るやうに多賀子の顔を見詰めた。其のすらりと細い靱かな體が微に顫へてゐる。

き

玄關拂ひ

「それが、思懸け無い處で思懸け無く逢つたのよ。」多賀子は染井の吃驚したらしい様子を、それ見ると云つたやうに和やくしなから、調子附いて云つた。「ですから私、一刻も早くお知らせしたいと思つて大急ぎで参つたのですわ。兄の居處が分り次第、何を措いても、直ぐ知らせ合ふつて云ふあの時のお約束なんですもの。」

「それは先生とのお約束ですか。それともお嬢様との……。」と染井の聲は少し顫へを帯びて掠れたが、それを紛らすやうに一つ虚咳をして、「お嬢様とお約束ですか。」と聞いた。

「お嬢様とですの。お嬢様はそりや、俊作の行方を何んなにか氣にして居らしたのですからね。」と多賀子は意味ありげに和こりして見せて、「けれど、お嬢様がお留守なら、先生でも結構ですわ。お二人があゝして折角伊豆くんだりまで訪ねて來らしつて下すつたのに、行方知れずになつてゐて本當にお氣毒をしましたが、それでも今日漸と分りまして、私も是でお二方にお顔向けが出來ると云ふものですわ。ですから、早く先生にだけでもお耳に入れたいと思ひますの。」

「可けません！ 可けません！」と染井は早口に急込んで、烈しく首を掉つた。

「何故？ 何が可けませんの？」と多賀子は突懸かるやうに云つたが、又和こりして、「貴方も若い癖に情無しね。怨まれてよ。」

「可けません。何でも可けません。」

「貴方は私が斯ういふ職業の女だから、それで先まぐつてそんな事を云つて居らつしやるんでせう。けれど、それは飛んだ疝氣筋と云ふものよ。俊作の事で一生懸命になつてゐるのは、妹の私よりも、お嬢様なのです。貴方が自分で圖らつて、私を此のまゝ追ひ歸して了つたら、後で何んなにかお嬢様に怨まれますよ。」

然う云ふ彼女の言は、一句々々染井の肉を焼鍼でもするやうに、びり／＼、びり／＼と體中が遠擧的に顫へた。彼はちつとそれを怯へるやうに、兩手を堅く握り締めてゐたが、それでも瘦せた肩先が不隨意に刻まれた。

「江間俊作と云ふ人は、今では當お邸と何の關係もありません。先生に取つても、無論お嬢様に取つても、縁も由りも無い人です。」と染井は自分で思つたよりも冷靜に云ひ切ると、初めて額に零れ被つた髪を毎もの靱かな手附で撫で上げた。「ですから、其の人の居處が分らうが分るまいが、當家の知つた事ぢやありません。俊作と云ふ人が今日思懸け無い處で、縦んば乞食をしてゐようと、野倒れ死を

玄關拂ひ



してゐようと、それが何うしたと云ふのです。そんな縁も山りも無い事を、敢て先生やお嬢様にお知らせする必要は些とも無いのです。お歸りなさい。」

「何仰しやるの？」多賀子も餘りの言にむつとして、其の大柄な體を揺すり上げて云つた。「貴方は一體何のです？此のお邸の書生さんぢやありませんか。玄關番ぢやありませんか。御主人をお訪ねして来たお客様に對して、取次もしないで歸れとは生意氣ぢやありませんか。」

「歸れ！」と染井は蒼くなつて云つた。

「かうなつちや私も、貴方に追拂はれておめくとは歸れません。第一それぢやお約束の手前、お嬢様に濟みませんからね。」と多賀子は持つてゐたオペラバッグの中から櫛なぞ取出して、頭を弄り懸けながら、「お留守なら左に右に、居らつしやるものを取次がないなんて、不都合ですわ。私、お目に懸らない中は歸りません。お嬢様が鎌倉の別荘へ行らつしたなんて、それも大方嘘でせう。貴方の猿智恵から割り出した出たらめなんでせう。」

「失敬な。歸らなければ摘み出すぞ！」と染井はスリツパで敷居框を蹴つた。

「ほゝゝ、狎仔や猫の子ぢやあるまいし、貴方の其の瘦つぼちで摘み出せるか出せないか、試しに遣つて御覽なさいよ。」と多賀子は鼻笑つた。「だが、私は何も貴方と此處で喧嘩をしに來たのぢやありません。貴方も素直に、取次は取次の役目を爲たら可いぢやありませんか。」

「成らん！取次ぐ事は斷じてならん。」

「ぢや、お嬢様の行らつしたと云ふ其の別荘は、一體鎌倉の何處なんです？私是从其方らへ伺つても可い。」

「そんな事が……」と染井は忙しく片目を瞬きさせて、「いや、教へる譯には行かん！」

「能く／＼物の分らない唐變木ね、焦つたい。ぢや私も、先生にお目に懸るまでは、此場を一寸も動かないばかりよ。」

「可、それなら！」

染井が瘦せた肩を聳かして、一足式臺へ踏み降りた時、曩から可なり長い間、何かごとく押問答をしてゐる玄關の様子に氣が附けてゐた康子夫人が、自分に奥から出て來た。

「染井さん、何です？」

「は。」と染井は慌て、式臺へ兩足降りて、スリツパを後ろへ脱ぎ遣ると一緒に、上半身を恭しく夫人の方へ屈めて、「何時かもお話しました江間君の妹の子持女優が……草村露子ですが……それが先生かお嬢様にお目に懸りたいと申しますので、只今斷つてゐる所です。」

夫人は見る／＼顔色が變つた。そして何か穢らしい物でも見るやうに露骨に其の顔を燈めて、多賀子の頭先から足の先まで見上げ見下し、ながら、染井に聞いた。



「此方らが然うなの？」

「は。」

「これは奥様で居らつしやいますか。」と多賀子は急いで櫛を藏つて、丁寧に會釋をしながら、「私、俊作の妹の多賀子と申す者で御座いますが、先生やお嬢様には、此夏伊東で一方ならぬ御厄介になりまして……實は其節お索ねで居らつしやいました俊作の行方が、今日漸く分りましたものですから、それで早速お知らせに上りましたので御座いますの。所が此の書生さんが何う勘違ひしたのか、取次もしないで追ひ歸さうと爲さるるものですから、ついお玄關先でござつてしまして、誠に申譯ありません。」と丁寧に又頭を下げた。

「染井さん、斷つて了ひなさい！」夫人はそんな者と口を利くのも汚はしいと云はないばかりに、外方を向いて厳しく云つた。

「は、曩から最う追ひ拂はうとして居るのですが、何しろづう／＼しいので。」

「秦家の家庭は、素性の怪しい者や、身性の悪い者は一切近寄せちやなりません。さつさと歸つて貰ひなさい。懲り／＼です。」

夫人は最つと烈しく云ひたいのを、それでも身分柄を思つて泳へてゐるのであつた。義理ある娘の縁子が、母の自分を裏切つて、對手もあらうに俊作のやうな如何はしい素性の者に心を寄せるさへあ

るに、夫の博士までが一緒になつて、妻の自分を騙して伊豆くんだりまで彼の跡を追懸けて行つた。そして伊東の宿屋で、彼の妹の身性の悪い評判の女優と、其の女優の私生兒とを、娘や孫のやうに世話をしてやつたと云ふ事も染井から聞いた。其時は丁度久振りに艦から歸つて來た朔郎の手前もあつたので、夫人も何も云はずに胸を撫すつて済ましたが、今其の妹が臆面も無く邸へ訪ねて來たのを見ると、前の鬱憤が一緒になつて、自然と險脈も荒くならずには居られなかつた。それに俊作の行方が分つたとあつては、又博士や縁子が自分を出抜いて、何をするかも知れないと云ふ懸念もあるので、博士の氣の附かない中に、早く多賀子を追ひ出して了はなければならなかつた。夫人は烈しく染井を促した。

染井も豫ねて自分の戀敵が行方の知れなくなつたと云ふ事に、幾分か嫉妬の胸も癒やしてゐる所へ、今其の居處が分つたと云ふ事を縁子や博士に知らせるのは、其の居處が終に分らなくて、縁子を焦がれ死に死なせるよりも堪へられない事である。此のまゝ何時までも俊作の行方が知れないで了へば、縁子の切なる愛慕も自から薄らいで行かすには居まい。博士の愛溺も其中には醒めよう。然うして二人の心が俊作から離れてさへ行けば、何うして又自分がそれに代るやうな時が來ないとも限らない。そんな儂い望みでも僅に望みにしてゐる今の場合、俊作の居處が分つたとあつては、それこそ暴風雨の中に隣いてゐる裸火よりも頼りない自分の其微な望みが、一耐りも無く消されて了ふのだ。彼もそ



れを博士の耳に入れない中に、何うでも斯うでも多賀子を追ひ歸して了はねばならなかつた。

夫人の烈しい言に、染井は嫉けられた犬のやうに急に気が強くなつて、物をも云はずに行きなり多賀子の肩先を突飛ばした、機み食つて自分も式臺から足を踏み外したが、其のまゝ押遣り押遣りして、車寄の敵から突出した。瘦せてはゐても男の力で、多賀子は悔しいけれども敵はなかつた。到頭玄關前の砂利路へ突轉ばされた、

「ま、何を亂暴な事するんです！」と彼女は片手を砂利の上へ突いたまゝ、派出な長襦袢の膝小僧を顛はせて叫んだ。「畜生！人を何だと思つてるのよ。さ、最う誰にも會はして貰はなくて可いから、引込みの附くやうにして貰ひませう。」

「何をつべこべ云つてるんだ。彌喧しい！さつさと歸れ。」染井は跳のまゝ、敵に突立つて、肩で息をしながら云つた。

康子夫人は數子戸の蔭に半身引込めて、有繋にそれを正視しなかつた。

其所へ、爲事の相間を庭の芝生へ散歩に出てゐた主人の博士が、偶と玄關の騒しい人聲を聞き附けて直ぐ横手の中門からひよつこり出て來た。

「あ、先生！」と多賀子は飛び起きた。

「お、貴方は！」と博士は意外さうに目を見張つて、「染井君、何うしたのだ？」

「貴方！」夫人は耐らなくなつて數子戸の蔭から出ると、式臺に脱いであつたスリツパを引掛けて、ばた／＼と博士の傍へ駆け寄つた。「貴方、お願いですから彼方へ行らして下さい。御身分をお考へなすつて下さい。家庭の面目も……私の體面も……」

「然し、何もあの婦人が……敢て何も……」

「先生、兄の居處が分りましたのです。今日漸と分りましたので、それで私、お知らせに……」

「え、出たため云はずに歸れ！」と染井は力任せに多賀子を突遣つて、其前に立塞がる。

「何！江間の居處が分つた！」

「貴方！あんな者に取合はないで。さ、お願いですから……」

夫人は遮二無二夫の手を引張つて、中門の中へ連れ込んだ。

「貴方、私の心持にもなつて見て下さい。」と彼女は兩開きの扉をびつしやり閉めて、片手で門を支つて、「お願いですから、向後あゝいふ人達の事はふつゝりお諦めなすつて！」

中門の外では、染井の嘯附くやうな聲が聞えた。

「強情な。歸れと云つたら歸らんか！」



病院へ

染井の爲めに到頭表門の外まで追ひ出された多賀子は、餘りに豫期と反した不當な扱ひをされたので、何だか狐にでも魅まれたやうな氣持でぼかんと其處に立つてゐた。門際まで附いて来た染井は、何處へ隠れたか、見通しの砂利路には最う影も無かつた。そして廣い邸内は何事も無かつたやうに唯しんとして、木立の中の高い梢や、遙に見える屋根の妻や片流れへ、夕暮近い秋の西日があか／＼と射してゐる。

「何て亂暴な！ 本當に何て失禮な！」多賀子は漸と我に返ると、悔しさうに地輪踏んだ。「畜生！ 分らず家にも程のあつたものだ。」

其時は氣が立つてゐて感じなかつたが、玄關前で轉んだ時に何うかしたと見えて、左の腕が鈍く痛み出した。襟元も擴がり、膝前も崩れて、鱧皮のオペラバッグはぱくりと口を開いてゐる。然うした取亂した姿で門の前に突立つて、怨しさうに邸の中を睨んでゐる彼女の様子は、其の身装の際々しいだけ一層目立つて、道を行く者が皆不審さうにじろ／＼眺めた。酒屋の御用聞きらしい中小僧などは、故々車を留めて見てゐる。多賀子も初めて氣が付いて、着崩れた着物を急いで直した。

「お前さん、何をそんなにじろ／＼と見てゐるの？ 本當に失禮ね！」と彼女は帶留の金具をばちりと箝めながら、腹立紛れに小僧を決め附けた。

煙草の吸半しなぞ耳へ挟んで、見るから小生意氣さうな其の小僧は、へツと鼻で弾いて、

「此處は天下の往來だ。往來に立つてるのが何が悪いんだ。」と遣り返した。

「往來に立つてるのを悪いと云つてやしない。人の方をじろ／＼見てるのが失禮だと云ふのよ。」

「失禮ぢや無いと云ふのよ。藝者だか女優だか、ラシヤメンだか何だか知らないが、何うせ人に見て貰ふ玉なんぢや無いか。」

「何だ、此の小僧！ 生意氣ね。」と多賀子は眞赤になつて、「道草食つて、親方に叱られたら泣面をかく辭に。さつさといつちまへ！」と舞臺でするやうに足を一つ踏み鳴らした。

「何云つてやがるんでい。へ、氣違ひか……色氣違ひだらう。」

憎い捨白を残して、小僧はごろ／＼車を挽いて行く。最う其時には足を留めて見てゐる者が四五人もあつた。多賀子も有繫に極りが悪くなつて、急いで電車通りへ出た。其處には辻傳も見えないので、丁度來合はした電車へ飛び乗つた。彼女は不當な虐待を受けた腹立しさと、當り所の無い苛々しさで、胸はむしやくしやした。電車の中でも自分の方をじろ／＼見るやうな者があると、怖い顔をして睨み返した。こんな時には行き附けのカフェーへでも行つて、ウキスキーでも引呷けて、胸の晴れるまで



酔つばらつてやりたいと思つたが、何かに追立てられてゐるやうな慌立しい心持の中で、然うもして居られなかつた。

「あんな邸ばかり堂々たる邸に住んでゐても、何と云ふ物の分らない人達だらう。禮儀を知らないたつて、裏店の八野郎や山の神にも劣るわ。あの色の生白い女のやうな顔をした書生、伊東で初めて會つた時から厭な奴だと思つたが、全で支那の宦官見たやうな奴だよ。後から出て來たのが先生の奥様だらうが、あの優しいお嬢様の阿母様にしては、何てまあ怖らしい人だらう。あの様子ぢや先生も骨らしいわね。堅氣も可いけれど、あゝ偏屈で融通が利かないのも困りものだわ。兄にしたつて、妹にしたつて、彌張り然うよ。」

多賀子は心の中で皆を罵り貶して、僅に胸の鬱憤を紛らした。然し罵りながらも、博士や縁子に會へないのは左に右くとして、折角兄の居處も分つた此際、自分を赦して貰ふといふ事は、彼女自身の爲めにも、又子共の爲めにも諦められなかつた。

「先生やお嬢様が當にならなすとすれば、自分で何所までも謝るより爲方が無いわ。兄様だつて親身の妹なんだから、心から憎い譯でもあるまいから、此方の謝りやうで結局は赦すのよ。今度は何と云はれても、設ひ一つや二つ打たれても動く事ぢや無い。兄様と根比べよ。私さへ赦して貰へば、裕の事はそれから何うにでも話が附くわ。今度こそ坐り込んで動く事ぢや無いから！ それこそ挺でも

動きや爲ないから！」と多賀子は心で力んだ。

秦家で受けた虐待も侮辱も、彼女はけろりと最う忘れて了つた。そして兄の俊作の自分に對する怒りが、何んなに根深い所から來てゐるかと思ふ事も考へようとはせず、唯自分の都合の好いやうに自分で決めて、又東京驛から鎌倉行き汽車に乗つた。彼女は俊作の儘つてゐる事だけ覺えてゐて、今日俊作から云はれた言も大方忘れて了つてゐる。

「全で東京と鎌倉と懸持してゐるやうね。」多賀子は汽車の中でそんな事を思つて獨りで苦笑した。

俊作兄妹の住んでゐる山の内の小坂村へは、鎌倉まで汽車で行くよりも、彌張り大船で降りた方が便利であつた。多賀子は大船のステーション前の茶店で履物を穿き更へて、其處から俵を備つて乗つた。釣瓶落としと云ふ秋の日は、汽車が境野のトンネルを出た時、相模野の落陽が燃えるやうに明るかつたが、大船では最うとつぷりと暮れて了つた。浅い柴山や、刈跡の裸野を渡つて來る微寒い夕風が肌に沁みて、多賀子は襦袢を被けない俵の上でひしと襟を掻合せた。振返つて見ると、ステーションのシグナルの赤い火が、冷たい霧靄の懸つた薄暗い空にぼつちりと寂しく瞬いてゐる。偶とそれが見えなくなつたと思ふと、俵は松林へ入つて、急にぼつかりと暖くなつた。

俵は二十分と懸らない中に、俊作兄妹の佗住ひをしてゐる小坂村へ入つた。

「氣の小さい人達だから、俵で乗り着けたりしたら、贅澤だとか何だとか直き思ふから。」と然う思つた



人

多賀子は、小半町も手前で俵を留めさせた。「若衆さん、此處で最う可いわよ。御苦勞様。」  
 車夫は約束の車賃に、少しばかりの祝儀を貰つて、禮を云ひ、虚俵を挽いて歸つて行く。多賀子は書間見た空木垣に沿つて木戸の前へ出た。木戸は閉まつてゐたが、潜戸が直ぐ開いて、彼女は書間の時と同じやうに庭の方へ廻つた。見ると、縁側の雨戸が悉かり閉まつてゐる。そして家の中もひっそりとして、火影一つ洩れない。何處からか飼犬のオーノルが嗅鼻を爲い、寄つて来たが、書間最う顔馴染になつてゐるので、愛相に些つと尻尾を振つて、直ぐ又のそくへ行つて了つた。  
 「静ちゃん、ちよいと、静ちゃん。」と多賀子は小聲で妹の名を呼んで見た。  
 返事は無い。今度は少し高い聲で呼びながら、雨戸をこつこつ叩いた。彌張り返事は無い。耳を澄して見ても、人の氣勢は爲なかつた。  
 「何うしたんだらう。今から寝る筈もあるまいし、然うかと云つて、豈か私に居處を知られたと云ふので、急に引越して了つて、又宇佐美村のやうに行方を晦ましたつて譯でもあるまいし……」と然うは思ひながらも、何だか彼女も不安になつて来た。  
 で、玄關の方へ廻つて見た。其處も彌張り戸締めになつて、手を懸けて見ても開かなかつた。裏へ廻ると、鶏小屋の中からくくくと雞の喧騒が聞えて、塀へ入つて未だ間も無いらしかつた。臺所の水口は、外から外ら鏡を卸してあつた。

人

「儘に留守だわ。二人とも使ひにでも出たのか知ら？」  
 多賀子は途方に晦れた。二人が歸つて来るまで待つにしても、それが何時歸るとも分らない。田圃の中の一軒家で、近所に様子を聞くやうな家も無い。暗くはなるし、薄ら寒くはあるし、彼女は泣きたいやうな心持で、ぼんやりと水口の前に立つてゐた。  
 と、木戸の潜りの開く音がした。そしてびた／＼と草履の音がする。  
 「あ、歸つて来た！」  
 「誰だい？」と向ふから聲を懸けた。  
 それは年寄らしい女の聲であつた。多賀子は少し當が外れて、返事もせずちつと暗がりを通してゐると、向ふはマツチを摺つて、持つて来た提灯を點した。其の圓い火影の中に、皺の寄つた婆さんの凸凹の顔が仄やりと浮き出た。  
 「お婆さん。」と多賀子は寄つて行つた。  
 「へ？」と婆さんは後ろへ退いて、急いで提灯を點した。  
 「此處の家の人達は何處へ行つたんでせう？」  
 「貴方は何誰だね？」  
 「私は此處の親類の者ですが、折角訪ねて来たのに皆な留守で、様子が分らないものだから困つてゐる。」



罪の人

るのよ。一體家の人達は、二人とも何うしたんでせう？」

「へえ、親類の方かね。ぢや今日のあの騒ぎで見舞ひに来さつしやつたよね。」

「いゝえ、」と多賀子は怪訝さうに婆さんの顔を見遣つて、「今日の騒ぎつて、何かあつたんですか。」

「あれ、知らずに来さつしやつたよかね。お前さん、此方らの旦那様鐵砲に撃たれてね、甚い怪我で、鎌倉の病院へ戸板で擔がれて行かつしやつたよ。お嬢様も一緒に附添つて行かつしやるしね、家が空虚になるもんだんで、鶏の世話もあるし、私が留守を頼まれてね、今些つくら飯を食ひに行つて来ましたよ。」

「まあー」と云つたきり、彼女は暫く言も無かつたが、「お婆さん、何かそりや間違ひぢや無くて、現に私は今日お午からも會つたんですが。」と念を押した。

「それがお前さん、日の暮近くの事だよ。向ふの裏山で、東京から来た素人の鐵砲打に逸れ丸を浴びせられたよ。此節は慰み半分に素人がぼん／＼撃つもんだんで、險難でなりましねえ。」

「まあ、本當ですかー」

多賀子は現に晝間あゝして俊作に會つて、それから至半日も経たない今、再び来て見ると、そんな不慮の災難に遭つて、病院へ擔いで行かれたと云ふのである。餘りに意外で、何だか信ぜられないやうな事であるが、然し婆さんの話は嘘だとは思へない。彼女は直ぐ其足で病院へ廻る事に決めて、

此邊に俵はあるまいかと婆さんに聞いて見たが、彌張り大船か鎌倉まで出なくては無かつた。こんな事なら曩の俵を待たせて置くのだつたと、悔んで見ても追附かなかつた。鎌倉までは一本道で道に迷ふやうな氣遣ひも無し、途中にはぼつ／＼百姓家もあるので、夜路でも心配は無いと婆さんは云つた。けれど、多賀子には初めての路ではあるし、女一人では氣味悪くもあるので、婆さんの俵に鎌倉の其の病院まで案内して貰ふ事にした。空は能く晴れた星月夜になつて、天の川が鮮かに流れた。

別莊

罪の人

其日縁子は、鎌倉の別莊へ行つて留守だと云つた染井の言は、嘘では無かつた。陸に居ては獵より外に楽しみは無いと云つてゐる兄の朔郎が、其の三四日前から鎌倉の方へ銃獵に行つてゐた。彼は誰でも目を着ける土地よりも、餘り人の氣の附かない方面を漁る意りで、鎌倉を中心に、別莊から日歸りの出来る返子や葉山や、山の内附近を目當にして出懸けたのであつた。縁子は其の翌日最う從姉の彌榮子に鎌倉行きを誘はれてゐたが、日和積の秋空が此日は朝から殊に麗かだつたので、彼女も急に其の氣になつて、二三日彌榮子と遊んで来る事に決めたのである。それで朝の中に、今日行くと云ふ電報を朔郎へ打つて置いたのであるが、出懸けるとなると女は支度や何彼と手間取つて、別莊へ着い



たのは午過ぎであった。

別荘の直ぐ横の小さな別棟に、子の無い漁師の夫婦者が別荘番に住まはせてある。其の日當りの好い軒先へ筵を敷いて、亭主の櫛杓か何かを綴くつてゐた女房は、俣で乗り着けた二人の令嬢を見ると、慌てて飛んで来た。

「これは、お揃ひで能うこそ。さあ何うぞ。先に些つとお知らせ下されますと、停車場まで親父をお迎ひに遣りましたに。」

「電報は来なかつて？」と彌榮子は訝かつた。

「へえ、参つて居りますよ。」

「ちや、兄様はお留守なの？」と縁子が聞いた。

「あゝ、あの電報は貴方様方で？ あれは丁度若旦那様がお出懸けの後へ参りましたですよ。」

「彌張り獵？」と彌榮子は微笑んだ。

「へえ。此方へ来らつしやつた日から、最う毎日で御座りますよ。」

「ちや、夕方には歸つて来らつしやるわね？」と縁子が質した。

「へえ、朝お出懸けがお早い代りに、毎も四時半か五時頃にはお歸りで御座りますよ。今日はお嬢様方がお見えになりましたで、乾度獵もどつさり御座りますよ。」

女房は柄にも無い愛相を云ひ、二人を案内した。車夫は大鞍を一つと、バスケットを二つ玄關へ運び込んだ。女房がそれを受取つてゐる間に、二人は奥へ通つて見ると、座敷の雨戸が一枚繰つてあるだけで、外は皆閉め切つたまゝである。朔郎は其の十疊の座敷を居間にしてゐると見えて、茶湯臺が真中へ持ち出してあつて、ウキスキーの空櫃や、読み半しの洋書や、それから灰皿に代用した茶碗などが載つてゐる。其の周りに取散らかつた新聞紙の上に、食麵麩の食ひ残しの籠が、バターの罐やナイフと一緒に轉がつてゐる。紙屑籠の中には、果物や落花生の皮が一杯に詰まつてゐる。そして茶湯臺の前に脱ぎつ放しになつた着物が、兵兒帯も巻き附けたまゝ、すぼつと體だけ抜けたやうに所座を巻いてゐる。

「まあー」

一目見ると、二人は呆れて入口に立つたまゝ、顔を見合せて笑つた。

「お出懸けになつたまま、未だ今日はお掃除をしなかつたもんです……お歸りになるまでに爲て置くべいと思ひまして……」と女房は獨りで云譯をしながら、こそ／＼片付け初めた。

「可いわよ。此處は後で奇麗に掃除するから、それよりも雨戸を悉かり開けて頂戴。」と彌榮子が云附けた。

「幾ら男だからつて、兄様も餘り管はなさ過ぎるわね。此のまゝ散かりやつて何うせう。」縁子は



罪 の 人

女房が雨戸を繰りに行つた後で、顔を盛めて云つた。「些とも掃除なんか爲ないのよ。此の埃は昨日や今日の埃ぢや無いわ。」

「どし／＼然う云つて掃除を爲せば可いのに。兄様は一體苦にしないのよ。家でも餘りお部屋が取散らかつてゐるから、見かねて掃除を爲ようとすると、却つて煩いなんて叱られるのですもの。」と彌榮子はつい不斷の不平が出た。

二人は着更と一緒に、エプロンだのタオルだのを靴から取出して、手早く身支度をする、女房に手傳はせて先づ座敷から片付け初めた。朔郎の脱ぎ棄てた着物を早干したり、押入に押控ねてあつた寝道具を日向へ出したりして、それから家中を手分けて拭き掃除した。そして何處も彼處も見違へるほど奇麗になつた所で、漸と清々した心持で、からりと開け放つた座敷に寛いで坐つた。そして東京から持つて來た菓子など出して、茶を淹れた。湯殿も夏時分に使つたまゝから／＼になつてゐたのを、今夜から立てさせる事にしたので、濱から歸つた亭主が、水を汲み込む音がざあ／＼と聞えて來る。

「お風呂は沸いてゐるし、其處らは奇麗に片附いてゐるし、歸つて見て兄様驚くでせう。」と縁子は満足さうに和こりした。

「何うして！ 兄様の事ですもの。私達が説明しなければ、掃除を爲たか爲ないか氣も付きやしない

わ。」と彌榮子も笑ひながら、「それとも勝手が違つて、反つて居心地が悪いつて仰しやるかも知れないわ。」

「豈か。」と縁子は食べ半しの菓子を懐紙へ包むと、些つと日脚を見て立上つた。「ぼつ／＼晩の支度に懸りませうよ。」

邸を出懸ける時、幾日も滞在するやうなら、誰か召使の者を一人連れて行つたらばと、夫人の勤めもあつたが、御飯焚きや下働きは別荘番の女房にして貰つて、餘は自分達でお稽古に遣つて見るからと、二人は斷つた。何から何まで召使任せにしてゐた擧句に、偶々かうして自分達で臺所事など遣つて見るのは珍しくもあり、一端主婦氣取りで二人が忠々しく動いた。彌榮子は女房を連れて魚肉や青物の買出しにも行く。縁子は亭主に水を汲んで貰つて米も浙いだ。そして二人の合議で恐しく細密に出來た献立表に依つて、水煮のやうな物や、鹽茹のやうな物や、砂糖和へのやうな物が出來て、其度び鹽梅を見合つては轉げるやうに笑つた。彼女達の若々しい樂しげな笑聲は、夕方近くまで然うして臺所の方で聞えてゐた。

電氣が點く頃には、悉かり膳立が出來た。茶湯臺の上に白い布巾を被けて、長火鉢には鐵瓶を滾らして、二人は朔郎の歸りを待つてゐた。次第に光を増した電氣が、氣持よく整頓した其の茶の間を明るく照らす頃には、外は暗くなつて、前濱の浪の音が高まつて聞えた。針金を渡した低い柵で取違ら

罪 の 人



した廣い屋敷の中は、奇麗な砂地の松林になつたが、其の松林を滑つて、其の柵の外れの些つとした門を出ると、最う其處は濱であつた。明るい茶の間に話も盡きてぼんやり坐つた二人が幾度びか、時計を見ては、朔郎の遅い歸りを待ち侘びる頃には、風も幾らか添つて、晝の中は苦にもならなかつた浪の音が、心の底から寂しさを揺すり上げるやうに鳴つた。

遅くも五時頃には歸るやうに女房の云つてゐた朔郎は、六時になつても、七時になつても歸つて来なかつた。

「何うしてこんなに遅いのでせう？」

「最うそれでも、歸つて来らつしやりさうなものね。」

二人は疾うに沸いた風呂にも入らず、腹の空いたのも我慢して待つてゐたが、そろ／＼不安になり出した。何うかした機みで、自分の銃で怪我でも爲たのではあるまいか。武器は不斷扱ひ慣れてゐるし、銃獵には永年愛身を鑿してゐる事であるから、滅多にそんな間違ひのあらうとは思へぬが、然し危険な飛び道具であるだけに、萬一と云ふ事も考へられないでは無かつた。

「豈か！ そんな事があるものですか。」と彌榮子は縁子の其の取越苦勞を口では打消したが、自分でも同じ事を思つてゐたらしく、つい溜息を洩らして、「だつて、ラツクも一緒なんですよ。間違ひがあれば、ラツクだけでも歸つて来さうなものぢやありませんか。」

「然うね。豈かそんな事も無いでせうね。それに今のやうな後装になつた鐵砲で自分が怪我をするつて事は無いさうですから。」と縁子も何時か兄に聞いた事を思ひ出して然うは云つたが、彌張り胸騒ぎがした。

八時が打つて間も無くであつた。二人が心配に心配を爲抜いてゐる所へ、漸う朔郎は歸つて来たのであつた。二人が飛び立つたやうに出迎へると、彼は眞蒼な顔をして、大きな獵装の體を玄關の土間にぼんやり突立つてゐた。

「ま、お歸りなさいまし。遅かつたわね、兄様。何んなに待つたか知れないわ。」と縁子は息を弾ませて云つた。

「本當にね。二人でそりや心配して待つてゐたのよ。餘りお遅いんですもの。」と彌榮子も怨みがましく云つた。

「お前達は来てゐたのか、然うか。」と朔郎は氣の無い顔をして二人を眺めたが、溜息を吐いてどたりと力無さうに小縁へ尻を下した。そして又太い溜息を吐いた。

「何うなすつたの？ 兄様。」

「まあ、變ね。」

「僕は大變な事を遣つて了つた。」と朔郎は出拔けに云つた。



人 の 罪

二人はぎよつとして目を見合せた。

「人を撃つたんだ。丸が逸れて人に中つたんだ。」と朔郎はがっかりしたやうに云つて、肩に掛けてゐた銃をそろ／＼外しながら、「是から警察へも些つと行かなくちやならん。病院へも今夜最う一度見舞ひに行かなくちや……」と云ひ懸けて、又ぼんやりと考へ込む。

「兄様、そりや本當なんですかー」縁子は顔色を變へたまま、餘りの事に口も利けないでゐたが、漸と顔へ聲で聞いた。「それで對手の人は、命にあの、別條は無いですか。」

「あゝ、縁、お前来てゐたんだね。」と朔郎は今氣が附いたやうに云つて、ちつと彼女の顔を見詰めたが、些つと頭を振つて、「さあ……醫者は左に右に右に大丈夫だらうと云ふんだ。だが、負傷の場處が場處だから何うかと思ふんだ。縁、己は今後最う誓つて銃獵は歇めるよー 然うだ、俺は斯うしちや居られん。お前も一緒に病院へ見舞ひに行つてくれ。向ふの人も妹さんが附きつきりなんだ。お前も何うか今晚だけでも看護をして貰ひたいな。己の爲めに飛んだ事で済まないが……まあ然し心配するな。命は大丈夫だと云ふから。所で……」とのつそり立上つたが、偶と氣が附いて丸帯を解いた。「それちや縁、お前も早く支度をしてくれ、彌榮子さん、水を一杯下さい。」

云ふことも何だか取留めが無く、彼は隨に度を失つてゐた。不斷が放膽な軍人肌であるだけに、それが縁子にも彌榮子にも烈しい恐怖を與へた。

人 の 命

海軍でも特に砲術科の中尉朔郎は、敵弾が頭の上で爆裂しても、自分の砲の照準を誤まらないほどの意志の鍛錬はあつた。それに秦博士の重厚な性質を受けて、生れ附物に動じない彼が、不斷の其の落着きも失つて了つて、何だか氣でも狂ひ懸けた人を見るやうであつた。妙にきよ／＼した様子と云ひ、しどろもどろの言と云ひ、一時的にもせよ頭の錯亂してゐる事は争はれないらしかつた。そして憎えたやうな其の目附や、惱ましげな其の顔附や、是までついぞ彼の然ういふ氣味悪い目や顔を見た事の無い縁子も彌榮子も、唯恐怖と不安とに胸ばかりわく／＼させながら、玄關先に立ち重なつてゐた。

人 の 罪

「兄様、何うか氣を鎮めて、委しい譯を話して下さい。お冷水を上りたいと仰しやつたぢやありませんか。召上れな。」と縁子は漸う氣が附いて云ふと、それまで茶の間の明りで忘れてゐた玄關の電燈のスイッチを捻つた。

朔郎は自分で水をくれと云つて置きながら、彌榮子がそれをコップに注いで、龕から盆に載せて持つて來てゐるのに、けろりとして手を出さうとも爲ない。縁子に注意されるまでは、目の前に差出さ



れてゐても目に入らぬらしかつた。

「あ、然うか、水か。何うも有難う。」

彼は毎に無く丁寧に頭なぞ下げて、コップを受取ると、さも渴いてゐたやうに一息に飲み干した。そして濡れた口端を拭はうとして、未だ獵服のまゝのポケットを彼方此方と探つた。

「然うく、あの時繻帯に裂いて了つたのだ。」と朔郎は思ひ出したやうに獨言ちて、手で口端を小擦つた。

「兄様ハンケチなら、是を。」と縁子は縁縫のした女持ちの半麻のハンカチーフを出して、「卸したばかりで新しいのよ。」

「何有、最う可いんだよ。」と朔郎は手を振つたが、又思ひ返して、「いや、借りて置かう。馬鹿に匂ふな。」と受取つたハンカチーフを些つと嗅いで見て、其儘ズボンのポケットへ挿ち込んだ。

「お冷水は最う宜しいのですか。最う一杯如何？」と彌榮子が聞いた。

「最う澤山。僕はそんなに渴いちゃ居ないのだよ。」と云つて、朔郎は何故か和やりと笑ひ懸けたが、其の笑ひ皺が急に硬張つたやうに引攣れると、今まで腰掛けてゐた小縁から不意に土間へ立つて、「縁は、ちや僕と一緒に病院へ行つてくれるんだね。」と念を押した。

「え、参りますわ。兄様が行けと仰しやるなら、私何處へだつて参りますわ。」

「有難う。」と彼は小兒が頷くやうにこくりと一つ首を頷かせて、ちつと縁子の顔を見詰めたが、兄さんの爲めに、お前にまで迷惑を懸けて濟まないな。お前は小さい時から己の云ふ事を能く肯いてくれた。お前のやうな兄思ひの妹を持つて、己は實際嬉しいよ。」

「あら、兄様は何を改まつて仰しやるの。厭ですわね。」と縁子は根くなつて、彌榮子の方をちらりと憚るやうに偷み見た。「私ばかりちや無いことよ。彌榮子さんだつて、兄様の事は親身に思つて居らつしやるわ。」

「そりや分つてゐるさ。だから己は、お前達に本當に感謝してゐるのだよ。」と云つて、朔郎は又彌榮子の顔をちつと見入つた。

けれど、其目は唯目の前の物を見てゐるだけで、心は始終或一つの想念に苛まれてゐるらしく、然うして二人を眺めてゐる間も、彼の蒼褪めた顔は苦しい惱ましげな表情で落着き無く變つた。そして飛んでも無い時に和やりと取つて附けたやうに笑つたり、急にむつりと生真面目になつたりする。其通りに云ふ事も取留めが無く、話がふいふと傍道へ逸れる。それは烈しい精神の打撃の爲めに、意識にも思想にも連絡と統一を失つて、唯或種の精神病者に見るやうに、一つの脅迫觀念が固着的に彼を苦しめてゐるらしかつた。で、獵の出先で誤つて人を撃つたと云ふのも、果して實際に撃つたのか何うか、縁子も彌榮子も半信半疑であつた。



「兄様、貴方は本當に今晚何うかして居らつしやるわ。」と縁子はおづ／＼しながら、彌榮子の方を見て「何だか心配だわね。」と小聲で云つた。

「己が何うかして居るつて？」と朔郎は怪訝さうに其の太い眉を顰めたが、旋てぶる／＼と體を顫はせると、どたりと又小縁へ腰を落した。「そりや何うかしてゐるとも！ 己は今日くらゐ恐ろしい思ひをした事は無いんだから。己が如何に軍人だからつて、戦争以外に、敵でも無い人間を自分の筒先に懸けて、平氣で居られるか居られないか考へて見てくれ。對手の命に若しもの事があつたら、己は何うすれば可いのだ。無論法の制裁は受ける。けれど、軍法會議が縦んば己を銃殺に處したからつて、それで己の爲めに殺された命が償へるものではないのだから。軍人は人を殺す職業だと一口に云ふが、其代り自分も何時死ぬか分らない體だ。我々は君國の爲めに寸時も死と云ふことは忘れないと同時に、人間の命と云ふものに嚴肅な理解を持つてゐる。人を活かす醫者は人の命を危末にするが、人を殺す軍人は人の命を尊敬するものだ。己は不斷然う思ふんだ。一人の人間が此世に生れて來るまでには、同じやうな未生の命が何れだけあつたか知れない。我々の目にこそ見えないが、此の宇宙には生れようとする意志で充滿してゐる。其の中から擇まれたる命のみが此世の人間となつて生きるのだ。からして、我々が人間として生きたいと云ふ切ない願望は、此世に生れない先からの宇宙的意志なのだ。其の人間の命を、同じ人間の手に滅すと云ふ事は、人類に對する罪ばかりぢや無い、宇宙の

大意志を暴殄するものだ。設ひそれが故意で無くつても、過失であつても、滅ぼされた命に變りは無からな。いや、過失とは何だ！ 假にも武を以て國家から許されたる軍人が、武器を誤つて人を殺す！ 然も其の過失が、罪も無い生物を殺して娛樂とする、其の無道の娛樂から起つたのぢや無いか。敢て國家の爲め、軍職の爲めで無くつても、單に自己の爲めであつても、怒りとか、怨みとか、憎しみとかで人を殺したのなら未だしも意義がある。娛樂の過失で人間の尊い命を奪つたとあつては、奪はれた命も餘りの無意義に隕する事が出來ないだらう。己も出來ない！」と彼は兩手で三分刈の頭を搔撈るやうにして呻いたが、其の手で額を抑へて、「然し、未だ命を奪つたとは決まらないのだ。助かるかも知れん。然うだ。何うかあの人の命が助かつてくれるやうに！」と祈るやうな敬虔な調子で云つて、屹と肩を引結ぶと、暫く不動の姿勢を取つた。

「兄様、何うぞ氣を鎮めて下さいな。そして初めから筋道を立て、話して下さいな。」と縁子は一生懸命に兄の顔を見詰めながら宥めるやうに云つた。

朔郎は興奮こそしてゐるが、其の云ふ事は少しも間違つてはゐない。そして感傷的であると共に精神的でもあつたが、最う長いこと彼が軍人風の粗放な一面のみ見慣れて來た縁子に取つては、それが又異様に感じられた。何方らかと云ふと、不斷餘り口數を利かない質の彼が、急に能辯になつたのも不思議に思へる。それは魂の激動から溢れ出た人間の本然の聲である事には氣付かずに、反つて病



罪の人

的の發揚でもあるやうに氣味悪くさへ思つたのである。

「醫者は何有、致命傷では無いと云つてゐるんだよ。」と朔郎はさも其事を聞かれでもしたやうに緑子の方を見向いて、満足さうに和やりとしたと思ふと、突然かつとなつて、「だが、醫者の云ふ事なんか當になるものか。えー！何うとも成れ。成るやうにしか成らないんだ。助かるも助からないも天命だ。なあ縁、然うちや無いか。」と自暴らしく云つた。

「兄様、最つと筋道を立て、話して下さい。何うして人を撃つたのですか。本當に撃つたのですか。若し本當なら、私達にも得心が行くやうに委しく話して下さい。兄様のやうに獨りで承知して居らしては、何を仰しやるのか譯が分らなくて、私だつて彌榮子さんだつて狼狽へるばかりぢやありませんか。」と縁子はおろ／＼した聲で、目に涙さへ滲ませた。

「然うか、己は未だ委しい話を爲なかつたかな。あゝ、己は今何の慾も無い。唯一つ、あの人が助かつてくれるやうにと、そればかり祈つてゐるのだ。」

朔郎の答へは彌張り自分の心の惱ましい線言になつたが、今度は自分でも氣が付いたやうに急にふつりと言を切つて、両手で頭を抱へて黙り込んで了つた。其間彼は混亂した想念を纏めようとして骨を折つてゐるのが、目を瞑つて俯いた横顔の苦澁な表情でも察しられたが、旋て両手を放して頭を擡げると、初めて今日の出來事をぼつり／＼話し出したのであつた。何うかすると記憶が後前になつた

り、連絡が絶えたりするのを、思ひ出し思ひ出して語り續けた。縁子も彌榮子も各々の心で、それを順序立てつゝ聞いた。

朔郎は今朝から山の内方面を根氣よく狩り歩いたが、午過ぎまで懸つて鴨を一羽落したきりなので、少し躁り氣味にもなつてゐた。それは小坂村の街道から少し入つた柴山の裏で、思懸け無く山鳥を見付けて、狙ひも碌に決めずに一發打發すと、丸は逸れて、運悪く其處の小蔭に居合はした人を撃つたのである。初めは然うとも氣付かなかつた彼は、儲に手應へもあつたし、獲物を捜しに駆け出したラツクの後を追つていそ／＼行くと、不意にセントパアアド種の見事な犬が目の前に現はれた。と同時に、其處の窪地の枯草の上に突伏してゐる一人の青年を見附けた。左の頸筋から血が吹いてゐる。無論今の丸が逸れて當つたのだ。朔郎は仰天しながらも、取敢へず自分のハンケチや其の青年の締めてゐた兵兒帯で假繃帯をしてから、負傷者を負ぶつて山を出た。そして負傷者の飼犬の其のセントパアアアド種に案内されて、然ほど遠くない彼の家まで直きに届ける事が出来た。

其の青年は妹らしい娘と唯二人暮しであつた。思懸け無い災難に、妹は一目見ると泣き出してしまつたが、氣丈な青年は自分の苦痛を云はずに反つてそれを宥めた。そして朔郎が宇中駈け廻つて、負傷者を鎌倉の病院まで戸板で運ぶやうに、百姓達を頼んで來てからも、彼は多量の出血に刻々と弱つて行く中で、かういふ意味の事を云つた。

罪の人



「貴方は何人だか僕は知らない。然し僕が偶然あの場所に居て、無論僕を撃つ氣も無い貴方の丸に當つたと云ふのは、それだけの運命である。此の無限大の空間を一發の丸が飛ぶのだ。其の一點に過ぎない彈道に體を置いてゐたと云ふのは、撃たれるべき僕の運命だつたと見なければ、何う是を見よう。僕はそれで無くて生きてゐたくない人間なのだ。自分の手で自分の命を絶つと云ふ事は、人道に許されない事であるが、今偶然貴方の丸に當つて、其爲めに若し一命を失ふやうな事になれば、それは僕の死が許されたのである。神が貴方に依つて僕の命を召すのである。貴方の過失は、僕に取つて責むべき何等の權利も有たない。此のまゝ僕が助からうと助かるまいと、貴方は其爲めに毫も責任を感じないでくれ。僕は氣の儘な中に、貴方の罪で無い事を證明して置きたい。病院よりも醫者よりも、早く警官を呼んでくれ。」

其時の負傷者は可なり興奮状態に陥つてゐる事は分つてゐても、其の不思議な言を朔郎は無意味に聞き流す事は出来なかつた。然し烈しい傷の痛みと、出血過多の爲めとで、青年は直き興奮の後の疲勞と一緒に失神した。そして戸板に載せられて、鎌倉の病院へ擔ぎ込まれるまで正氣に歸らなかつた。最う足許も暗くなつた夕暮の田舎道を、提燈の光を頼りに、其の青年の妹と二人で、戸板の後からとぼくと附いて行く朔郎の心持は無かつた。助かるか助からないか分らない負傷者の其の下手人の彼は、病院まで一里近くの道を、丁度刑の宣告無しに刑場へ引立てられる重罪人のやうな氣持で歩いてゐた。醫者が負傷者の破れた肉の中から散彈を抜き取つたり、傷口を洗つたり、縫つたり、繃帯をしたり、補血の食鹽水を注射したりして、漸う病室の寢臺の上に横はらせるまでの其の一時間餘りの間、其場に附添つてゐた朔郎の心持は、軍人としての鍛錬や修養ぐらゐでは、何うする事も出来ない至我の恐怖と、不安との連続であつた。

「其の一時間ばかりと云ふもの、實際己は命が縮まるやうな思ひだつた。」と彼は深い溜息を吐いて、「丸は左の肩へ四つ入つてゐた。其の中の一つだけが骨に懸つただけで、餘は皆急所を外れてゐるから、命には別條無いと醫者は云ふのだ。所が、傷の方は大丈夫だが、出血が甚かつたんで、虚脱に陥らねば可いがと云ふのだ。それぢや些とも大丈夫ぢや無いぢやないか。あゝ、何うぞしてそんな事になつてくれねば可いが……己は今あの負傷者の命を取留める爲めなら、如何なる犠牲も敢て辭さない」と誓ふやうに云つた。

聞いてゐた二人も、それで漸う一部始終が會得された。朔郎は彼女等が心配したやうな病的の精神状態に陥つてゐるのでは、決して無かつた。彼は自分の爲出来した過失の罪に責められて、自分の心身を全く其の苛責に任かせてゐるのだ。彼が責任感の強い人格者であるが爲めに、其の烈しい心の苦悶の現れが、縁子や彌榮子には常識を逸したやうにも見られたのである。然し一部始終を彼の切實な口から話されて見ると、二人もちつとしては居られないやうな氣がした。朔郎の爲めにも、其の負傷



罪の人

者の爲めにも。

「己は何だか體も頭もふらくして居る。」と朔郎は蟬谷を握り拳でこつ／＼叩きながら、偶と腕時計を見て、「丁度前後で四時間ばかりのものが、其の四時間の間に、全で己は四十年の月日が消し飛んで了つたやうな気がするよ。あゝ然う、こんな優長に話し込んでる場合ぢや無いのだ。一體己は何うして歸つて來たんだらう？ 負傷者を病室の寢臺へ運んだまでは覚えてゐるが……あれから何でもふらくと病院を出て來たんだな。後にはあの妹一人だが、今頃は何んな思ひをして附添つてゐるか！ 手術後の経過は？ あゝ、斯うしてゐる空は無い、早く行つて見なければ。だが、歸つて來て可かつたんだ、お前達が來てゐてくれたんで。縁、お前早く支度をしてくれ。お前でも一緒に病院へ行つてくれれば、幾らかあの人達にも義理が立つからな。」と漸う足拵へを解いて玄關へ上つた。「お、悉かり忘れてゐた。ラツクに何か食はせてやつてくれ。」

朔郎と一緒に歸つたまゝ、誰も管ひ手が無いので、何時の間にか其所らに居なくなつた飼犬のラツクを、彌榮子は玄關の軒先へ出て呼んだ。外は暗かつた。

闇の路

一切の事實が明瞭にされた。朔郎は誤つて人を撃つて、其の撃たれた對手は、今生死不定の間に置かれてあるのだ。縁子は左も右くも兄と一緒に其の病院へ行つて見る事にした。彌榮子も一緒に云つたが、縁子は留めた。

「私、行つて見た様子で、今夜すつと病院の方に附きつきりに居るかも知れませんが、若し然うなると、明日貴方に代つて頂かなければなりませんから。」

「然うだ。明日の事もあるから、一人は今夜家で寝んで置いた方が可い。」と朔郎も云つた。

で、彌榮子は一人留守居をする事になつた。朔郎も縁子も病院で夜を明すやうになると、彼女一人では留守が寂しいので、別荘番の女房に泊つて貰ふ事にした。

「兄様、何うしたものでせう？ 邸へ此事を知らせたものでせうか。それともお知らせしない方が可いでせうか。」と縁子は相談し懸けた。

「さあ、何うしたものでらう？」と朔郎も迷つた。「皆に餘計な心配を懸けても悪いし、と云つて、知らせず置いて萬一の事でもあると……」

「ぢや、左に右く今夜の様子を見た上で、お知らせするのは明日になすつたら何う？」と彌榮子が云つた。

「然うね。」と縁子は頷いて、「今夜手紙を出した所で、彌張り明日で無きや着かないわね。」

罪の人



「ぢや、明日の事にしよう。今夜の様子を見た上で、明日手紙を出すか、それとも誰か一人歸つて直かにお話するか、何方かに爲よう。」と朔郎は決めた。

此頃の日和癖で、宵の中は明るいほど能く晴れてゐた星空が、何時の間にか曇つたと見えて、さつと雨戸に吹掛ける小雨の音がして、庭の松が微寒さうに鳴つた。長谷の観音に近い秦家の別荘から、材木座も小坪寄りの其の病院までは、女の足には些つと路法があるので、朔郎は俵を呼びに遣らせた。使ひに行つた別荘番の亭主は、間もなく二臺の俵を連れて来て、門の中へ挽き込ませた。幌や雨傘を打つ雨の音が急に騒々しく聞えて、ラックが吠えた。

「前桐油を被けなきやなんめえかな？」

「何有に。雲切れしてゐるだから、直き露るべしよ。」

「山瀬時雨に苦干せつてな。今に星が降るだよ。おい其方の雨垂が被るべし、最つと挽き込んでくるよ。こらラック、貴様邪魔だわ。」と亭主の聲で、「へえ、お供が参りました。」

彌菜子と縁子とが楽しい晚餐を豫期して、晝の中から大騒ぎをして支度をした茶湯臺の上の數々の食べ物も、ろくろく味はつてゐる暇も無く、朔郎も縁子もそころくに飯を掻込んで立つた。無論湯になぞ入るところでは無く、朔郎は晝間血の附いたシャツの上へ、其のまゝ氣附かずに和服を引被けてゐた。

二人が俵に乗ると、ラックは雨に濡れた尻尾を振りながら門際まで附いて来たが、幾度も彌菜子に呼ばれて漸と引返した。二臺の俵は雨で濡り懸けた眞暗な路を、印灯の明りを頼りにびちやくと駆けた。

俵が病院へ着いた時分には、時雨は最う通つて了つて、西の方から星がちらちら覗き出した。雨雲を吹き剥がす冷たい風がさつと渡る度びに、玄關前に植はつた五六本の松が一度に身振ひしては、ぱらりと大粒の雫を落した。病院は西北に小高い丘を背負つて、南に展けた海を前に臨んで、總ての設備が呼吸器病患者を收容するやうに建てられた。そして院長も内科専門であつたが、副院長が外科の方も扱ふ所から、そして外科の専門醫も此の附近には無い所から、負傷者は取敢へず此所へ擔ぎ込まれたのであつた。

清潔な、冷たい感じのする、そして隅から隅まで消毒薬の匂ひの沁み込んでゐる長い廊下や渡縁を、可なり奥深く入つて行つて、六十三號といふ塗札の掛つてゐる病室の前で、朔郎は立留まつた。そして縁子に囁いた。

「此の室だよ。」

縁子は黙つて頷いた。

朔郎はドアの外に佇んで、ちつと中の氣勢を窺つてゐた。部屋の内はひっそりとして、人聲も物音



も聞えない。

「緑、お前ノツクしてくれ。」と彼は手と手を揉み合はせながら後ろへ退いた。

で、緑子が指でこつくとドアを鳴らすと、中から沈んだ女の聲で直ぐ返事があつた。緑子は音のしないやうにノツプを捻つて静にドアを開けると、朔郎は其の大きな體を窄めるやうにしながら、妹の後から入つてそつと閉めた。病室は壁も天井も眞白に塗つた八畳敷ぐらゐの板敷で、それに疊を敷いた長四疊の附添室が附いてゐる。病室の眞中に眞白なベッドに、朔郎が負傷をさせた其の青年が白毛布に掩はれて、白い大きな枕に顔を埋めるやうに爲ながら、身動きもせず横はつてゐる。負傷をした左の肩を上、右を下に、入口の方を脊中にして向ふ向きに臥てゐるので、二人の入つた附添室からは、僅に圓刈の頭と、左の耳とが枕から食み出して見えるだけであつた。寢臺の横には椅子が二脚据ゑてあつて、其の枕元に近い一脚の方に、品の好い大人しさうな娘が影も薄いやうにしよんぼりと腰掛けて、後れ毛の零れ被つた蒼褪めた顔を此方へ振向けてゐたが、其の切れの長い清しい目が悲しさに二人を見迎へた。そして何か云はうとして唇を動かすと、急に胸が迫つたやうに聲を呑んで俯いて了つた。それは江間俊作の妹の静野である。

緑子は最初静野を見た瞬間、何だか見た事のあるやうな気がしたが、それよりも彼女の其目や、其唇や、其顔、其姿までが、見るに堪へられないほど慄ましい不安に脅かされてゐる事を表情した。

緑子は自分の目を掩ひたいやうな気がした。胸がわくわく爲出して、烈しい心臓の鼓動が、ひつそりした室内へ聞えは爲ないかと、自分で氣遣はれるほどであつた。それまでは唯負傷者の容體ばかり心配でならなかつた彼女も、今静野の其の慄ましい表情を見せられた時、初めて朔郎の爲出来した過失の全意義を痛切に感じさせられたのであつた。で、此のまゝ若し負傷者が助からなかつたら、朔郎に撃たれた其の負傷の爲めに死ぬやうな事があつたら、此の娘は一體何うなるだらう？ 朔郎の話では、兄と妹と唯二人暮しのやうに聞いたが、其の兄に若しもの事でもあつたら、後に残つた此の年若い妹の身は何うなるだらう？ 朔郎の過失が、終に一人一人の命を失ふとすれば、其の責はそれだけに止まらないで、延いて此の可憐な女性の運命にまでも累ひしは爲ないか。緑子は然う考へた時、朔郎のあの氣違ひ染みた恐怖も苦悶も、決して無理では無い事が初めて呑込めたのである。

「若しそんな事があれば、私達は責任を以て此人を保護しなければならぬ。それには何うしても女は女同士だから、此人が私の兄の爲めに兄さんを失つた其の代りを、私が姉妹ともなつて慰めて上げなければならぬ。」と緑子は心から然う思つたが、「いえ、それよりも何うか、そんな事にならずに助かつて貰ひたい。兄の過ちが何うか過ちだけで済みますやうに、氣毒なお妹さんに此上の歎きを見せないで済みますやうに、何うかあの人を全治させて上げて下さいますやうに！」と心で祈つて、今まで娘の方ばかり引かれてゐた目を、ちつと寢臺の方へ移した。



緑子は負傷した其の人の爲めに氣毒な其の妹の爲めに、そして兄の爲めにも、又自分の爲めにも實際其場に跪ぎたいやうな謙虚な心を以て祈つたのである。

其の面影

眞白な毛布に裹まつた患者は、眞白な寢臺の上に死んだやうになつて身動きもしない。そして餘の三人も、電燈の光の煌々とした中に凍つたやうになつて、誰一人口を切る者も無い。何から何まで眞白盡めの病室は佗しいほど明るく、しんとした。南向きの窓の下が直ぐ濱になつてゐるらしく、浪の音が暗い外から光を慕つて、明るい此部屋へばかり押寄せるやうに聞える。そして一浪毎に窓近く高まつて来るやうに聞える。

「何うですか。」と漸う朔郎が最初の口を切つた。彼は次の間から寢臺の方へ伸び上るやうにしながら、低い掠れた聲で、「別に變つた徴候も寄来しませんか。」

「は、別に。つい今し方も、副院長さんが見に来らして下さいましたのですが、別に變つた徴候も無いさうで御座います。」

然う答へた静野は、漸と平靜を保つ事が出来て、音を爲せないやうに靜に椅子から立上つた。そして

て壁際に寄せてあつた椅子を持つて来て、寢臺から少し離して、最う一脚のと並べて、朔郎と緑子とに薦めた。

「あれからずつと昏睡してお居で？」と朔郎は彌張り次の間から其の上半身を覗かせるやうにして、心配さうに聞いた。

「は、ずつととうとう眠つてゐます。それに大分熱が出て参りまして……」

「え、熱がー」と思はず地聲を出して胸を反らした。

静野は其聲にはつとして寢臺の方を振り返つたが、急いで云ひ足した。

「いえ、熱は何うしても出ますさうで。出たから悪いとは決まりませんさうで。」

「然うですか。」

「兄様。」と緑子は兄の袖を引張つて、「靜に爲さらないと、御病人に障ると可けませんわ。」と小聲で注意した。

「あ、然うか。つい浮かりして了つて……御免を。」と朔郎は日に焼けた赭黒い顔を眞赤にして、小兒のやうに不器用に頭を下げたが、其の次手に緑子を引會はせた。「是は妹ですか、今日丁度僕の不在中に別荘の方へ来てゐましたから、お詫びやら、お見舞ひやら、看護のお手傳ひやらに連れて來ましたのです。」



そして彼は袂からハンケチを掴み出して、汗ばんだ額を拭つた。それは別荘へ歸つた時縁子から借りて、其のまゝ持つてゐた女持ちのハンカチーフで、嬌かしい香水の匂ひがぶん／＼するので、慌てて又袂へ捻ぢ込んだ。

「お初にお目に懸ります。」と縁子は一步進み出て静野に會釋をした。「此度びは又飛んだ事を兄が爲出來まして、本當に最う、何とお詫びを申して可いか……(頭を深く垂れて、)お詫びを爲たからつて、それで赦して頂けるやうな事がらとは、事がらが違ひますから、本當に最うお詫びの申上げやうが御座いませんで……」

「いえ、そんなに仰しやつて頂いては、反つて私の方で痛み入ります。何うぞ最う……何うぞ最う……」と静野は對手の其の心から詫び入つて頭も擧げ得ないでゐるのを、頼むやうに云つて強つて擧げさせて、「何事も其時の運なのですから、運悪く然ういふ災難に運り合はせたのですから、自分の不運を人様の所爲にしてつては濟みません。餘り何うぞ御心配下さらしないで。當人も何誰の所爲とも思つてゐませんから。それは阿兄様もお聞きなすつて御存じですから、貴方も何うぞそんなにお氣をお遣ひなさらしないで。」

それは義理一遍の挨拶では決して無かつた。自分の爲出來した過失の責に、殆ど度を失ふまでに苦しんでゐる朔郎の氣毒な様子や、兄の爲出來した罪を自分も一緒に着て、同じ責に苦しんでゐる縁子の心持に對して、静野が深い思遣りを持つてゐる事は、其の眞實の籠つた聲だけを聞いても疑へなかつた。自分達の事で然うまで心を苦しめてゐる二人を、何う云つて慰めたら可いかと、彼女は當惑してゐるやうな風さへ見えた。

「何てまあ、心根の冷らしいんだらう！」と縁子は心の中で感嘆した。美しい情操を持つた處女が、人の美しい情操に對する特種な感受性の鋭敏から、彼女は静野の優しい心持を直ぐ諒解したのであつた。

「僕は心苦しいです。」と朔郎は眞面に静野の顔を見る事すら出來ないで、外方へ向けて吃り／＼云つた。「貴方にそんなに寛大に仰しやられると、僕は益々心苦しいです。僕は飽くまで責めて頂きたいので……口が不調法で思ふ十分一も口へ出して、お詫びが出來ないので……貴方に責めてでも頂かなかつたら、僕は平氣で黙つてゐるとお思ひになるでせう。」

「いえ、決してそんな……貴方々のお心持は、私には能う分つてゐますで御座います。そんなに御心配して頂いては却つてお氣毒で、私何うして可いか本當に困つて了ひます。」

静野は實際困つた顔をして、其切れの長い利口さうな目をせか／＼瞬きしながら、朔郎から縁子と忙しく見比べる。と、獨りでにぼつと赧くなつて俛れた。然うした繕はない表情の中に、彼女の取亂さない悲しみと、親しみと、そして慎ましやかな矜持とが無意識に現れた。そして寂しい其の憂ひ顔



が不意に人格的美しさと、處女らしい魅力とで人を引付ける。

其の目と、其の顔と、其の表情とにちつと心を引付けられてゐた縁子は、思はず心の中で叫んだ。

「江間さんそつくりー」

然うだ。然う氣が附いて、彼女の胸は烈しく躍り出した。一目見た最初から、何だか見た事のあるやうな顔だとは思ひながらも、何時何處で何うして見たのか、其所までは思ひ出せなかつた。電車とか、劇場とか、音楽會とか云ふやうな人込みの中で、偶然席隣りにでもなつて見覚えがあるのか。それとも自分の知合ひの誰かに似てゐるので、それで直かに見覚えのあるやうに思へるのか。それならば自分の知合ひの誰かに似てゐるのか、縁子は丁度それを考へてゐた目先へ見せられた今の其の表情は、不思議に俊作そつくりだつたのである。忘れもしない此の春、邸の裏庭の亭の傍で、其の麗かな春光を浴びながら、俊作と二人で初めて親しく語り合つた。俊作も毎に無く口が解けて、郷里の父の事や、妹の事や、飼犬の事まで話してくれた時に、丁度此の娘の今の表情と同じやうな表情を見せた。殊に其の目の表情がそつくりであつた。縁子は何ういふものか、其時の俊作の其の目の表情が特に忘れなかつた。そして直ぐ其の翌晩、思懸け無い悲しい別れをしてから此方、行方知れずになつたまま、然も日を経れば経るほど忘れる事の出来ない懐かしい俊作の面影を、今縁子は其の娘の表情の中にまぎ／＼と見せられたのである。

然う氣が附いて見れば見るほど、娘の面容が俊作に似て来る。其の切れの長いかつきりとした目も、中高の面長なおつとりとした顔も、俊作の其目、其顔と瓜二つである。若し此の娘が男であつたら、縁子も一目に俊作の同胞だと思つたらう。男と女との違ひが、それほど似てゐる面容を直ぐには氣附かせなかつたのである。

「本當に目元なんか江間さんそつくりだわ。希代ねえ。」と縁子は心に驚きながら、「それが何うして爰から思ひ出せなかつたのだらう。外の人なら左に右く、江間さんに似てゐるのが直ぐ氣が附かないなんて、私の目は餘程何うかして居たんだけわ。あゝ何うかしてると云へば、曩から私ぼんやりしてゐた！ 若しや……」

さつと顔色が變つた。彼女は急に足の下の大が揺れ出したやうな氣がして、目が眩みさうになつたが、一生懸命に寢臺の上を見た。縁子の位置からは、何う躁つても患者の顔形を確める事は出来なかつた。寢臺の向ふへ廻つて見るか、で無ければ切めて其の枕元に引掛けてある病床、日誌の名前でも見たいと思つてゐる所へ、しんとした廊下の向ふから忙しない上草履の音がぱた／＼と聞えて來た。そして段々此の部屋へ近づいて來ると思ふと、案の如く入口の前ではつたり留まつて、外からがちやりとノツブを捻つた。そして病室だからと云ふそんな心遣ひなど知らないかのやうに、騒々しい音をさせて入つて來た者がある。



「鎌倉だなんて云つても全ら田舎ね。パンや鐘詰ぐらゐの日用品が近所で調はないなんて、不便極まるちや無いの。私到頭雨の中をステーション前まで行つちやつた。」  
能く響く聲で邊り管はず喋りながら、風呂敷包や新聞紙包を両手で持ち込んだ其の女は、後のドアを眩でばたりと閉めたが、客の在るのに初めて気が附くと、有繋に面食つたやうに大きな目をくるくるとさせて其處に突立つた。それは静野の姉の多賀子であつた。

暢 氣 者

多賀子が小坂村で頼んだ百姓の俵に案内して貰つて、宵に病院へ遣つて來たのは、丁度俊作の手術が済んで、朔郎が先づ別荘へ歸つて行つたのと、殆ど入り違ひであつた。彌喧しい俊作は昏睡状態であつたし、内氣な静野が一人で途方に晦れてゐたのを幸ひ、彼女も云譯一つする面倒も無くて、其のままする／＼と居坐つて了つたのであつた。

「本當に飛んだ災難だつたわね。だけど、話の様子ぢや對手が正直さうだから、未だしも此方の仕合せよ。これが兄様を怪我さしたまゝ逃げられつちまつたら、それこそ怪我の爲損だけれど。」多賀子は静野から委しい顛末を聞いた時、然う云つた。「それならまあ心配する事は無いわ。それに怪我の方だ

つて、お醫者が然う云ふのなら大丈夫だわ。兄様だつて血氣盛りの體ぢや無いの。血が少々餘計に出たからつて、それくらゐの事で參つて耐るものかね。」

「でもね、姉様、何時までもこんな風だと心配ですわ。此のまゝずつと正氣が附かないで了ふやうな事があつたら……」と云ひ懸けて、静野は恐ろしさうに身を顛はせた。

「厭あねえ。正氣が附かないで了へば、死んで了ふんぢや無いの。縁起でも無い！ 靜ちゃんのやうにそんな悪い方ばかり考へるから、爲ないでも可い心配までするのよ。私は悲觀しないわ。だから、案外暢氣でゐられるわ。」

「本當にね。」と力を入れて、「姉様は、私にも然う見えるわ。」と云ふと、彼女は唇を噛んで俯いて了つた。

「だつて、脈一つ取れない素人の我々が、幾ら傍でやきもき思つたつて爲方が無いぢや無いの。何も兄様が何うなつても可いつていふので云ふんぢや無いけれど、それとは又別なんだけれど、人間の事つて云ふものは、何うやきもき爲たつて、彌張り成るやうにしか成らないものだわ。私今日つく／＼然う思つてよ。現に靜ちゃん達の居處だつて、捜す時には何うしても分らなくつて、今日何の氣無しにお冷水を貰ひに入ると、あゝして思懸け無く逢へたんぢや無いの。すると今度は、兄様に昔の事なぞ云立てられて、折角逢へても直ぐ追ひ出されたんでせう。お嬢様か先生に口を利いて頂かうと思つ



て、東京のお邸まで駈け着けて見ると、お嬢様は丁度私と行き違ひに鎌倉へ行らしつてお留守。先生は居らしつても、意地の悪い玄關番の書生と、新派の芝居にでも出て来さうなぎすくした奥さんで、何うしても私を會はせまいと爲るんだもの。本當に忌々しいつちやありやしない！」と多賀子は其時の事を思ひ出して、濃い男のやうな眉をびく／＼顫はしたが、其眉を些つと擧めて、「けれど、縦んば先生やお嬢様に来て頂いた所で、兄様がこんな始末ぢや爲方が無いぢや無いの。して見りや、故お邸へ駈け着けた此方が偏間で、玄關拂ひを食はしたのが利口だつたつて譯だわ。其通り人間の事つて云ふものは、何うすれば可んだか悪いんだか、其時になつて見ない事には、全ばり見當も何も附くものぢや無いのよ。だから、やきもき心配したり、取越苦勞を爲たりするだけ損だわよ。」

「それぢや、姉様は彌張り、其の先生とかのお邸へ行らしたんですの？」静野は姉の其のお喋りの濟むのを待つて聞いた。

「行くのは行つたけれど、私悉かり失望しちやつた。奥さんも奥さんなら、書生も書生。それに又先生も至ら家ぢや活地が無いんだもの。屹度ありや養子よ。私あんな家庭とは思はなかつた。本當に呆れ返つて歸つたのよ。」と多賀子は曖昧に云つて、直ぐ話を逸らした。「彌張り静ぢやんの云つた通り、兄様の脛に噛り附いても自分で謝る事だわ。然う思つて私も今度は肚を決めて引返して見ると、家は戸閉めになつて居るでせう。又これは逃げられたのぢやあるまいかと、胸がどきんとしたわ。其處へ丁

度留守居の婆さんが遣つて来て、兄様は鐵砲に中つて是々だと聞かされて、ぢや宇佐美村の時のやうに、行方を隠して引越したのでも無かつたから、それだけは安心したけれど、でも餘り思懸け無い災難で、私本當とは思はれなかつたわ。人間の事つて云ふものは、何時何うなるか全く分らないものだわね。だから私、成るやうにしか成らないと諦めてゐるのよ。幾ら心配したつて追着かないんだから、暢氣になつてゐる方が利口だと思ふの。だが静ぢやん、親は泣き寄りつてね、不斷は何うでも、こんな時には何と云つたつて親内の事よ。私、一週間でも十日でも附きつきりで介抱するわよ。それで好い工合に全快すれば、兄様だつて私の眞心を買つて下さるでせう。それでも豈か私を赦さないと仰しやらないでせう。私本當に一生懸命で介抱してよ。芝居の方なぞ一興行や二興行休んだつて管やしない。」

然う云つて獨りでべら／＼喋つてゐる間も、彼女は寢臺の枕許へ行つて俊作の顔を覗いたり、足許へ廻つて毛布を抑へたり、病床日誌を撥ぐつたり、薬燭を透かして見たり、些ともぢつとしては居なかつた。然うかと思ふと、窓のカーテンの端から暗い海を覗いて、冷たいガラス戸に額を押附けながらしく／＼鼻を吸つた。然しそれも直き歇んで、今度は鱈皮のオペラバツグから紙白粉なぞ取出して、小鼻や額口をせつせと撫すり廻した。

「静ぢやん、貴方お腹は空かないこと？」と彼女は其の脂染みた紙片を丸めて床へ棄てると云つた。



「いゝえ、些とも。」と静野は氣重さうに首を掉つた。

「だつて、晩御飯は未だなんぞでせう。」

「え、其所どころぢや無かつたのですもの。」

「ぢや、何か食べないと可けないわ。體に毒よ。」

「胸が一杯になつてゐて、何にも食べる氣がありませんの。」

「本當に毒よ。何かお上りよ。私お腹がぺこぺこになつちやつた。」と多賀子は小さな金時計を出して

見て、「ほう、最う八時半。お腹も空く筈だわ。今日早目にお午飯を食へたつきり、一日忙しい思ひを

して、お茶も一杯飲まないのなもの。病院でお美しい鰻井でも出来ないか知ら？」

「豈か姉様。それに時間が時間ですもの。」

「然うね、田舎の病院だから、そんな自由は利かないだらうね。」と彼女は暫く考へてゐた後で、「何う

せ外へ出たつて、口に合ふやうな食物も有りはしないだらうから、私食パンとジャミを仕込んで來

るわ。それなら静ぢやんも食べるでせう？ 最う少し時間が早ければ、今日の會場へ押懸けて行つ

て、お腹だけ拵へて來るんだけれど。」

で、多賀子はせかく出懸けて行つた。そして廊下の途中まで行つてから又引返して來て、そつと

ドアを開けると、寢臺の枕許の椅子に心配さうに俛れてゐる静野を、手招きして入口處で呼び出した。

「静ぢやん、貴方お小遣ひ持つてるでせう。」

「え。」

「少し貸して頂戴よ。私、東京と鎌倉の間を行つたり來たりしてゐる中に、財布を悉かり軽くしちや

つて心細いから。」

「姉様、是で間に合ひませうか。」と静野は帯の間から男持ちの紙入を取出すと、一圓札を一枚姉に渡

した。

「是だけ？」多賀子は其の一圓札を指の先で撮まんでひらくさせながら、「五圓は一枚無くつて。」

決まつた金で、一文でも無駄使ひの出來ないやうに、爲ないやうに、儉しく暮らす習慣を小さい時か

ら附けられて來た静野には、そして少しばかり残つてゐる公債の利子と、養鶏とぐらゐで、今日の些

やかな生計を立てゝゐる静野には、一圓の金でも疎かでは無かつた。五圓と云へば、兄弟二人が七日

も十日もの生活費である。けれど彼女は、姉の言に迷惑な顔もせず、素直に又五圓札を一枚抜き出し

て渡した。

「静ぢやん、心配しなかつたつて大丈夫よ、直き返すからね。是から最う私だつて、貴方達の困るのを

黙つて見てゐるやうな薄情な事は爲ないわよ。」

然う云つて多賀子は、前の一圓札も、後の五圓札も一緒に自分の紙入へ入れると、さつさとして行つて



明け行く空

10

了つた。そして小一時間も懸つて、食品ばかり一抱へも買つて歸つて来たのであつた。無勘定な浪費癖の彼女は、食パンとジャミだけでは無論納まらなかつた。町を歩いてゐる中に、彼れも是れも目に附く物が買ひたかつた。俊作が正氣に復つて、喉が渴いたとでも云つた時に剣かうと思つて、林檎も買つた、梨も買つた、ボンカンも買つた。それから夜通し寢ずに附添つてゐて、眠くなつたり、口寂しくなつた時の用意に、ボン／＼だの、焼栗だの、搔餅だのも買ひ込んだ。そして歸つて来た時には、彼女の紙入の中には銀貨と銅貨のばら錢を取混ぜて、最う幾らも残つては居なかつた。

### 明け行く空

買物から歸つて来た多賀子は、思懸け無い二人の客に些つと面食はされて、兩手に包を垂ら提げたまゝ入口に立備つた。が、ドアの音に振返つた縁子と顔を見合はせると、雙方とも餘りの意外に思はず驚きの聲を洩らした。

「まあ、お嬢様！」と多賀子は包みを其處へ押放り出すやうにして、つか／＼と縁子の傍へ寄ると、行きなり手を執つて揺すぶりながら、「まあ、こんな處でお嬢様にお目に懸らうなんて本當に思懸けませんでしたわ。私何だか狐にでも魅まれてゐるやうな氣がしますわ。何うしてお嬢様が此處に居らつ

しやるのでせう。全く不思議ですわね。でも、能く來らしつて下さいました。お見舞ひに來らしつて下さつたのでせう？ ですが、何うしてそれがお分りになつたのでせう？」と一息に云つた。

縁子は手を執られたまゝ呆氣に取られてゐると、多賀子は對手の口を開く間も與へずに續けた。

「お嬢様、私今日お邸へ伺つたので御座いますよ。けれど……何とか云ひましたわね……然う／＼、染井とか云つたあの蛞蝓見たやうな書生に玄關拂ひを食つて、其上御丁寧に門の外まで突き出されたんですの。それもまあ玄關番對手の事なんですから、何時まで氣に留めるがものは無いんですけれど、私、奥様が餘り分らなさ過ぎると思ひますわ。あら、御免なさい。奥様なら貴方の阿母様ですわね。面と向つて阿母様の悪口など云つたりして……私何うかして居ますのよ。餘り思懸け無くて頭が何だか混がらかつて了つて、自分でも何をお喋りしてゐるのか……あ、然う、肝心の御挨拶をする事も忘れて了つて。」と彼女は初めて氣が附くと、心持顔を赧めながら、馬鹿々々しく丁寧なお辭儀をして、「本當に其後暫くで御座いましたわね。お變りも無くて御結構で御座います。私も一度お伺ひしなけりや成らない成らないと存じながら、つい忙しいものでして、御無沙汰して了ひまして、申譯も御座いません。いえ、あの時のお世話様になつた事を考へますと、忙しいなんて云つてゐられる義理ではありませぬけれど、何うぞ悪からず。本當にあの時の御恩は、忘れようたつて忘られるものではありませぬわ。それは裕にも始中終云ひ聞かせてゐるくらゐですもの。それにあの時、貴方が私のやう

明け行く空

11



な者でもお友達だと仰しやつて、色々お優しくして下さつた事は、私、沁々忘れません。今日だつてお嬢様がお邸に居らしたつたら、私あんな目に遭はないだつて済んだのですに、間の悪い時と云ふものは爲よりの無いものですわね。」

獨りで喋り續けてゐる多賀子の其の表情澤山の顔に、縁子と朔郎と静野の驚いたやうな六つの目が、まじく注がれてゐた。中にも縁子は、曩から氣に懸つてゐた寢臺の上の負傷者が、彼女の言で一層氣に懸つて来て、折々其方らへ視線を振る其の目が、或る恐ろしい豫感に慄えてゐた。

「では、邸へ故々行らしたつて下さいましたの？ 済みません。」縁子は今日多賀子が邸へ行つた其の譯が能くは呑み込めぬながらも、唯然う云つて、「私もこんな處で貴方にお目に懸らうとは、全く思懸けません……ですが、貴方は……」と云ひ懸けて、ふつと又寢臺の方を見てぶるくと顫へた。

「姉様、貴方此のお方を御存じで居らつしやるの？」曩から意外さうに目を見張つてゐた静野が、横からそつと聞いた。

「知つてるところぢや無いわ。」と多賀子は妙に氣色ばんで妹を振返つた。「静ちゃん達が宇佐美に居なくなつた後へ、私が訪ねて行つた時に、生憎連れてゐた子共が病氣になる、お金は無し、途方に晦れて立往生をしてゐる所を、此方らのお嬢様と先生に救つて頂いたよ。全くあの時は地獄で佛だつたわ。ほら、静ちゃんにも晝間些つと何したぢや無いの。兄様が……ほら、ね。(舞臺で爲るやうな仰山

な目交ぜをして、)ね、兄様がそれはく、東京で御厄介になつた方なのよ。」

「まあ……」

静野は何だか不思議な連絡のありさうな其の間の關係が、未だ能く腑に落ちないので、唯意外さうに皆の顔を見比べてゐる。そして其の目は自然縁子の方と、寢臺の上の兄の方とへ多く振分けられた。縁子は最う瞭りと知つた、寢臺の上に死んだやうになつて、何にも知らないで横はつてゐる其の負傷者が誰であるかを。曩から若しやと思つてゐた通り、それは俊作に違無い事を今は疑ふ餘地も無かつた。彼女はきらく輝く目で、喰入るやうに多賀子の顔を見詰めてゐた。

「ぢや、私の兄が鐵砲で撃つたのは、あの寢臺の方は、貴方のお兄様ですの！ 私達の索してゐた、あの江間さんですの！」

「え、何ですつて！ ぢや兄を撃つたのは、お嬢様の阿兄様だつたんですか。」と多賀子も吃驚して叫んだ。「何時か伊東で伺つた、軍艦からお歸りなすつた。」

「僕が其の兄で……」と朔郎は初めて多賀子の正面へ其の大きな體を氣骨なく出して、「貴方は彌張りお妹さんで？ 何うも此度びは飛んでも無い過ちを爲出来まして、何とも皆さんにお詫びの爲やうもありません。僕は何のやうな責でも負ひます覺悟で……貴方々も何のやうになりとも僕を……」

「いゝえ、飛んでも無い。」と多賀子は忙しく隣きして、漸と氣を落着けると、「何うぞお頭をお擧げな



すつて、何も撃つお意りでお撃ちなすつたのぢやありませんし、お互ひに怪我過ちで爲方ありませんわ。人間の事つて云ふものは、成るやうにしか成らないものなんですから、誰の所爲、彼の所爲もありません。何うぞ御心配なさらないで。」と義妹に云つたと同じ哲學で氣易げに打消した。

縁子は其の間に、最う我慢が出来なくなつてつか／＼と寢臺の傍へ行つた。彼女は自分の其目で睨りと見定めずには居られなくなつたので、靜野に手眞似で退いて貰つて、寢臺の枕許を向ふへ廻ると、白い毛布に顎まで掩はれて、白い枕に埋まつてゐる其の負傷者の顔を、ちつと息を凝らして覗き込んだ。血の氣の全く失せた其の顔は、少しでも生きてゐる人の色とは思へなかつたが、それでも薄墨を舍んだやうな唇からは、苦しうな呼吸が不規則に通つてゐた。そして一文字に通つた眉と肩との間に、深い堅皺を刻んで、薄目に閉ぢられた瞼の蔭から細く覗いてゐる白目が、今にも何か云ひ懸けさうに見える。あゝそれは、此の春以來彼女が焦がれに焦がれて、體も病ふほど思ひ詰めて來た其の俊作では無いか。彼女の胸に、彼女の魂に、唯一人の戀人として刻み附けられた其の俊作である。

然し其の俊作は、息こそ通つて居れ、死人も同じやうに昏睡してゐる。自分をこれ程までに思ひ、自分も亦同じ思ひに忘れる事の出来ないのを、強ひても思ひ切つて、一生最う相見まいと悲しく決心した其の縁子が、今自分の枕許に、息も觸るほど近々と顔を寄せて、其の一生懸命な目が自分を見詰めてゐるとも知らずに、彼は昏々として生と死との境を小迷つてゐる。

縁子の小さな胸は今にも破裂しさうに思へた。彼女は切なさうに息を喘がせながら、両手でちつと乳の上を抑へてゐたが、急に目がくら／＼としたので、思はず其の手で顔を掩つた。と、今まで下半身だけで制してゐた戦慄が全身に渡つて、肩から背中が波打つやうに見えた。若し人目が無かつたら、彼女は俊作の寢臺へ一緒に泣き崩れたであらう。眠れる魂の歸つて來るまで、聲を揚げて俊作の名を呼び續けたであらう。然し教養ある婦人としての飭みが、僅に彼女を取亂させなかつた。

不思議さうに妹の様子を眺めてゐた朔郎は、耐りかねたやうに寄つて行つて、後ろから小聲で云つた。

「何うしたのだ、おい、縁子。」

「兄様、貴方は……貴方は、大變な事をして下すつたのねえー」と云つて、縁子は不意に顔を掩つてゐた手を取ると、涙を一杯溜めた其の目が、怒めしさうに、そして情無さうに朔郎を見た。「此の方は、始終家へ入らした、阿父様が一番望みを囁して居らつしやる、江間さんと云ふ方ぢやありませんか。それに私だつて……何時か兄様にも私……其の方なんぢやありませんか。あゝ、大變な事をして下すつたー」

彼女は其時まで怯へに怯へてゐた體が、最う力も盡き果てたやうに自然と床の上へ倒れ懸つた。朔郎の太い力のある腕が、靜かにそれを抱き留めた。



明け行く空

二頁

「赦してくれ。己の爲出来した事が、お前達にまでそんな重大な関係があつたのか。あゝ、己は何うすれば可いのだ」と朔郎は妹のぐたりとした首を胸へ抱き締めて叫んだ。

静野も多賀子も息を呑んで、其の惻ましい光景を眺めてゐた。

不思議な運命で、此の一室に集つた四人は、其のまゝ俊作の枕許に附添つて、不安な一夜を明かした。宿直の醫員が二時間毎に特別の廻診をしてくれたが、俊作は終に其の昏睡から覚めやうとは爲なかつた。此のまゝ永遠の眠りへと續いて行くのではあるまいかと、醫者さへ危ぶんだほど、永い一夜を昏々と眠り續けた。

曉の五時、送電を絶たれた電燈がぱつと消えた。電氣の點つてゐる間は氣が附かなかつたが、外は最う明け懸つたと見えて、窓々の白いカーテンを透して、日出前の白々した光が部屋の中へ流れ込んで、白い壁や天井や、白い毛布やシーツやが冷たく澤立つて、眠らない人々の疲れた目へちかく沁みだした。

多賀子は朝寒に凍んでゐた體を椅子から起すと、衝と窓際へ行つてカーテンを絞つた。山から出る鎌倉の朝日は未だ昇らなかつたが、南表の海の上はからりと最う明け放れてゐた。昨夜の時雨雲も奇麗に吹き拂はれて、其の一雨で洗つたやうに晴れ切つた曉の空には、新鮮な乳色の光が流れて、爽やかな秋の氣が硝子越しにも澄み渡つて見えた。唯左の山蔭になつた入江や、北寄りの丘や林が薄い霧籠

に暈されたが、それも見る／＼剝がれて鮮いで來る。

「まあ、奇麗な朝。」と多賀子は獨言ちた。

「あゝ、漸と明けた」と朔郎が溜息を吐いた。

緑子も静野も、同時に苦しい夢からでも覺めたやうにほつとした。と其時、何時覺めるとも見えなかつた俊作も、深い昏睡から漸く覺め懸つた。

### 昏睡の後

江間俊作は長い昏睡から漸と覺めた。此のまゝ終に目覺める事無い永遠の眠りへと續いて行くのではあるまいかとまで危まれた、其の長い／＼昏睡から漸う覺めた。憂鬱な一夜が明けて、清爽な朝の光が動き始めると同時に、今まで闇を小迷つてゐた彼の魂が、其の光に依つて呼び返されでも爲たやうに徐々に目覺めたのである。烈しい貧血の爲めに色も澤も無かつた顔が、微に紅みを潮して來た。びつたり瞑るだけの、活きた筋肉の弾方も無いやうに瞼目に垂れてゐた瞼も、大儀さうに開かれた。そして視力も未だ十分で無いらしい鈍い疲れたやうな其目が、まじり／＼動いた。それは自分が何處に居るのか、何時の間に何うしてこんな處に來たのか、此處は一體何處なのか、先づそれを確めよう

昏睡の後

一七



罪の人

としてゐるらしく見えた。  
 俊作が小坂村の家から戸板に載せられて此病院へ運ばれたのも、手術臺の上に載せられて手術を受けたのも、それから此病室の寢臺に横はらせられたのも、總てが彼の深い昏睡に陥つてゐる間に行はれた事なので、今初めて我に返つた彼には、夫等の總ての事が全然意識に無かつた。自分は毎朝のやうに自分の寢床の上で今日を覺ましたのだと彼は思った。が、何だか又然うで無いやうな氣もした。自分は今夢を見てゐて、其の夢の中で目を覺ましてゐるやうに夢みてゐるのでは無いかとも思った。彼は其の自分と云ふものが、夢の中の自分か、現の自分か些つとの間判断が附かなかつた。彼はばらばらになつた意識を、動もすれば朦朧となつて行かうとする意識を、骨を折つて纏めようとしたが、それは困難であつた。體の心に深い疲勞を感じて、其の骨折りが此上も無く大儀であつた。そして夢かも知れない、夢で無いかも知れない、何方だつてそんな面倒臭い事は打遣つて置けば可いと云ふやうな、投遣りな氣持になる。と、其のまゝ又うとくと意識が不明瞭になつて行く。同時に又、是ではならぬ、何うでもそれを確めずには措かれないと云ふやうな焦躁を一方に感じて、其の不明瞭になつて行く意識を一生懸命に呼び返すのであつた。然うした二つの相反した現象が、暫く彼の中で闘つてゐた。  
 それは非常な密度を以て襲ひ懸つて来る恐ろしい肉體の睡魔に、辛うじて覺醒し懸つた心意が自識

罪の人

に歸らうとする烈しい欲求との闘ひであつた。そしてそれは生と死との闘ひであつた。闇と光との闘ひであつた。結局意識は嗜眠を制した。生は死に勝つた。光は闇を逐つた。俊作は全くの自分に返つたのである。そして記憶も徐々に回復され、思惟も次第に明かになつた。  
 世に背き、人に隠れた自分達兄妹の佗住居へ、突然多賀子が訪ねて來た。自分は彼女の無恥と無反省とを責めて追ひ返した。妹の静野が泣いて自分の怒りを宥めた。姉の多賀子の赦しを求めた、そして彼女自身の孤獨を訴へた。自分は鶏舎を見廻はつた後で、裏の畔路傳ひに柴山へ入つた。飼犬のオノルが主人の浮かない様子を見て、毎ものやうに燥ぎもせず、とぼくと自分の後から附いて來た事まで、俊作は今隙りと思ひ出された。それから自分は柴山を抜けて、小松の茂つた赤土山の手前の谷地へ出た。そして南を受けた日當りの好い、風の來ない暖かな窪地の、半ば枯れ懸つた柔かな芝草の上に腰を下した。すると、日向を慕つて集つてゐた昆蟲が、些やかな音を立てながら遁げ散つた。其の微な氣勢までも彼はまさしくと思ひ浮べた。それから何處かで山鳥の聲が聞えた事も思ひ出した。オノルが自分の傍にちつと坐つて、自分の顔をまじくと眺めてゐた其の表情も隙りと思ひ浮べた。其時自分は静野の悲しい運命を考へてゐた。彼女を何うかして其の孤獨から救ひ出してやりたいと思つた。然しそれは何うする事も出來ない彼女の宿命であつた。静野のやうな心も姿も優しい人間が、然ういふ呪はしい宿命を負はされて生れて來たと云ふ事に、自分は烈しい憤りを感じずには居られな



かつた。彼女の其の不当な宿命に對して、自分は總てを攝理する全能の者を責めずには居られないやうな気がした。と、其時不意に體の何處かを、平手でびしやりと殴られたやうな衝動を感じた。同時に一發の銃聲を聞いた。そして獵裝の男が自分の傍へ現れた。自分は其男に介抱され、其男に負はれて自分の家へ送られた。其男と妹の靜野とが、自分を病院へ運ぼうと云ふのを、自分は固く拒んだ。それまでは明確に彼も覚えてゐる。そしてそれから後の事は何にも知らない。

俊作は夫等の事が、何だか遠い／＼昔の記憶のやうにも思へた。然しそれにも拘はらず、夫等の總てが極めて明確に、一々順序正しく思ひ浮べられて來るのであつた。そして其時には氣が附かなかつた多賀子の髪の色や、着物の柄や、持物や履物や、其の表情や態度や。それから靜野の泣顔や、悲しい聲音や。それから裏の鶏小舎へ行つて粒餌を撒いてやつた時に、二年子の白色レグホンの雄が何うしたとか、名古屋オオチンの雌が那したとか。柴山の雜木の實が赤く零れてゐたとか、谷地の窪みの光線が黄ろかつたとか。不斷なら其場限り忘れて了ふやうな細ま／＼した事まで、全て今其事を經驗しつゝあるかのやうに、彼の心に在々と再現されるのであつた。其のぼか／＼と暖かつた日光や、藁でも敷いたやうな柔かな枯草の坐り心地までが、單に心象ばかりで無く、彼の感覺にまでも其のまゝ感じられるやうにさへ思へた。

「だが、それから何うなつたのだ？ 病院へ連れられる事を拒んでから、それから自分は何うなつた

のか。」と俊作は考へた。丁度左の肩を上にして横はつた彼の其の眞面に見える白い壁に、小さい點を打つたやうにぼつちりと黒い汚染のあるのを、ちつと見詰めながら、「己は自分の家に居るんぢや無い。此所は壁でも天井でも窓でも、西洋室ぢや無いか。それに己は寢臺の上に寝てゐる。して見ると病院かな。ぢや、彌張り己は何處かの病院へ入れられたのだ。それにしても己が銃弾に中つたのは、あれは一體何時の事なんだらう？ 餘程前のやうな氣もするのだが、然しそんなに古い事ぢや無い。一年も二年も前の事ぢや無い。彌張り最近の事に違無い。あれから一體何のくらゐ経つたのだらう？ 何だか左の肩が疼く。然うだ、己は屹度左の肩を負傷したのだ。」と思つた。

俊作は體の位置を變へようとして初めて身轉ぎした時、今まで氣附かなかつた傷部の疼痛を感じて、思はず呻き聲を擧げた。彼は囊から餘程長い間色々な事を考へてゐたやうに思つたが、其實正氣に返つてからそれ迄の時間は、ほんの些つとの間であつた。

一晚中負傷者の面に注がれてゐた八つの目が、多賀子の絞つたカーテンの間から、硝子越しに見える爽かな朝の光に、明け行く空や海に、些つと振向けられてゐた瞬間、丁度俊作の呻き聲を聞いて、四人は一齊に其目を返した。中にも縁子と靜野とは、はつと同時に椅子から立上つたが、何故か縁子の方は其のまゝ體が竦んだやうになつて、直ぐには顔を覗いて見る事が出来なかつた。丁度俊作が顔を向けた方の側に居た靜野が、急いで枕許から覗き込んだ。俊作はばかりと目を開いてゐた。



「兄様！」

二度と開かれるか、開かないか分らないと思へた兄の其の目が、今ぼつかりと開いてゐるのを見ると、静野は思はず聲を弾ませて呼んだ。其の呼んだのも夢中で、彼女は最う一度自分でも瞭りと呼んで見ずには居られなかつた。

「兄様！」

「静野か。」と俊作は懶さうに云つて、其の疲れたやうな目でぼんやり妹の顔を眺めてゐる。

「兄様、お氣が付きましたの？」 あ、本當に、本當にお氣が附いて下さつたのね。あ、有難い！」

と云ふと、静野ははらくと嬉し泣きに泣いた。

「静野、お前は何を泣くのだ？ 何も泣く事などありやしないぢや無いか。」と云つた俊作の聲は、割合に駭りとしてゐた。「僕こそお前の爲めに泣いてやりたいのだ。實際僕はお前に對して無慈悲な兄だ。何一つ兄らしい事も爲てやらずに、苦勞を爲せたり、心配を懸けたりばかりして、全く濟まないと思つてゐる。勘辨してくれ。」

彼の其のぼつかり開いた目の中にも涙が滲んだ。彼は負傷した左の肩を上にして横はつたまゝ、體は固より、首も動かす事が出来ないで、部屋の内には自分と静野と唯二人きりのやうに思つてゐる。自分の知らない間も妹が一人で、自分の枕許に看護して居てくれたのだと思つた。

「何を仰しやるの、兄様。」と静野は襦袢の袖で涙を拭つて、「私も兄様が無事でさへ下されば、回復してさへ下されば、何にも云ふ事はありませんの。私、そればかりが一生懸命のお願ひなんですわ。兄様に元通りの丈夫な體になつて頂く爲めには、私の壽命を五年や十年縮めても厭ひはしません。いえ、五年十年はおろか、私の命など今の今無くなつたつて管ひません。」

「僕の命なんぞ、お前がそんなに思つてくれるほど値打のある命ぢや無いよ。體ばかり無事だつて、何うせ生効のあるやうな世は我々には來ないのだから。僕は再び此目で此世の光を見るのが、寧ろ不本意なのだ。」と俊作は又懶さうに云つた。

「兄様は又そんな事を仰しやつて、それでは傍で御心配して下さる効がありませんわ。是非丈夫になつて、何うしても元通りの體になつて頂かなくちやならないのよ。」

「元通りの體になれば、それが何うなのだ？ 社會から離れて、田舎に埋もれて、鶏の番でもして、其日々を退屈に送るに過ぎんぢや無いか。是から先、何年経てば埒が明くのか分らない長い生涯を、然うして生効も無く生きて行くと云ふ事は、鳥と間違へられて、鐵砲の中つて一思ひに死ぬよりも餘程惨めぢや無いか。僕が今死なうと殺されようと、誰一人惜しむ者も無ければ、悲しむ者も無い……それやお前だけは悲しんでくれようが、其のお前の爲めにも、僕のやうな融通の利かない兄は、寧ろ無い方が此の先幸福なのかも知れない。」



人

「いいえ、違ひます！ 違ひます！」と縁子が不意に叫んだ。鼻から兄妹の話に深く感動させられた彼女は、一緒に貰ひ泣きをしながら、二人の邪魔を爲さないやうにちつと休へてゐたが、此時耐らなくなつて、つか／＼と俊作の向ふ前へ廻つた。そして涙に濡れた、蒼褪めた顔を近々と枕許へ寄せながら云つた。

「貴方の爲めに悲しみ、貴方の爲めに惜しむ者はお妹さん一人ぢやありません。私だつて、父だつて、貴方の事を何んなに思つてゐるか知れません。貴方を捜し出して、最う一度元の貴方に復つて頂かうと思つて、父でも私でも、何んなに氣を揉んでゐるか知れません。それなのに、今のやうな自暴な事を仰しやつて……あゝ、それは貴方のお考へが間違つてゐます。」

傍には静野や多賀子や、兄の朔郎の居る事も忘れて了つたかのやうに、いや、設ひ俊作と二人きりの差向ひでも、不斷の縁子なら到底も云へないやうな夫れだけの事を、彼女は不思議な勇氣と興奮とで一息に云つて退けた。俊作の目は喉が切切れはしなかつと思はれるほど、大きく／＼見張られて、縁子の顔に喰入るやうに注がれてゐる。そして驚愕と、疑惑と、苦惱とが一緒になつて、血の氣の乏しい蒼い顔が混乱した其の表情で烈しく變つた。そして顔中が歪んで見えるまで不隨意に痙攣してゐた頬から睨へ、ぼつと赤くなつて、鈍い疲れたやうな目が急に輝きを帯んで來た。

「お嬢様！ あゝ、貴方はお嬢様！」と彼は喘ぐやうに叫んだ。

枕許を一足後ろへ退いてゐた静野も、窓際に固くなつて立つてゐる多賀子も、椅子に腰掛けたまゝ身動きも爲さないでゐる朔郎も、其の三人の六つの目は同じやうに見張られた。そして烈しい感動と興奮とに白熱したやうな縁子の眞蒼な顔と、寝臺の上に蒼くなり根くなりしてゐる俊作の顔とを、瞬きもせずに見守つてゐる。

誓ひの言葉

「江間さん！」

縁子は初めて其人の前へ其名を呼ぶと、何故かぐつと喉まで涙が突懸けて來たのを、無理に呑み戻して、其のまゝ暫く口も利けなくて俛れてゐた。する中に、傍でも分るほど息使ひが迫つて來た。と、口を開いた。口を開くと最う後から／＼抑へ難い欲求に驅られるかのやうに、急勝に追懸け／＼喋つた。

「江間さん、私達は貴方を宇佐美村のお宅へお訪ねしましたのよ。貴方のあのお手紙を拜見すると、私は父に連れられて、直ぐ伊豆まで参つたのですよ。すると、貴方は最う宇佐美村には居らつしやいませんでした。貴方が彼處を立退いてお了ひなすつた後でした。そして何處へ行らしたか、お行ぐ

人



先も分らないと云ふ事なんですもの。私はまあ何んなに失望しました事でせう。父だつてそれは何んなにか力を落しましたわ。考へて見て下さい。私も父も始終貴方の事が氣になつてお噂ばかりしてゐた所へ、突然貴方が世の中を見棄てて了ひなさるやうな、あの大変なお手紙なんでせう。是非お引留めして、何うでも最う一度東京へお連れ戻す意りで、遙々出掛けて参つたのに、其の貴方にお目に懸る事すら出来ないのぢやありませんか。お宅は空屋になつて、お妹さんの手入れをなすつた庭の草花と、何時かお話を伺つた事のある、オーノルの大舎とだけが寂しく残つてゐるのを見ました時、私は泣くにも泣けないやうな悲しい情無い心持でしたわ。貴方と云ふ人物を惜しんで、あの億劫がり家の父が故々伊豆まで貴方を迎ひに行つて、其の貴方が何處へ行らしたか分らないと聞いた時の、父の又がつかりした様子と云ふものはありませんでした。父はそりや貴方の事を思つてゐるんですもの。私だつて貴方の事は思つてゐるんです。え、父よりも私は思つてゐますわ。貴方が居らつしやならなくなつてからと云ふもの、父は爲事の方も氣乗りが爲ないやうですし、私は又明けても暮れても貴方の事が氣に懸つて……貴方は然し、そんな事は察しても下さらないのでせう。だつて、あれきり行方を晦まして了ひなすつて、お便り一本下さらないのですもの。餘りですわ。え、餘りです、餘りですわー」

不斷の憤みも筋みも悉かり失つて了つて、後からく〜と篋り湧いて來る感情を、其のまゝ獨りで喋り續けてゐた彼女は、餘りです、餘りですと繰返す中に、急に胸が一杯になつて來た。そして一旦乾いた涙が、兩の頬に白い筋を作つて留度無く傳はり流れた。彼女は到頭兩手で顔を掩つて了つた。

「濟みません」と然う云つた俊作の其の一言には、深い感激が籠つてゐた。「然し、僕の身にしては、僕の今日まで取つて來た行動以外に、何うする事も出来なかつたのです。今だつて、此後だつて、彌張りそれ以外に何うする事も出来ないのです。手紙で申上げた通り、人並に社會へ出ては活きられない我々兄妹の運命なのです。其の定められた自分の運命を、自分で知らない中は左に右に、知つた以上は潔くそれに服するより外に爲方ありません。屠殺場へ牽かれた牛が、牝牛は最期まで狂ひ腕くさうですが、牡牛になると何んな犇猛な奴でも、自分達の同類の流した血の臭ひを嗅ぐと、それきり鎮まつて了つて、最う爲れるまゝに、恐ろしい一撃が額へ來るのを大人しく待つてゐるさうです。僕は社會から葬られるべき自分の運命を明かに知りながら、葬られるまでそれに服する事が出来ないで、葬られ懸つてから見苦しく腕いたり騒いだりは爲たくないのです。血の臭ひを嗅いで潔く諦める、雄雄しい牡牛の其の忍黙の勇氣に學びたいのです。ですから、僕をして僕の運命に服する事を、何うぞ許して頂きたいのです。先生の身に餘る御恩情は、僕も決して疎かには思ひません。貴方が僕のやうな者を氣に懸けて下さる其のお心持も、解さないのではありません。けれど、僕は僕の運命に服するより外には、取るべき道を知らないのです。」



彼は動もすると激して来る感情を抑へくして、努めて穩かな調子で靜に語つてゐたが、其の靜な言の底には、動かす事の出来ない意志の力があつた。固い決心があつた。それは全く屠殺場へ牽かれた牡牛が、自分の遁れられない運命を自覺して、其の恐ろしい一撃を大人しく待つてゐるやうな、悲しい靜な勇氣が潜ませられてゐた。

「一體貴方の仰しやる其の運命と云ふのは？」と縁子は顔に當てゝゐた兩手をぱつと除けて、濡れた目で詰るやうに俊作を見た。

「それは染井君の云つた事實です。然うです、染井君は嘘を云ひませんでした。あれが總て僕等兄妹の荷うた運命なのです。」と俊作は彌張り靜に云つた。

然し其聲は顫へてゐた。そして彼の顔は苦しげに歪んで見えた。それは忍ぼうとしても忍び切れぬ屈辱の憤りを、一生懸命に抑へてゐる其の努力の慄ましい表情であつた。

「あゝ、未だ其事を云つて居らつしやる。貴方はあの時の染井さんとの詰らない口約束を、今でも彌張り氣に懸けて居らつしやるのね。」と縁子は早口に叫んだ。「貴方もあんな染井さんとの口約束を覺えて居らつしやるくらゐなら、あの時私が貴方に申上げた事だつて覺えてゐて下さらなくちやならない筈ですわ。豈か忘れて下さりや爲ますまいね？」

「あの時貴方の仰しやつた事と云ひますと？」

「貴方があの晩、門の方へ出て行らつしやる途中で、私がお呼び留めして申上げた事ですわ。私は何んな事があつても貴方を信じます。設ひ世界中の人が貴方に背いても、私だけは信じます。私だけは貴方の身方ですと申上げたでせう。私の心は今だつて其の通りです。貴方が何んな運命であらうと、貴方が何ういふ境遇であらうと、私の心持には些とも變りはありません。貴方は私が貴方にお誓ひしたあの時の言を、信じては下さらなかつたのでせうか。それとも、忘れてお了ひになつたのでせうか。」

「忘れて可いものですか！ 僕は忘れません。あの時の貴方のお言は、僕も始終心で繰返しては感謝してゐるのです。」

「江間さん、貴方は淑徳に活きる處女の身が、男の方の前にそれだけのお誓ひをするのは、唯感謝して頂かう爲めばかりだと思つて居らつしやいますの？ それでも餘り可哀さうです。餘り可哀さうです。女に取つて死ぬ事は然ほどでも無いでせう。けれど、自分の淑徳に懸けて、女の口から誓ふと云ふ事は死ぬよりも一生懸命です。身も心も、耻も名譽も、一切投げ出してはななければ、私だつてもあゝして私からお誓ひするまでに、思切つては出来ませんでした。私はこの時私と云ふものゝ全部を貴方の前に投げ出してお誓ひしたのでですよ。」と然う云つた縁子の其の言には、凜とした女の魂の響きがあつた。「貴方はそれを、唯貴方から感謝して頂く爲めばかりだつたと思召して？」

「ちや僕は、何うしたら可いのでせう？」と俊作は惱ましげに呻いた。「一體僕は何うすれば可かつた



罪の人

「のでせう。貴方は僕に何うしろと仰しやるのでせう。」

「江間さん、私は唯貴方に理解して頂きたいのです。私がお誓ひした言を正直に理解して頂きたいのです。私が貴方を信するやうに、貴方にも私を信じて頂きたいのです。」

「待つて下さい。僕は貴方を信じてゐますよ。お嬢様のあの時のお言も信じてゐますよ。」

「信じて下さるなら、世界中の人が貴方に背いても、私だけは貴方の身方ですと申し上げた其の言を、いゝえ、言ちやありません、私の魂の聲を信じて下さるなら、貴方は設ひ御自分が、世界中の人に隠れなければならぬお身の上であつても、私にだけはお隠れなさる必要は些とも無い筈ですわ。それを貴方は隠れようと爲さるのですもの、彌張り私を信じて下さらないからです。私の魂を本當に理解して下さらないからです。人が信じて信じられないほど悲しい事はありません。私ばかりぢや無い、父だつてそれは悲しんでゐます。あの時貴方がお歸りになつた後で、父は貴方の跡を追懸けて來まして、設ひ何んな事があらうとも貴方其人を信すると、自身の口から一言貴方にお聞かせ爲たかつたと云つて、何んなに残念がつたか知れませんが。ですから、貴方のお手紙を拜見すると、父は直ぐ私を連れて、伊豆まで貴方をお迎ひにも參つたのですわ。すると、貴方は最う居らつしやらない。行方を晦まして、父や私にまでも隠れてお了ひなすつたのぢやありませんか。」

「赦して下さい。僕はそれに償しない人間なのです。そんなに信じて頂けば頂くほど、僕は益々貴方

罪の人

や先生に自分の身を恥ぢなければなりません。僕はかうして貴方にお目に懸つてゐるのも、實に恥かしいのです。僕は貴方や先生の前に出られない人間なのです。彌張り隠れてゐなければならぬ人間なのです。」

「あゝ、是ほど申し上げても、貴方は私達の心持を理解して下さらうとは爲さらない。信じて下さらうとは爲さらない。」と縁子は絶望の目をして、悲しさうに頭を掉つた。

「理解しないのぢやありません。信じないのぢやありません。けれど、理解したからつて、信じたからつて、僕は彌張り自分自身の恥がましい身の上を、貴方々の前に憚らねばなりません。」

「それは貴方御自身の罪ぢやありません。」

「自分の罪ぢや無いかも知れません。然し自分が生きてゐる限り、自分で恥ぢなければならぬ呪はしい運命です。」

「貴方が御自分で恥ぢなければならぬと仰しやる、其の呪はしい運命とかを、私や父には最う少し世俗的で無くお容れする事が出来ないと、貴方は思つて居らつしやるのでせうか。」

「いや、然うは思ひません。貴方でも先生でも僕故に世俗に反抗しても、僕をお容れ下さるかと思ひますだけに、仍更ら僕はそれに甘える事が出来ないので。それほど恥知らずになり切れないのです。」と俊作は心持首を掉つて些つと目を瞑つたが、溜息を吐いて、「假に僕が恥知らずになつて、貴方



や先生のお容れ下さるまゝに甘えたとしたら、其の結果は何うなるでせう？ 考へても恐ろしい。」

「其の結果は、多少なりとも貴方を幸福にしてお上げ申されるかと思ひます。父や私の幸福は申すまでもありませんわ。」

「いや、断じて其の反對です。僕には恐ろしい悲劇が目に見えます。」

「何うしてそんな結果が見えますのでせう？」

「お嬢様、潔癖な社會の道義は、一個人の何んな小さな汚染でも見通すまいとする世間の良心は、私を容れて下さらうとする貴方や先生のお心持とは正反對です。其所に矛盾と葛藤と衝突とがあります。それは悲劇を生むのに十分です。」

「いゝえ、父でも私でも、自分の信じた事を行ふのに世間を憚りません、社會を恐れませんが。」

「お嬢様、然うは行きません。今は何でも無い流れでも、旋て恐ろしい瀧になつて落ちる事が分つてゐれば、其の流れに片足踏み入れるのも恐ろしい事です。僕自身は最う觀念してゐるから恐れもしません。けれど、然うまで僕を信じて下されば、愛しても下さる貴方や先生を、僕と同じ運命の小舟に載せて、其の恐ろしい瀧へ巻き込まれるのが恐ろしいのです。貴方々が信じて下されば下さるほど、愛して下されば下さるほど、其の信愛に甘えて、貴方々を僕と一緒に破滅の瀧壺へお落しする事は出来ないので。然うです、然ういふ事は僕には出来ません。断じてそれは出来ません！」と俊作は次

第に疲れて来る調子を強ひて強めて云ひ切つた。

そして彼は深く溜息を吐いた。と、喉が獨りでに弛んで来て、其のまゝ靜に目を閉ぢて了つた。俊作が負傷した體である事も、長い昏睡から漸く覺めて、疲労と衰弱の中から骨を折つて對手になつてゐる事も、全て氣が付かないやうに、彼を説き附ける事で一生懸命になつてゐた縁子も、今は到底其の決心を動かす事の出来ないのを知つた。そして烈しい失望の爲めに、今まで熱し切つてゐた血も一度に冷たくなつた。それは俊作の告別の手紙を見た時の悲しい失望よりも、それから伊豆まで故訪ねて行つて、俊作の行方が分らなかつた時の惻ましい失望よりも、更に深く深い大きな絶望であつた。それは自分の愛人が恐ろしい死の淵に沈みつゝあるのを、目の前に救ふ手立も無くて、見す見す殺してやるやうな切ない絶望であつた。

「然うだ、今江間さんを救ふ事の出来る人は、此の決心を翻へさせる人は、阿父様より外には無い。」と縁子は初めて其處へ氣が附いて、「然うだ、二三日容體を見た上で、最非阿父様に來て頂かう。」と然う思つた。

俊作は何時の間にか又目を開いてゐた。縁子ははつと氣が附いて我に返ると、急に顔が熱くなつて來た。俊作の目ばかりで無く、靜野の目も、朔郎の目も、多賀子の目も一樣に自分へ集つてゐる事を初めて見て取つた彼女は、烈しい羞耻を感じずには居られなかつた。自分は時と場合も忘れ、慎みも



盡きぬ縁  
一占  
飮みも忘れ、皆の居る事さへ忘れて、曩から何んな事を喋つたかと思ふと、顔が燃えるやうであつた。

盡きぬ縁

「お嬢様、一體僕は何うしてこんな處へ来たのでせう？ 何うして又貴方とお目に懸る事になつたのでせう？」俊作は最初から不思議に思つて氣に懸りながら、今まで聞き質す機會も無かつた其の事を、初めて口へ出して聞いた。「何だか僕は長い間眠つてゐたやうな氣もするが、今は然し目を覺ましてゐるんでせう。貴方にお目に懸つたり、貴方とお話したりしてゐるのは、是は夢ではありませんね。僕は何時か夕方山へ行つて、鐵砲に中つたのだが、それから此方何にも覺えないのです。其の鐵砲に中つたと云ふのも、夢かと思へば夢のやうにも思へるし、何だか現實と夢とが瞭りしないのですが、一體本當の事は何うなのでせう？」

彼は暫く目を瞑つてゐた間に、曩までの懐ましげに緊張してゐた顔も悉かり和らいで、そして其の云ふ事も自分だけでは頼り無さうに人懐しげで、何だか幼い者が母か姉にでも物を聞くやうな調子であつた。聞いてゐる中に、縁子は顔の火照りも冷めて了つて、何故か妙に胸が迫つて來た。

「江間さん、皆なそれは夢ぢやありませんわ。本當の事なのですわ。貴方が鐵砲に中つてお怪我を爲

すつたのも、私が斯うしてお目に懸りに來てゐるのも、皆な本當なんですわ。」と彼女はハンケチで目を抑へく云つた。

「然うですか、皆な本當ですか。」と俊作は遠い昔の事でも考へるやうな、うつとりした目をして、「では、僕を怪我させたあの人は何うしたでせう？ あの時は甚く氣を揉んで介抱してくれたが……」

「それは僕です。」と朔郎は耐らなくなつたやうに椅子から飛び上ると、寢臺の裾の方から大廻りをし、俊作の前へ出た。そして不器用に頭を一つ下げて、「實に申譯の無い事をしまして、唯最う恐縮の外ありません。でも、正氣附かれて少しは安心しました。」

「あゝ、貴方も居らしつたのですか。何有、大丈夫です。氣分も大變好いやうです。」と俊作は對手の其の心遣ひを劬らうとするやうに、血の氣の乏しい蒼白な顔を無理に微笑んでさへ見せた。

「江間さん、貴方をこんな目にお遣はせしたのは、私の兄なのですよ。」と縁子が傍から云つた。

「え、貴方の阿兄さんですか？」と俊作は呆れたやうに朔郎の顔を見、縁子の顔を見、二人をきよときよと見比べながら、「阿兄さんの事は度びく先生からお噂も伺つてゐたのですが、僕がお邸へお出入りするやうになつてからは、一度も歸つてお來でが無かつたので、ついお目に懸る機會も無かつたのです……然うですか、貴方が秦博士の御子息で？」

「然うです、秦の倅の朔郎です。僕も妹に來て貰つてから、初めて貴方が妹や父と御存じの間からと



知つて、意外の感に打たれたのです。」

「不思議なものだ！」と俊作は溜息を吐いて、「世の中から隠れて、先生やお嬢様にも隠れて、誰にも知らせなければ、誰にも知らせないやうにこつそり暮らしてゐると、其のお目に懸るまいと思つてゐる先生やお嬢様の、御息であり御同胞である方に、然うしてお目に懸らうとも思はずに偶然お目に懸るし、それが又お目に懸るまいと思つた方に、斯うしてお目に懸る事にもなつた。不思議と云へば不思議、世の中は彌張り廣いやうで狭い。」と感慨深さうに云つた。

曩方から自分も口を出したくて、窓際にむづ／＼してゐた多賀子は、此時つか／＼と枕許へ寄つて来た。彼女は自分が兄から何う思はれてゐるか、何う見られてゐるか、現に昨日も叱り飛ばされて追ひ立てられたまゝ、未だ赦されてもゐない事なぞ忘れて了つて、何だか浮き／＼したやうな燥いだ調子で仲間入りをした。

「兄様、それが彌張り盡きない縁と云ふものですわ。」彼女は其の厚化粧の斑になつた、睡不足の荒れた顔に愛相笑ひを見せて、「曩から聞いてゐれば、兄様も随分ね。外ならないお嬢様があんなに仰しやるのに、男冥利も知らないで頑固な事ばかり云つて居らつしやるんだもの。私、女だから兄様が憎らしかつたわ。少しは人情つて云ふ事も汲んで見るものよ。私、お嬢様のお心持に同情」と云つては失禮だから共鳴してよ。ね、お嬢様、伊豆以來私には貴方のお心持は能うく分つてゐるんですもの。二

人はお友達なんですもの。私、其中折を見て巧く舵を取つて上げますから、安心して居らつしやい。あんな理窟つぼい事を仰しやつたつて駄目よ。あれぢやお互ひに變固くなるばかりで、甘い囁きつて所へ運びませんわ。まあ／＼私に任して置いて頂戴、悪いやうには圖らひませんから。私もこれで、然ういふ人情の細かい経緯に就いちや、なか／＼苦勞をして來てゐますんですよ。」と好い氣持になつてべら／＼喋つた。

縁子は顔から火の出るやうな思ひで、ぢつと俯いてゐた。朔郎は太い眉を寄せて、多賀子の其の表情澤山な顔をじろ／＼見てゐた。静野は傍で、唯はら／＼氣を揉んでゐるより爲方が無かつた。俊作の和らいでゐた顔は見る／＼険しくなつた。

「お前、多賀子ぢや無いか。」と彼は荒い息使ひをしながら呶鳴つた。「何しに來た！ お前は二度と己の前へ顔を出さない筈ぢや無いか。」

「まあ、兄様は未だそんな事を云つてらつしやる。」と多賀子は其の大きな目をくる／＼と見張つて、「こんな時に、兄妹同士泣き寄りしないで何うするのです。私だつて兄様の事を思へばこそ、昨夜も一晩中、まんじりもしないで附添つてゐたんぢやありませんか。」

「兄でも無ければ妹でも無いと、あれほど云ひ渡したぢや無いか。死なうが病らはうが、己はお前の介抱を受けようとは思はない。さつさと歸つてくれ！」



「又そんな頑固な事を云つて、私困つて了ふわ。」と彼女は幾らか悄けて赧くなつたが、「可いわ、私最  
う何と云はれたつて、兄様が赦して下さるまでは傍を放れない事よ。」と云ふと、直ぐ傍の緑子の手を  
むすつと掴んだ。「お嬢様、私昨日お邸へ伺つたのも此事なんですの。兄があの通り頑固な事を云つて困  
るんですが、貴方から何うぞお口添へして謝つて頂けないでせうか。元々大した事では無いのに、一  
國な父が腹立紛れに云つてゐた事を、兄は正直に取つて、何時までもあんな彌喧しい事を云ふんす  
けれど、何しろ最う一昔も前の事なんですもの。今貴方に謝つて頂けば、厭でも最う赦さなけりやな  
りませんわ。ね、お嬢様、私を可哀さうと思つて一緒に謝つて下さいな。」  
緑子は當惑した。小兒が強請むやうに掴んだ手を力任せに揺ぶり／＼されて、指環で指は痛いし、  
體は跟けさうになりながら、紅い顔をして返事に困つてゐた。  
其處へ丁度宿直醫の特別の回診があつた。緑子は窓際へ退いてほつとした。朝日は最う南向きの窓  
硝子の裾へ、さつと斜に射し懸けてゐた。

行 違 ひ

木で云へば若木である。出血過多の爲めに、虚脱に陥りさうな危険も見えて、一時は醫者も首を捻

つたほど重態であつた俊作も、其後めき／＼と快方に向つて行つた。活き強い若木が、折られても截  
られても、駈りと地に根着いた力の續く限りは、新しい芽を吹かすには措かないやうに、命強い青年  
の體の内にも、生きる力が張り充ちてゐた。彼の運命が何んなに生効の無いものであつても、彼の肉  
體は其の運命とは何の關りも無いやうに、生きんとする旺んな力で日立つた。其の根強い生の力は、  
破られた彼の精神を、傷ついた彼の肉體を物としなかつた。旺んな其の力は、彼の害はれた生存を  
立派に元へ復した。銃丸の掠つた骨も次第に治癒し、手術の痕も段々癒着して來た。醫者の心配した  
化膿も無く、餘病も出なかつた。そして一週間と経つた頃には、可なり血色も増し、元氣も回復し出  
した。それでも何うかすると傷痕が痛んだり、折々軽い發熱をするぐらゐは、重態の擧句で爲方が無  
いのである。

静野は兄を思ふ骨肉の情愛から、緑子は其の骨肉以上の情愛から、二人とも夜の目も忘れて俊作の  
看護に盡した。實際緑子の看護振には静野も驚歎させられた。それは親でも同胞でも出来ない、全く  
骨肉以上の盡し方であつた。それは彼女の全神経が俊作の神経に通つてゐるかと思はれるほど、行届  
いた盡し方であつた。朔郎は其の巖な體と太い腕とが、大砲を扱ふには役立つても、看護の手助け  
にはならなかつたが、それでも自分の爲出來した責任から毎日病室へ詰めてゐた。  
生死も分らず昏々として、寢臺の上に横はつてゐる俊作を初めて見た時の緑子の口振から、俊作が



昏睡から覺めた時の縁子との押問答から、そして其後の二人の様子から、それが唯の關係で無い事は、朔郎にも分つた。此夏彼が久振りで艦から上つて來た時、丁度父と一緒に伊豆へ行つてゐた縁子が、歸ると熱が出てぶら／＼してゐた。其間何だか兩親の間が面白くないやうに見えたので、彼は其譯を縁子に質すと、それは自分の所爲だと云つた。そして自分が或る人を思つてゐるからだ、云ひ憎さうに云ひ添へた。思つてゐる人があるなら結婚すれば可いぢや無いかと、朔郎は其時無造作に云つたきりで、それきり彼の方からも、彼女の方からも其の問題に觸れた事は無かつた。それが今度初めて俊作との關係である事が朔郎にも分つたが、然も彼等二人の話から察すると、それは無造作に解決の附かない、何か込入つた事情が引絡まつてゐるらしかつた。で、一週間ばかりと云ふもの、殆ど眠らずに看護を爲通した妹の、其の慟々しく窶れた姿に、朔郎の大きな目が怒らしさうにちつと注がれてゐる事も、折々あつた。

縁子は偶に別荘へ歸つても、餘り病院の方の話は彌榮子に爲なかつた。無論俊作の俊の字も口には出さなかつた。朔郎も別に縁子から口留めされた譯でも無いのだが、何故か俊作の事を話すのは憚つた。彌榮子は又朔郎の負傷させた對手が何んな人間であるか、そんな事は氣にも留めなかつた。唯死なずに助かつたと聞いて、此方からも災難の輕かつたのを喜んだ。陰氣な病室や、窶れた患者の顔なぞ成るべく見たくない彼女は、縁子が留めるのを幸ひにして、一度も病院を訪ねようとは爲なかつた。

そして彼女は折角面白く遊ぶ意で來た其の當が外れて、毎日一人で、別荘に寂しく留守番をして居なければならぬ詰らなさを、訴しくした。

「本當に兄様の爲めに飛んだ目に遭つて了つた。縁さんだつて氣毒だし、私だつて可哀さうよ。東京へ歸つたら、是非此の埋合せをして下さらなくつちや厭よ。可くつて！」

「全くお前達には氣毒だ。芝居へでも何處へでもお供をするよ。」と朔郎は圓刈の頭を掻き／＼した。俊作の容體が大丈夫と見極めの附いた時、縁子は午前の汽車で些つと東京へ歸つた。東京の邸へは未だ今度の出來事も知らせて無かつた。化膿や餘病を懼れてゐた醫者は、黙つて患者の経過を見てゐて、好いとも悪いともそれまで斷言しなかつたので、自然手紙を出すのも一日々々と延びて來た。今となつては手紙よりも、誰か歸つて直かに兩親へ話をした方が、委しい事も分るし、餘計な心配も懸けないで済むと云ふので、縁子が其の使ひに行く事になつたのである。彌榮子は肝心の負傷者を一目も見てゐないし、朔郎は自分が責任者であるだけに面目無いし、此の使ひは何うしても縁子でなければならなかつた。それに彼女自身にしても、自分で行かなければならない事情もあつた。

縁子が小石川の邸へ着いたのは、午前の十一時頃であつた。彼女はステーションから乗つて來た俥を玄關前で降りると、自分で俥代を拂つて、内玄關へ廻つた。そして格子戸に入るか入らないのに、正面の障子が音も無く開いて、染井の細い體がすつと敷居框に立つてゐた。縁子ははつとして、急に



暗い影でも射したやうに體が寒くなつた。そして些つとの間土間の敲に立竦んだ。染井は體を眞直に突立てたまふ、其の冷たく澄んだ黒い目でぢつと彼女を見下してゐた。それは彼女の何も彼も其の一目で見通して了はなければ措かないやうな、胸の中まで鋭く喰入る執念深い目であつた。縁子は其の氣味悪い視線に射竦められるやうに、獨りでに頭が俯れて行くのを感じた。

「私は何をこんな人に恐れるのだらう？ 私は何かこんな人の前に頭が下がらなければならぬ事でもあるのか。いゝえ、いゝえー」と彼女は心で息巻いて、腹立しさうに顔を振擧げると、衝と履物を脱いで小縁へ上つた。

「お歸りなさいまし。」と染井は敷居界を體で塞ぎながらお時儀をして、「大層御緩くりだつたぢやありませんか。今日は貴方お一人で？」

「はあ、私一人なのよ。」と縁子は小縁に立たされたまふ苛々して云つた。

「ぢや、朔郎様や彌榮子様は、未だ残つて居らつしやるのですか。」

「私も直ぐ又出直して行くのよ。」

「然うですか。皆さん大層彼方らがお氣に入りましたと見えますね。毎も三日と御辛抱が出来ないぢやありませんか。何か今度は面白い事でもお在りになるのですか。」と染井は和やく笑つた。

「いゝえ。」と縁子は目を逸らして、厭な中にも一番厭な、其の鼠のやうな細かい奇麗な齒並を見せて

笑ふ彼の笑ひ顔から體を摩り抜けるやうにしながら、「阿母様はお居間に居らつしやるでせうね。」

「おや、何も御存じないのですか。」と染井は左の目をぼちりと瞬いた。

「え？」と縁子は、摩り抜けて行かうとしたのを、自分で立ち留つた。「何もつて？ 何かあつたのですか。」

「いえ、何でもありません。そんな意味では無いのですよ。僕の申上げやうが悪いので、お驚かせして濟みません。」と染井は些つと頭を下げて、「實は、奥様が今朝鎌倉へ行らつたのです。」

「え、阿母様が鎌倉へ？」と縁子は顔色を變へた。

「貴方々が鎌倉へ行らつてから、最う今日で丁度一週間になりますが、一度もお便りが無いものですか。奥様も氣懸りにお爲りなすつたのでせう。丁度今日は天氣も好し、日歸りで行らつたのですよ。ぢや、お嬢様と途中で行違ひになりましたのですね。私は又奥様が向ふへお着きになつてから、入れ交りにお嬢様がお出懸けになつたのかと思ひましたが……未だ十二時前なんです。ぢやそんな時間はありませんでした。私は曩から何だか午後のやうな氣がして居たものですから、つい思違ひをしたのです。」と染井は對手の顔色をじろく眺めながら緩々云つた。

「ぢや、阿父様はお書齋ですか。」と縁子は最う行き懸ける。

「先生はお書齋には居らつしやいませんよ。」と染井は又彼女の行手へ體を持つて行つて、「曩方庭へ降



りて行らしたやうです。先生も江間君が居なくなつてから、何だか落着いてお爲事も手に附かないやうですね。それは慣れた助手が居なくなつては御不自由でせうが、然う云つて外に助手をお入れにならなかつたら、仍御不自由でせうから、お嬢様からも一度然う仰しやつたら如何です。其中には江間君が歸つて來るか云ふやうなお考へで、先生は心待ちにして居らつしやるのかも知れませんが、江間君は多分最う日本の土地には居ませんよ。」

「何うして？」

「何でも此の八九月頃、南洋の方へ行つたとか云ふ噂を學校で聞きましたが、あの人の事ですから恐らく事實でせう。」

然う云ふ染井の白々しい顔を、縁子は黙つて唯まじくと見守つてゐた。彼女は其のまゝ何も云はずにくるりと背中を向けると、つかくと小縁へ戻つて、土間に脱いで置いた履物を引懸けながら、そくさと又格子戸を出て行つた。

「江間が鎌倉附近に居るなんて云ふ事は、彌張り知らないらしいやうだ。」と染井は獨言ちて、左の目をぼち／＼と瞬きました。

花

畠

縁子は内玄関を出ると、臺所の者に顔を合せないやうに大廻りをして、物干場や野菜畠の間を抜けて裏庭へ出た。頭の上の梢から梢へ、木實を漁る小鳥の群がち／＼と啼いて、何處からとも無く晝の蟲の聲が細々と聞える。縁子は邊りを見廻した。そして立留つて聞耳を澄ました。廣い邸内はしいんとして、其處らに人の氣勢もしない。彼女はせか／＼と著作室の窓下へ寄つて行つて、外から父を呼んで見たが、中はひつそりとして彌張り返事は無かつた。

「裏の溜池の方知ら？ それとも表庭か知ら？」

然う考へながらも、彼女は其の何方らへも行かず、それは未だ霜を知らない朝鮮芝の青々とした上へ、眞晝の日がうらく照つて、絹天鷲絨のやうに澤立つたグラウンドの方へ引附けられて行つた。其處にも人影は無かつたが、其の横的的場には、不斷博士の手慣れた白木の的弓が、弦を張つたまゝ羽目に立て掛けられてあつた。そして薄部尾の稽古矢が、鉄に土の着いたまゝ投げ出されてある。

「あゝ、弓を引いて居らしたんだわね。ぢや、屹度其處らに居らつしやる。」

縁子は的場の裏から果樹園の方へ捜して行つた。と、花壇の向ふの盛りを過ぎたダアリヤの蔭に、



詰襟の爲事服を着た父の博士の丸々した肩や、太短い頸や、頭の天邊が薄く禿げ懸つて、頸窩から兩方の耳の上へ白髪交りの毛が三日月形に残つてゐる其の後ろ姿が、温々と小春日を浴びて暖かさうに見えた。彼女は些つと立留つて、其の丸々した後ろ姿を見てゐる中に、毎もの小さい善良さうな目を細めて、和こくと自分を迎へてくれる慈愛深い父の顔が、目に見えるやうな気がした。

「あら、何をして居らつしやるのだらう？ あんなにダアリアの花へ顔を押し付けては、一つく匂ひを嗅いで居らつしやるわ。ダアリアに匂ひがあるか知ら？ 可笑しいわ。」と緑子は獨りで笑つた。

其の瞬間、彼女は何も彼も忘れて、七八つの小娘のやうに行きなり駆け寄つて、父の其の頸頭へ齧り附きたいやうな気がした。けれど、そろくと自分も花鳥の中へ入つて行つた。娘の緑子が直ぐ後ろに來てゐるとも知らない博士は、へなくするダアリアの莖を手で掴んでは、顔の傍へ撓め寄せて、其の關れ懸つた大きな花輪へ鼻を埋めるやうにしながら、カククスからベオニ、白から紅、紅から緋、紫、黄、樺と、一本々々匂ひを嗅ぎ分けて行く。

「阿父様。」緑子は思はず噴き出しさうになつて呼び懸けた。

博士は思懸け無く身近に娘の聲を聞いたので、吃驚して振向く拍子に、鍍金色のジヤイガンチックを一本押し折つて了つた。彼は其處に妍やかに笑つて立つてゐる緑子の美しい姿を見ると、其の吃驚して見張られた小さい目は、案の如く溶けるやうに細まつて行く。黄ろい花粉の着いた鼻の上に横皺を

疊みながら、胡麻鹽の硬い短い口髭がむづ／＼すると、厚い唇が見る／＼解ぐれて來た。

「緑。」

「只今。」と緑子は笑ひながらも頭だけはちやんと下げて、「阿父様は曩からダアリアを一つく嗅いで居らつてね。少しは匂ひのするのが在りまして？」

「何だ、お前は黙つて見て居つたのか。人の悪い奴だな。」と博士も無邪氣に笑つて、「私は些つと思つたのだ、人間にも白色人は白色人、黄色人は黄色人と、それ／＼皮膚の色に依つて特種な體の臭ひがするやうに、同じ花でも色彩に依つて、特種な匂ひが爲はしなからうかと。」

「まあ阿父様は、生物學者か植物學者のやうな事を御研究ね。それで特種な匂ひがありました？」

「無いな。然し特種な匂ひは左に右くとして、ダアリアの花に香氣を附ける事が出來たら大したものだな。こんなに綺麗な花に匂ひが無いと云ふのは、美人に愛嬌が無いやうなものだよ。惜しい事だ。」

「幾ら美人でも天然の上に人工で粧ふのですから、ダアリアにも人工で匂ひを附けたら可いでせう。」

「だから、園藝家も色々新しい變種は作り出すが、其所までは未だ人工が到らないから爲方が無い。」

「園藝家で無くても、私なら造作無く附けますわ。」

「何うして？」

「香水を吹いて。」



「馬鹿な。それでは直き匂ひが立つて了ふ。」

「ちや、莖へ注射する。」

「それこそダアリヤが興奮して、花の舞踏でも初めるだらう。」

「ダアリヤの舞踏！ 詩だわね。」

「何……(嘘みをして)有、お伽話だ。風邪でも引いたかな。」

「嘘。阿父様が鼻の頭に花粉を付けて居らつしやるものだから、風で鼻の穴へ舞ひ込んだのよ。」

「然うか。」と博士は手でそれを拭ひながら、又一つ嘘みをして、「それでは花風だ。」と駄洒落つた。

そして父子は罪も無く笑つた。腹の底から揺すり上げるやうな高らかな博士の笑ひ聲と、緑子の牙えて澄んだ笑ひ聲とが、花島の中から楽しさうなハアモニーを揚げて、静かな邊りへ擴がつて行つた。

「何か、皆と一緒に歸つて來たのか。」と博士は旋て聞いた。

「いえ、私だけ。」

「お前達が行つたつきりで、一度も便りを寄來さないものだから、阿母さんは大變心配をして、今朝別莊の方へ見に行つたのだ。お前と行違ひになつたと見えるな。」

「え、其事は今染井さんから聞きましたわ。」と云ふと、緑子の今まで晴々してゐた顔は急に曇つた。

「それで、朔郎や彌榮子は何うしたのか。」

「彌張り別莊ですの。」と云つて、彼女はちらりと父の顔を仰いだが、直ぐ伏目になつて、「あの……阿父様、私あの、阿父様にお話しなけりやならない事が出來まして、それで私一人だけ歸つて來ましたのよ。」と口籠り／＼云つた。

「私に話さなければならぬ事が出來た？」と博士は何とは無しに眉が擧められた。「それでお前一人歸つて來た？」

「え。實はね、阿父様、私達が丁度別莊へ行つた日に、兄様が大變な失策を爲すつたのですよ。銃獵に行らしつて、逸れ丸で人を撃つたのです。」と緑子は最う急いで云つた。

「何、朔郎が人を撃つた？」博士はさつと顔色を變へて、上半身を前へ泳ぐやうにした。

「阿父様、其の兄様が撃つた人が、誰だと思ひに……」

「誰であらうと、此方が不都合である事は同じだ。何といふ不注意な事をしてくれたのだらう！ して、撃たれた人は命に別條無いか。怪我は重いか軽いか。緑、早く本當の事を聞かしてくれ。」と急込む。

「怪我は随分重いのです。左の肩へ散弾が四つ入つて、それに出血が甚くつて……」

「何といふ恐ろしい事だ！」



「けれども好い鹽梅に、本當に天の助けで、最う命には障り無いのです。」

「申譯無い！ 本人の朔郎は固より、朔郎の親として私も其人に申譯が無い。何んな方法を取つても、其人の氣が濟むだけの十分な慰藉を講じなくてはならん。」

「阿父様、兄様が怪我をさせた其人は……」縁子はこくりと一つ固唾を呑んで、「ね、阿父様、其人は江間さんなのですわ。兄様が逸れ丸で撃つたのは、俊作さんですわ。あゝ私、此の一週間と云ふもの、何んな思ひをしましたでせう！」と云ふと、はらくと涙を流した。

「何？ 何！ 朔郎が撃つたのは江間だ？」博士は思はず後ろへ反つてよろ／＼となつたが、手に觸るダアリヤを夢中に引攔んで、「縁、本當の事を云つてくれ。それは本當の事か。私は本當とは思へん。」  
「いゝえ、本當の事です。本當の事ですとも！ それは現在自分の目で見え私でさへ、何うしても初めは本當と思へなかつたらぬ、全で夢のやうな本當の事なのです。」

「それほどの事を何故今まで知らせて寄來さなかつたのだ？ あゝ、何といふ事だ！ だが命には障りは無いのだな」と彼は氣の轉倒した中にもそれだけ念を押した。

「え、最う大丈夫です。今鎌倉の病院へ入院して居らつしやいますが、醫者も最う心配は無いと引受けてくれました。」

「子持女優が、何時か伊豆で一緒になつた、江間の妹の多賀子とか云つたあの女優が、丁度お前達の

鎌倉へ立つた日に、江間の居處が分つたと云つて知らせに來たが……」と其時の事を思ひ浮べながら、「左に右く委しい話を聞かしてくれ。お前の知つて居るだけ残らず話してくれ。私も直ぐ鎌倉へ行かう。」

父に促されて、縁子は話し出した。

心配

父の博士に促されて、縁子は鎌倉に於ての出來事を委しく語つた。

それは兄の朔郎が小坂村で爲出來した椿事の顛末から、自分と彌榮子が別荘へ着いた其日の夜遅く、眞着な顔をして歸つて來た朔郎から、それを聞いたり聞かされたりした時の皆の恐怖や。それから朔郎と自分と二人が俾で病院へ駈け着けて、其の負傷者を見舞ふと、それは思懸け無くも江間俊作であつた事を知つた時の自分の驚きや。それから何時までも終に覺醒しないのかと思はれるまで、深い昏睡状態に陥つてゐる其の俊作の枕許で、兄の朔郎と、そして俊作の妹の多賀子や静野と、四人で長い一夜を明した其の間の不安や。それから明方になつて漸と昏睡から覺めた俊作が、初めて自分と交した悲しい對話や。それから今日までの一週間の俊作の容體の細かい經過や、其間の彼が云つたり爲



心 配 一八二  
たりした事の一々やを、縁子は悉かり父に話したのである。話してゐる間の彼女の胸には、其時の驚きや、悲しみや、恐怖や、不安や、苦痛や、絶望やが、今又それを現に経験しつゝあるやうに生々しく感じられるのであつた。

聞いてゐる博士の方も、それは同じ感じであつた。娘と一緒に驚きもし、悲しみもし、恐怖もし、絶望もした。そして縁子が泣き出した時には、娘の其の感しい様を見まいとするやうに、目を瞑つて俛れたが、其のまゝ彼は何か深く考へ込んで了つた。

「阿父様、江間さんは彌張り御自分の決心を翻さうとは爲さらないのですわ。」と最後に付け加へて、縁子は漸う袂からハンカチーフを出すと、其の新たな失望と悲しみとに留度無く流れる涙の顔を掩つた。「江間の決心と云ふと？」と博士は瞑つてゐた目をぼんやり開けて、「江間は何んな決心をして居るのか。何うそれを翻さないと云ふのか。」

「まあ、阿父様は、」と縁子は顔のハンカチーフを取ると、其の涙に濡れた目を呆れたやうに見張つて、そして怨めしうに父の顔を見上げた。「江間さんが何んな決心をしてゐるか、あんな事を云つてらつしやる！ 何時かのお手紙で、能くそれは知つて居らつしやる筈ぢやありませんか。最う世の中には出ないつて！ 自分の前途を社會の外に葬るつて！ 江間さんの其の決心の爲めに、何のくらの私が悲しい思ひをして来たか、それも阿父様は知つてゐて下さる筈ですわ。阿父様だつても其爲めに、故々伊豆まで出懸けて下さつたのぢやありませんか。それなのに、最うそれを忘れてお了ひなすつたやうな事を仰しやつて……」

「あゝ、お前の云ふのは其事か。それなら阿父さんだつて忘れて居りません。」と博士は重々しく頷いて、一つ溜息を吐くと、今度は腕組をして俛れて了ふ。

縁子は焦れつたくなつて来た。彼女が今何よりも氣を揉んでゐるのは、俊作が其の決心を翻すか翻さないかと云ふ事である。逢はうとしても逢はれず、訪ねようとしても訪ねる當の無かつた俊作の居處も、今は分つたのである。そして皆の案じた其の負傷も、今は最う大丈夫と見極めが附いたのである。然も俊作の心の負傷は少しも癒されてゐなかつた。今も其の自暴自棄の決心を翻さうとは爲ないのである。彼が深い昏睡から覺めた時、縁子が乗附に其の問題へ話を持つて行つたきり、其後何方から其事に就いては話さなかつたが、彼が依然として其の決心を固持してゐる事は、彼女に能く分つてゐた。口へこそ出さなくても、彼の其の思ひ詰めたやうな一途な目色を見ただけでも、それは明かに分つた。そして今度其の體の方が全治して了つた曉には、彼は彼自身を何んな風にして、ふかも知れない。然う思つて彼女は氣が氣では無かつた。で、此際何うあつても彼の其の決心を翻させねばならなかつた。其の決心さへ翻せば、東京へも歸り、學校も續けて、邸へも再び出入りするやうにもなる。そして總てが元の轍へ復るのである。それなのに父は、其の肝心な俊作の決心を翻させ



ると云ふ事には、何だか冷淡らしく彼女には思へた。自分の話を聞いたら、直ぐにも其の決心を翻させる爲めに、鎌倉へ飛んで行つて下さるだらうと思つてゐた父は、其の決心を翻させる事を外にして、一體何を考へてゐるのか、何を屈託してゐるのか、彼女には訝しくもあり、心配でもあり、そして焦つたくもあつた。

博士は兩腕を組んで、首を偏げ氣味に俛れたまゝ、何時までも同じ姿勢で同じ位置に身轉ぎもせず立つてゐた。其の腫れぼつたい臉は細目に又合はされて、胡麻鹽の口髭の短く刈り込まれた厚い唇は一の字に引結ばれて、傍に縁子の居るのも忘れたやうに、花鳥の畔に兀然と立つてゐる。白髪交りの毛の薄く禿げ懸つた頭や、太短い頸筋や、だぶくの事務服を着た丸い肩や脊中やに、午近い小春の麗かな日が温々と當つて、秋の蠅が一匹、囊から其の丸い肩の上に留まつて顔を洗つてゐる。

「阿父様、何をそんなに考へ込んで居らっしゃいますの？」と縁子は辛抱が爲切れなくなつて云つた。「私が黙つてゐれば、阿父様も何時までも黙つてお了ひなすつて、何とか仰しやつて頂戴な。私心細くなつて了ひますわ。」

「心配するな。」博士は今までの其の考へ事から不意に呼び覺まされでも爲たやうに、はつと目を見開いたが、娘の悲しさうな顔を見ると、太い頸をぶる／＼と掉つて、そして隙りと云つた。「江間は屹度歸つて来る。私が能く話をすれば、江間も無論そんな決心は翻すに決まつて居る。」

「然うでせうか、阿父様。」と縁子は息を弾ませながら、「阿父様は、本當にあの、然う信じて居らつしやいまして。」

嬉しいにも、悲しいにも、動かされ易い處女の敏感な情緒は、さも信ずる所のあるらしい頼もしげな父の其の一言で、忽ち彼女を元氣附かせたのであつた。丁度早に水を下げてゐた草花が、涼しい一雨に急に蘇つたやうに、沈み切つてゐた彼女の目も顔も活々と輝いて來た。

「私は然う思ふ。阿父さんだつてお前だつて、江間の事を是ほどに思つてやつて居る。江間の總てを信じ、總てを容れて滌らないのは、私とお前の此の誠だ。誠を以て爲れば石でも點頭くと云ふでは無いか。況て江間は石では無い、情の豊かな青年だ。彼れの母親が何うであらうと、彼れの妹が何であらうと、そんな事は少しも問ふ所では無い。唯江間其者を絶対に信じて居る我々の此のシンセリテイを、江間が本當に諒解したならば、其の情誼に報ゆる爲めにも喜んで歸つてくれる筈だ。からして、其點は敢て心配する事は無いと、私は思つて居る。」と博士は落着いて云つた。

「然うですわね。それは本當に然うですわ。」と縁子はせか／＼頷いて、「私がお話したのはあんな場合だつたから、江間さんも此方らの心持を本當に汲み分けて下さるまでに、心の餘裕もお有りなさらなかつたでせうし、私の方でも本當に得心の行くやうに、お話する事も出来なかつたから、それであんな一國な事も云つて居らしたのですわね。今では最うあの時と違つて、體の方も追々回復して來ら



しつた所ですし、それに女の私が云ふのとは違つて、阿父様から能うくお話しして頂けば、江間さんだつて聰明な方ですもの、屹度それは理解なさいますわね。」と自分で又頷いて、「學校の卒業が一年遅れたつて、そんな事は何でもありませんわね。随分三十ぐらゐになつて、大學を出る人だつてあるのですもの。それに比べれば、江間さんが一年遅れたつて未だ早い方ですわね。」

「然うとも、そんな事は少しも問題では無い。江間は設ひ五年十年遅れて社會に出たからとて、それで五年前、十年前に出た者と、何時までハンチキヤツプを附けられて居るには餘りに駁足なのだ。かまして、そんな事は少しも心配するには及ばんが、私の心配するのは……。」と口籠つた博士は、自分を頼り切つて、悉かり安心してゐるらしい娘の其の様子を氣毒さうに見遣りながら、思はず溜息を洩らした。

「阿父様の御心配なさるのは、」と縁子の顔は直ぐ曇つて、「あの、何んな事でせう？」と不安さうに父を見上げた。

「阿母さんの事さ。阿母さんがそれに同意するか何うか、私の心配するのはそれなのだ。」と博士は愁さうに顔を背向けた。「江間の決心を翻させるだけなら、私の一丁筒でも出来る。けれど、東京へ連れて歸つてそれからの事は、阿母さんと云ふものを度外に置いて、私やお前の了簡ばかりで決める譯にも行かんからな。」

「阿父様は曩から、それを心配して居らしたのですか。」縁子はまじく父の顔を見守つてゐた後で、靜に頭を掉つて、「けれど阿父様、阿母様だつて何有も、同意して下さらないと決まつては居ないでせう。私からも無論お願ひしますし、阿父様からも能くお話しして下さいれば、それから兄様にも口添へして貰ひますし、豈かそれでも肯いて下さらないと云ふ事は無いでせう。ね、阿父様、家の阿母様ぐらゐ物の分つた方は希しいつて、誰でも然う云ふのですもの。それに小さい時から私を可愛がつて育て下すつた阿母様なんですもの。お胸に落ちるやうに事を分けてお願ひすれば、肯いて下さらない事は無いと思ひますわ。何か江間さんに容す事の出来ないお憎しみでもお有りなると云ふ譯では無し、江間さんが何んな悪い事を阿母様に爲すつたと云ふのでも無し、唯染井さんを信用して居らつしやる所から、あの人の云ふ事が阿母様の理解を妨げてゐるのですわ。それも江間さんを嫌つて居らつしやるのでは無く、江間さんにあゝいふ女優の妹があつたりするのを嫌つて居らつしやるだけなのですから、事を分けてお話しすれば、屹度理解して下さいますわ。そして江間さんの人格さへ分つて下されば、私のお願ひだつて肯いて下さらない筈は無いと信じますわ。」

それは江間の決心さへ翻させたならば、母夫人の方は何んなにして、結局理解して貰へるものと獨りで決めてゐるらしかつた。若い純な心の彼女には、人の心理の複雑な陰影や屈折などには、氣の廻りようが無かつた。處女時代から女らしい感情を抑へくして、冷たい宗門の掟の中にオーロド



ミスで干固められて来た康子夫人が、今日も其のクリスチャン的の潔癖と、オールドミスの偏癖とから、江間の脊負つてゐるやうな運命や、彼の立つてゐるやうな境遇に對する嫌悪と反感（それは縁子の事がある爲めに一層強いので）が、何んなに極端なものであるかと云ふ事に、縁子は無論洞察の目など無かつた。

「縁、お前は然う信じて居るか。」と博士は暫くしてから云つた。一途に然う信じてゐる娘心を憫れむやうに、彼女の其の思入つた顔附をぢつと見遣つてゐる中に、獨りでに涙合しくなつて来る目を、彼は大きな手でべろりと撫で下して、「然うだ。お前を可愛がつて下さる阿母さんの事だから、お前がそれほどにお願ひするものを、怎や肯いて下さらないと云ふ事は無いだらう。萬事は好く行くに違無い。好く行つてくれなくては困る。」

「え、ですから、阿父様が江間さんの決心を翻してさへ下されば、それで何も彼も好くなるのよ。」と縁子は息込んで云つた。「ですが、阿父様は鎌倉へ行つて下さる？」

「行くとも！ 無論。」

「まあ、嬉しい！ 出嫌ひの阿父様が、私の爲に此前は伊豆までも出懸けて下すつたし、又今度は鎌倉まで。私、本當に阿父様にお禮を申上げますわ。」と彼女は父の前に深く頭を下げた。

自分の前へ深い感謝の頭を下げた娘の其の憐らしい姿を、黙つて慙らしげに眺めてゐた博士の小さい

目には、薄く涙が滲んで来た。

「いや、運命の徒らと云ふのか、意外の事から、江間の居處の知れたのも意外だ。」と博士は暫くしてから云つた。「然し江間には氣毒だ。私は自分の悴が爲出来した過失を、親として當然謝罪をするだけでも鎌倉へ出向かなくてはならない。況て悴が過失傷害を加へた其の被害者が、今まで行方を捜しても知れなかつた江間であつて見れば、仍更ら一刻も放つて置く譯には行かない。私は直ぐ出懸けよう。そして第一に朔郎の親として、江間の前へ謝罪しなければならぬ。それから江間の先輩として、希望ある將來を社會の外に葬らうとして居る不心得な青年を、私は腕盡くでも引立て、來なければならぬ。」

博士は日に照り附けられた赭顔を眞赤にして力むと、手近のダフリヤを一本又押し折つた。

中止

博士は今朝丁度康子夫人が鎌倉の別荘へ行つたのを幸ひ、彼女が向ふに居る中に自分達も行つて、江間の決心も翻させれば、夫人にも同時に納得させられるものなら爲せたいと思つた。で、夫人と行違ひにならぬやうに出懸けるのを急いだが、丁度午時なので、縁子と一緒に簡単な食事を済まして、



そしてスキードの軽い脊廣服に着更へてから、著作室へ入つて大事な原稿だけ始末をしてゐる處へ、生憎來客があつた。それは博士の最も親しい學友の一人で、劇の研究に造詣の深い文學博士であつた。學問の方面は違ふのだが、甚く氣の合つた二人が落ち合へば、毎も決まつて話が長かつた。

縁子は氣が氣では無かつた。早く行かなければ、俊作が居なくなると云ふ譯でも無ければ、纏まる話が纏まらなくなると云ふ譯でも無いのだが、それでも氣が急かれた。早く父から話をして貰つて、俊作の決心を翻さない間は、彼女も氣が落着かないのである。それに今朝鎌倉へ訪ねて行つた母夫人が、初めて今度の出來事を知つて、そして其の對手が俊作だと分つたとしたら、仍更ら早く父に行つて貰はなければ氣懸りであつた。然も父の處へ來た其の客は、書齋へ通つたきり、三十分経つても一時間経つても、歸る氣勢は無かつた。縁子は自分の部屋で立つたり坐つたり、時計を見たりして、獨りでじり／＼してゐた。それを又訝しさうにして、染井がうそ／＼覗きに來るのも腹立しかつた。彼女は幾度と無く著作室の手前の入側まで行つて見たが、吹込縁の突當りの入口はびつしやり閉まつたまま、何時其のドアが開くやうにも思へなかつた。耐りかねた彼女は手袋も穿め、スカーフも掛け、手提を垂ら下げたまま、スリッパを引掛けて著作室の窓下へ廻つて見た。中では父と客との話聲が弾んで、折々笑聲さへ交つて聞える。縁子は父の其の屈託の無ささうな笑聲を聞くと、譯も無く腹立しく、怨めしく、悲しくさへなつて來る。

「本當に阿父様は、人の氣も知らないで！」彼女は焦れつたさうに肩を揺すりながら口の中で云つた。「話に氣を取られて、時間の經つのも忘れて居らつしやるんだもの。餘り暢氣だわ。あのお客様のお話の長い事は、不斷から分つてゐるのだから、今日は是々で出懸けなければならぬからと、前以て斷つてお置きになれば可いものを。御自分が彌張りお話好きだものだから、好い氣になつて對手になつて居らつしやるのよ。暢氣過ぎるわ。」

縁子は餘程、父を呼び出して催促しようかと思つた。

「まあ、そんな事が！」と彼女は直ぐ思ひ返して、獨りで赧くなつた。「私も何て飮みの無い。こんな所を染井に見られても恥かしいわ。」

縁子はそつと窓下を離れて邊りを見廻すと、案の如く後ろの植込の蔭に染井の姿がちらと見えて直ぐ隠れた。彼女は急いで自分の部屋に歸ると、机の上の置時計が丁度二時半を指してゐた。それから十分ばかりして、漸う書齋の客は歸つたのである。

「阿父様、最う直き三時なのよ。」縁子は玄關へ客を送り出した博士が、最う一度書齋へ引返すのを廊下に待ち受けて、目を涙含ませながら云つた。「何時までも何時までも話し込んで居らつしやるんですもの。私、待遠しくつて待遠しくつて、悲しくなつて了ひましたわ。」

「然うか、最う三時か。ぢや、直ぐ出懸けよう。些つと待つてくれ。何有、何うせ最う遅くなれば、



私も一晩別荘へ泊めて貰ふのだ。」

博士はそゝくさと又著作室へ入つて行つたが、今度は直きに出て来た。濃茶の中折帽子を冠つて、カルゼの間着のオーバコートに手を通しながら、後ろから焦れつたさうに手傳ふ緑子に、調かふやうな、詫るやうな、何方附かずに云つた。

「何うもお待遠様だつたね。さ、出懸けよう。」

博士と緑子は、女中や仲働や小間使や、染井に送られて玄關を出た。

今朝は夫人が急に思立つて鎌倉へ行くし、行違ひに緑子が歸つて来たと思ふと、今度は博士までが邸を慮にして出懸けるので、召使達も何か譯がありさうに思つたが、染井は仍更ら怪訝でならなかつた。彼は博士と緑子とが花鳥から歸つて、午飯を済ますと、是から直ぐ鎌倉へ出懸けるのだと聞いて、自分は午から學校へ行く筈であつたのも歇めて了つた。そして博士の來客中緑子に附き纏つて、執拗く鎌倉行きの意味を根掘り葉掘りしたが、緑子は唯母も出懸けたから、父も誘つたよけだと云つて、それ以上に對手にならなかつた。染井は無論それだけでは納得しなかつた。例の左の臉をぼち／＼隠かせながら、冷たく光る目で疑ぐり深く緑子の様子を見てゐた。それは目ばかりで無く、絶えず其の細い眉尻をびり／＼させたり、肉の薄い小鼻や耳朶をひく／＼させるのが、丁度昆蟲が何か嗅ぎ出さうとして觸角を動かしてゐるやうに、人には分らない不思議な本能がそれには働いてゐるらしく思へ

て、緑子は氣味が悪かつた。そして此の氣味悪い人間が自分達の間に居る限り、自分達は此後も決して幸福では無い事が、其時の彼女にはまさ／＼と豫感されたのである。博士と緑子を玄關へ送つて出た召使達が皆引込んで了つてからも、染井は一人後に残つて、式臺先にすつと生えたやうに立つてゐた。博士父子の姿が長い砂利路のカーブの向ふに見えなくなつてからも、彼は彌張り其處に突立つたまゝ、さも二人の姿が彼の目には未だ見えてゐるのを見送りつゝあるかのやうに、ちいと正面を切つて瞳も動かさなかつた。そして時々思ひ出したやうに左の片方だけで、ぼち、ぼちと瞬きした。

必要以外には大業な乗物を好まない博士は、其次の横須賀行きの汽車の發車時間までには、結構電車で間に合ふので、俾も呼ばなかつた。身輕な間着の洋服に煩い外套の釦を外して、洋行時代に求めた金の胴輪附きの、象牙の握りの手擦れた紅木のステッキを突いた博士と、鹽精のバッグを片手に、白の絹緞のパラソルを翳した緑子とは、赤皮の半靴と、フェルト入りのゴム裏草履とで、大粒な玉川砂利の上を軽く踏みながら、表門近くまで来た時、氣立ましくベルを鳴らし合つて、二臺の幌俾が威勢よく入つて来た。

「阿父様、又お客様でせうか。」と緑子は情無い聲をして父に囁いた。

「然うかも知れない。」と博士も弱つた顔をして立留まつた。



「ちよいと、留めて頂戴。」

先の俵が博士父子と擦れ違ひさうになつた時、不意に幌の中から聲を懸けた。それは彌榮子の聲であつた。車夫はベルを鳴らす暇も無く慌て、轆を控へると、後の俵は危く突懸けさうになつてたじたと留まつた。

「車夫さん、最う宜う御座んす。此處で降りて下さい。」

其の車夫さんと呼んだ後の俵の聲は康子夫人であつた。車夫が轆を卸すと、幌の釦を外すのを待ちかねたやうに、自分で膝掛を取つてひらりと俵を降りた彼女は、手早く大島のコートの下から蒸口を探つて、定めめの賃錢を拂つた。俵は二臺とも東京驛から乗つて來たのである。

「伯父様、只今。大變長遊びを致しまして。」

「お、最う歸つたのか。私も縁と一緒に是から鎌倉へ出懸ける所なのだ。」

前の俵から降り立つた彌榮子が、博士に挨拶してゐるのを押退けるやうにしながら、夫人は急込んで云つた。

「貴方、何も彼も縁子からお聞きでせうね。」

「何も彼もと云ふと？」博士は夫人の其の氣色ばんだ顔を見ると、自分も思はず顔を燈めて、「朔郎が爲出來した事か。」

「え、然うです。本當に飛んだ事を爲出來してくれたんですね。私彼方らへ行つて初めて知つて、仰天して了ひました。」

「本當に飛んだ事だ。」と彼は嘆息して、「私もそれを聞いて、是から鎌倉へ出向かうとして居るのだ。」

「貴方は朔郎さんが怪我をさせた對手が、誰だか御承知の上で行らつしやるのでせうね。無論貴方には、縁子が何も彼も打明けてお話し申したでせうから。」と皮肉らしく云つて、夫人は父の後ろに小さくなつてゐる縁子をじろりと見遣つた。

「朔郎が怪我をさせた對手は、江間俊作だと云ふ事は縁子から聞いた。」

「だから、貴方は縁子も連れて、御自身で鎌倉へお出向きなさるのでせう。」

「對手が江間俊作であるから、私が自身で行つては可けないと云ふのか。」

「いゝえ、可けないなどとは申しません。私にはそんな事を貴方に申上げる権利はありませんから。」と夫人は突懸かるやうに云つたが、はつと氣が附いて、少し悄けながらも、思入つた調子で、「けれど、私は貴方が鎌倉へ行らつしやるのを、お留め申したので御座います。幸ひと怪我也輕くて、最う殆ど全治したと云つても宜しいやうな様子ですし、それに當の責任者の朔郎さんも残つてゐる事ですから、貴方も縁子も、今日はお見合はせなすつて頂きたいと思ひます。」

「自分の俵が過失傷害を犯した。告訴されれば處罰も受けなければならぬ刑事犯である。それだの



に、被害者が江間であるからと云ふので、其の加害者の父たる私が……江間の舊知で無ければ左に右、舊知の間である以上、一應の挨拶をする必要は無いだらうか。」と博士は怒りを抑へく云つたが、強く首を掉つて、「いや、然うで無い。私は加害者の親として、被害者の知人として、此場合知らん顔をして済ます事は出来ない。いや、や、知人であると無いとに拘はらず、對手が江間であらうと誰であらうと、私は當然被害者の前に頭を下げて、自分の倅の過失を謝さなければならぬ。自分の倅の過失に對する穩便な所置を謝さなければならぬ。それが人間の義理であり、又、私の義務でもあるのだ。」

「あゝ、困つた事になつて了つた」と夫人は悲しさに獨語ちて、「好い鹽梅に片が附いてゐたものを、こんな思懸け無い事から又引懸りになるなんて、何たる事ぞ。貴方も考へて見て下さい。女だてら人殺しをした者の子ではありませんか。そんな者に夢中になつて、貴方でも縁子でも今だに未だ思ひ切つて下さらない。私は考へるだけでも、そんな不名譽な事は耐りません。」

「で、私が鎌倉へ行くのを留めると云ふのか。お前は親として當然果たさなければならぬ義務を、人間として當然果たさなければならぬ義務を、私に缺かせようとするのか。」

「私は貴方が鎌倉へ行らして、江間さんに義理をお果しなさるだけでは済まないのを恐れるのです。母親は藝者あがりで、お加けに人殺しをして牢死をする。同胞はと云ふと、一人は身持の自墮落

中止

一六六

な女優で、一人は因果報にでもありさうな、牢の中で生れた子だと云ふのぢやありませんか。それを染井さんから云ひ立てられて、一言の辯解も出來ずに、それきり自分で身を隠して了つたのぢやありませんか。當人でさへ然うして自分で人前を恥ぢるくらゐ淺ましい日蔭の者を、貴方と云へば、遮二無二明るみへ連れ戻さうとなすつて、此前も私に隠してまで骨を折つて居らしたのであります。今度もそれが案じられます。貴方が江間さんにお逢ひになるのは、それが怖いのです。何うぞ私のお願ひですから、此のまゝお引返しなすつて下さい。」

「私は私自身の意志を尊重したい。私はお前に然うまで私の自由を束縛されたくない。」

「いゝえ、私は決して貴方の自由を束縛するものではありません。決して貴方の意志を尊重しないのではありません。そんな意りは毛頭御座いません。けれど、唯秦家の名譽を思ふからお留め申すのです。貴方の體面を思ふから申上げるのです。貴方は私の苦衷は少しも察して下さらないで、唯若い者の云ふまゝになつて、江間のやうな者に御分別も無く騒いで居らつしやる。貴方は家の爲めを思つてこんなに心配してゐる私の苦衷を無にしてまで、江間のやうな穢らはしい者を家庭に近づけたくて居らつしやるのですか。」

「穢らはしい者とは何か！ 假にも一人の人間を指して、穢らはしいなどとは以ての外の冒瀆である！」と博士は眞赤になつて怒鳴つた。

中止

一六七



「然し、穢らしいものは穢らしいですから。」と夫人の聲も甲走る。不斷は何事も笑つて済まさうとする濃厚な博士も、今日ばかりは夫人の執拗を憤らすには居られなかつた。邸内でこそあれ、何時人が来るかも知らない通り路である事も忘れて、殊に夫人は體面とか體裁とか云ふ事を最も氣にする不斷のお人柄も忘れて、二人は激するまゝに高聲で云ひ募つた。曩から博士の後ろにおろくくしてゐた縁子が、見かねて父を宥めると、彌榮子も傍から夫人を宥めた。そしてこんな處で果し無く云ひ争つてゐる事も出来ないの、博士も胸を撫すつて一先づ引返す事にした。

四人が連れ立つて玄關へ來た時、曩博士と縁子とを見送つた染井は、未だ其時と同じ姿勢で、同じ式臺先に彌張り生えたやうに突立つてゐた。そしてつい今の曩、鎌倉へ行くと云つて出懸けたばかりの博士と縁子とが、思懸けない康子夫人や彌榮子と一緒に歸つて來たのを見ると、彼はすつと立つてゐた上半身を初めて動かして、丁寧に頭を下げながら和たりと笑つた。それは博士と縁子とが途中から引返す事を豫期して、其時まで其處に待つてゐたのが、豫期通り歸つて來たのを、それ見ると啾るやうな、そして氣味好さうな、満足さうな、そして又何か心で頷くやうな、依體の知れない不思議な微笑であつた。

「お歸りなさいまし。」と云つて、下げた頭を靜に擡げた時には、最う其の不思議な微笑の痕は、彼の

顔から拭つたやうに消え失せてゐた。

四人が玄關を上つて、ぞろ／＼と奥へ入つて行つて了つてからも、染井は彌張り其處にぢつと突立つてゐた。そして最う一度其の不思議な微笑を和たりと洩らすと、其のまゝ音もさせずに玄關の敷居框を上つて、すつと消えるやうに自分の部屋へ入つて了つた。

### 雨の明くる日

此の三四日、毎日じめ／＼と降り續いた秋雨が、夜明け方に漸と霽ると、雨上りとは思へないほど乾いて透き通つた濃い空の色も、朝寒の身に沁む冷たい空氣も、最う悉かり秋の深い事を思はせた。負傷後彼は一ヶ月近くも、病院住みの單調な朝夕を續けて來た俊作は、今朝も毎もと變らぬ寢臺の上で、毎もと同じやうに目を覺ましたのであつた。彼の若い肉體は、傷部の癒着も早ければ、衰弱の恢復も早く、熱も疾うから出なくなつた。未だ繃帯こそ取らないが、最う一週間ばかり前から、人手を借りずに自分で自由に寢臺の上り降りも出来るし、一人で外へ散歩にも出るやうになつた。長い間寢臺の上に横はつてゐた學句なので、少し急いだりすると、動悸や息切れがして苦しかつたが、ぶらぶらと靜かに歩いてゐる分には、大した疲労も感じなかつた。單調な病院生活には、何よりの氣晴らし



である其の散歩も、此の三四日降り籠められて出来なかつた。彼は病室の窓に立つて、暗い寒さうな海面を眺めたり、廊下へ出て、庭の常葉木へしよぼくと降り注ぐ冷たい雨脚を眺めたりして、退屈な時間と、鬱陶しい日を過ごした。

此朝俊作は毎もと比べて寝坊をした。毎もは五時か五時半には決まつて目が覚めるのであるが、今朝は目を覚ますと、直ぐ取上げて見た枕頭臺の上の銀側の懐中時計は、七時を大分過ぎてゐた。昨夜眠附くのが遅かつた所爲でもあるが、能く眠られるだけ體が健康になつたのである。彼は毛布の中から手を伸ばして取上げた時計を、又元の處に置いた。時間は七時を過ぎてゐても、起きて何を爲ようと云ふ當も無ければ、何う爲たいと云ふ望みも無い。で、毎日々々見飽きるほど見慣れて、何處の隅には何んな形の汚染があつて、何時頃には何處へ何う光線が反射すると云ふ事まで、宙で覚えてゐるくらゐ見慣れた、其の漆喰塗りの白い天井をまじくと彼は見詰めてゐた。

今は最う回復期の患者は、附添ひも要らないくらゐで、看護婦も曩から病室には居なかつた。静野も五六日前から小坂村の家へ引擧げてゐて、一日置きぐらゐに見に来ては、暗くならない中に歸つて行く。近頃の俊作は獨りの事が多かつた。自分でもそれを望んでゐた。獨りで寢臺の上に轉がつたり、海傍を歩いたり、時には林の方へ入つて行つて見たり、其の氣儘な、そして閑寂な生活が、彼に取つては今まで覺えない安易さで、涙含ましいほど懐かしい境地であつた。然し自分の運命や、前途

や、妹の静野や多賀子や、それから博士の事だの、緑子の事だのを考へると、それこそ一日も斯うしてちつとしては居られないやうな心持になるので、成るべく自分で考へないよう考へないようにと努めてゐた。そして出来るだけ今の其の安易な、閑寂な境地に心を浸してゐる事を願つた。そして是から後も出来るならば、静野と二人で此の病院生活のやうな單調な、無爲の生活を送りたいものだと思つた。何事も考さへしなれば可い、考へれば心も波立つ。一度び波立つた心は、更に心の波を立てて、其處に人間の未練も起れば野心も動く。考へないといふ事は丁度眠つてゐるやうなものである。何うかして考へずに、思はずに、目を開いて眠つてゐるやうな生活を續けたいものだと思つた。それより外には、自分の是から先の長い生涯を消して行きやうが無いやうに、彼には思へた。

「好い天氣になつたやうだ。久振りで海岸でも散歩しようかな。」

俊作は寢臺の上に仰向きになつて、後頭部を枕に埋めたまゝ、目はまじくと天井を眺めながら、耳には懶いやうな單調なリズムの、然し力強いハアモニイの擴がりを有つた波の音を聞きながら、熟睡から覺めた甘怠いやうな寝起きの頭の中で然う思つた。けれど、毛布の中に温々と伸ばした體を動かさうとは爲なかつた。何處か近くの裏山で、目白が高音を張つてゐるのが聞える。

其處へ、此の病室を受持つてゐる年の若い、愛相の好い、肥つた看護婦が箒を持って入つて來た。「江間さん、お目覺めになりましたの？」と彼女は毎もの和こくした顔を枕許から覗かせて、「今朝



は能くお睡りになりましたね。最う直き御食事になりますよ。」

「悉かり寢坊して了つた。今起きようと思つてゐた所なんです。」

俊作は看護婦が手を貸さうとするのを断つて、獨りで起き上ると、寢臺を降りて寢衣を着更へた。

そしてタオルとシャボンとを持つて、楊枝を使いながら洗面處へ行つた。それから緩く口を嗽い

たり、顔を洗つたりして室へ歸ると、奇麗に最う掃除が出来てゐた。寢臺の上の掛布團と毛布は、振

の方へきちんと折り畳まれ、ごちやくと色々な物の載つた枕頭臺の上も、極り好く片附けられた。

そして窓々のカーテンを絞つて、硝子戸が悉かり開け放つてあつた。爽やかな朝の海氣と、明るい麗

かな光線とが室の隅々まで流れ込んで、俊作の寝起きの頭を一度に清々しくさせた。彼は窓際に立つ

て、高く澄み切つた空や、日に輝く廣い海の上を曠々と見た。それから雨擧句の濡れた砂濱

が暖かい水蒸氣を立て、乾いてゐる中に、最う朝前に一稼ぎして歸つて來た漁師達が、舟を引上げた

り、網を干したり、忙しさに立働いてゐるのを懐しさに見遣つた。然うした朝の輝かしい活々し

た物象を眺めてゐる中に、彼は其の恵み深い大自然の前に跪つて感謝したいやうな沁々した心持に

なつて、暎の中が獨りでに熱くなつて來るのを感じた。

旋て俊作は看護婦が運んで來た朝飯を済ました後で、新しく敷布を取更へられた寢臺の上に坐つて、

彼自身が願つてゐるやうな覺めながらの眠りに似た、何にも考へない時間を一時間餘り送つた。そし

て十時少し過ぎた頃、ぶらりと病室を出て、病院の裏木戸から直ぐ前濱へ降りて行つた。

冬近い十一月の末とは云へ、眞南を受けた雨上りの濱邊は、ぼか／＼と春のやうに暖かであつた。

能く晴れた明るい濱には、能く風いだ海がのたり／＼波打たせて、長い／＼渚に其の白い笹縁が日に

光つて續いてゐる。時季が時季なので、人も餘り出てゐなかつた。渚へ引上げた漁船の中や、乾いた

砂の上で網を繕つてゐる漁師の外には、出養生に來てゐるらしい病身さうな男や女が、久振りの天氣

に咬かされて、ぼつり／＼歩いてゐる姿が見える。それは人間と云ふ者が如何に小さなものであるか

を思はせられるやうに、廣い濱邊にぼつり／＼と小さく動いて見えた。

俊作は暫く歩いてゐた後で、少し憊れた體を、吹き寄せの砂山の小陰へごろりと休ませた。丁度浪

の腕りのやうな長く盛れ上つた其の砂丘を後ろに背負つて、眞面に日射しを受けてゐると、綿入に袷

羽織の體がしつとり汗ばんで來るほどの暖かさであつた。彼はハンカチーフを頭に敷いて、高い空を

仰ぎながら、廣い海を眺めながら、そして暖かな日光を浴びながら、爽やかな海氣を呼吸しながら、

彼の其の覺めながらの眠りを其處で又味はつてゐた。穏やかな波の音は、丁度其の覺めながらの眠り

を文すかのやうに、懶い單調なりズムを間斷無く繰返してゐる。